入つて困つちまふわ。あんた、それだけのお金を貰つても厭かねえ。千兩つてば、口で云やあ大したこともないやうだけど、眼の前へ並べられて御覽な。一寸石があるからねえ。』と、誘ひかけるやうにいふ。

お歌は、あの今戸さんが千兩は扨て置き、十圓のお金だつて器用に出す風かいと胸の中では嘲笑ひながら、

『でも、私、そんな大層なお金なんか頂けるだけの柄ぢやないんですから、まあ、そのお話は姐さんにお預けしときますわ。いろ〳〵先のことも考へてみて、若しお世話になるやうでしたら、又改めて此方からお願ひに出ますわ。今のところぢや私どうしてもそんな氣になれないんですものの。』と、お茶を濁すやうにいふ。

京枝は煩く駄目を押すやうに、

『何うしてもかねえ、私やほんとにいゝと思ふんだがねえ。そりやあの方は年も老つてるし、男前も悪いけど、でもそれだけの埋合はせはお金の方でつかあね。埋合はせがつくどころぢやない。うんとお剩錢が來るよ。ほゝゝゝゝ。』と態とらしく笑つて、『ねえ、お歌さん。全くのところ私や板挟みになつて弱つちやつてるんだから、あんたもう一度考へ直してみて呉れないかねえ。今

日明日とは云はないから、ゆつくり考へて、何とかしてお呉れよ。それでなけりや、第一私、もう今戸さんへお出入りが出來なくなつちまふもの。』

八の三

お歌はもう京枝が何を云つても、いゝ加減な返事ばかりしてゐた。何う口說き落とさうとしても、滿足な返事さへしないので、京枝もしまひには取附き場がなくなつて、いくらか氣を悪くしたやうな風で、默り込んでしまつた。

そのうちに師匠も下りて來る。中入りも濟んで、いよ〳〵お歌の出番になつたので、お歌は春に手傳つて貰つて、肩衣をつけた。ちやんと着つけをしてみると、もうすぐに腋の下が汗ばんで來て、脇腹には氣味の悪いほどじと〳〵と汗が流れてくる。

師匠は片肌をぬいで風を入れながら、

『お歌、まあ、高座へ上つて御覽、そりや大した溫氣だよ。今夜が一番だねえ。簾が上ると、もうむうツと來るんだもの。』と、いふ。

お歌も笑つて、

『お師匠さん、かうしてゐても汗が出るんですもの。今夜は眞から暑いんですわねえ。』と、云つて、飴湯を一杯のんで、そのまゝ高座へ上つていつた。

お歌のその晩の語物は『柳』で、彼女は得意のものながら、それだけに骨が折れた。彼女の喉の工合がどうもよくないので、初めッから氣をつけて、聲を盜んで語つた。さうしなければ後の方へいつてきつと調子をやつてしまふに相違ないので、初めの方は巧みにかすめてやる工夫をした。

高座からみると、聽客席にはお客の顏が隅から隅迄ぎつちりつまつてゐた。ふッとみると、正面の棧敷には木内と並んで、四十格好の、漁師のやうな顏をした男が坐つてゐる。越後の白飛白を着て、兵兒帶をしめてゐる格好がいかにも田舍びてはゐたが、それは今も話のあつた北海道から來てゐる興行師の藤野に相違なかつた。藤野はじいッと眼を据ゑて、さも驚いたやうな顏で、お歌の方ばかり見惚れてゐた。時々木内に向つて何事かひそ〳〵話しかけてゐる樣子が、お歌には可笑しくてならなかつた。

お歌は棧敷から、それとなく順々に方々の客の顏をみていつた。毎晩つゞけて來てゐる客も澤山あるとみえ、同じ場所に同じ顏が來てゐるのをお歌は商賣柄眼敏く見つけたのであつた。さうした客に投げ與へる一瞥にどれほどの價値があるかといふこともお歌は長年の經驗でよく知つてゐるので、熱心に語つてはゐながら、反面ではいろ〳〵に心遣ひをしなければならないのであつた。それは女藝人の弱いところでもあれば、又面白いところでもあつた。

お歌はお柳の口說きも無事に語りつゞけて、客の感嘆する聲や拍手の音に唆られながら漸次と先へ先へと調子を高く運んでいつた。和田四郎の出になつてからが、ひどく骨が折れたが、併しそれでも氣が乘つてゐるので、躓くやうなことは少しもなかつた。

その時、ふッとみると、丁度側棧敷の下の柱のところに、お歌は或人の姿を見附け出した。と、彼女は何うしたのか、自分の胸が搖られるやうに輕く躍つてくるのを覺えた。

八の四

ふッとお歌の眼に映つたのは、相川の姿であつた。そこの側棧敷の下はいつも客の込み合ふところなので、その晩も暑苦しく客と客との顏が重なつてゐた。その中で相川は鳥打帽を眼深に被つて、少しうつむき加減にしながら、じいッとお歌の藝に聞入つてゐた。

相川は今夜もたつた一人であつた。今迄眼につかなかつたところをみると、彼は態々客の後へ

隱れてゐたものらしく、何かの拍子に思はず顏をあげたところをお歌に見られてしまつたのであつた。

お歌は何かしら氣になつて耐らないので、ともすると、相川の方ばかりじろ〳〵みてゐた。相川も自分が見られたことに氣づくと、又前にゐる老人の陰へ隱れてもう再び顏をあげなかつた。

お歌はさうした相川の行動が變に思はれてならなかつた。晩になると、もういつも芳町邊へしけ込んでゐて滅多に家にもゐないやうな人が、何うしてかう毎晩つゞけて寄席へ來て呉れるのであらう。それも公然でゝも來ることか、いつも人の後へ隱れて、こそ〳〵聞いてゆくのである。人一倍藝事の好きらしいあの相川のことであるから、それも一方から考へれば不思議ではないかも知れないが、併しお歌にはさうした相川の仕方に何か意味があるやうに思はれてならないのであつた。お歌はさう考へてくると、決して惡い心持ちはしなかつた。

やつとのことで無事に一段語り終つて、割れるやうな拍手の音に追はれながら高座を下りてくると、もう師匠はひと足先に歸つてゐて樂屋には京枝とお春と見習ひの女が一人ツきりしか殘つてゐなかつた。

京枝は緣端の方へ出て、さつきの通しものゝ殘りのバナヽを剝いて食べてゐたが、お歌が下り

てくるのをみると、彼女は氣味の惡い位にや〳〵愛想笑ひをして、

『ねえ、お歌さん。今夜の『柳』は大した出來だつたねえ。喉が惡いんだからもうちつと不自由なところがあるかと思つて精々アラを拾つてみたけど、これッていふ穴はひとつもないんだもの。お師匠さんも今しがたまで聞いてゐて、すつかり嬉んでお歸んなすつたのさ。私ももうしみ〴〵感心しちやつたわ。あんたやつぱり藝質がいゝんだねえ。』と、見え透いたやうなおべんちやらをいふ。

お歌はせつせと手拭で體を拭いて着換へをしながら、

『どうも有難う。姐さんにそんなに讃められると、私や何んだか氣味が惡くなりますわ。讃めて置いて、あとで又今戸さんの一件でどかんと來るんぢやありませんの。ほゝゝゝ。』と、一本突ツ込んで口だけで笑つて、『さ、どりやそれぢや今夜は又降られないうちに歸りませうかねえ。どうもお世話樣でした。それぢや私お先に先禮しますわ。』と、云ひ捨てゝ、彼女は支度が出來るとずんずん樂屋口の方へ出ていつてしまふ。

京枝はそれをみると、慌てゝ立つて來て、

『あら、お歌さん。一寸お待ちよ、どうせ同じ道なんだから一緒に行かうぢやないの。』と、云つ

て後から追駈けてくる。

八の五

お歌は又京枝に捕まると煩いので、態と聞えない振りをしながら細露路の溝板のうへを小走りにとこ〳〵出ていつたが、それでも京枝は追駈けて來て、

『お歌さん、お待ちッたら、待つとくれよ。』と、後から聲をかけてやつと追付くと、笑ひながら、

『お歌さん。何んぼ何んだつて、そんなに邪慳にしないだつていゝぢやないかね。どうせ同じ電車に乘るんだもの、一緒に歸つて呉れたつて、私や罰も當るまいと思ふよ。』と、恨みがましくいふ。

お歌も仕方がなしに笑つて、

『いゝえ、姐さん、私、さういふ譯ぢやないんですけれど、あの、昨夜も碌に寢てゐないでせう。ですから今夜は早く家へ歸つてゆつくり寢度いんですの。この暑さに寢が足りないと、それこそ體が參つてしまひますからねえ。』

お歌はさう云ひながら露路を出て、表通りの方へ曲らうとしたがその時、ふッとみると、看板の出た木戸の外のところに、異樣な人影がしよんぼり立つてゐる。客はもうすつかり歸つてしまつたあとなので、そこいらは妙にがらんとして、下足番が札を揃へる音ばかりが藥師のお堂の方までも響いてゐる。その中へ白ッぽい羅のうへから、絽明石のやうな羽織を着て、鳥打帽子を眼深に被つたその男は、影のやうに立つてゐるのであつた。

お歌は變な男だとは思ひながらも、氣が急いてゐるので、別に眼にもとめずにずうッと行き過ぎようとすると、その時、その男は一歩此方へ近寄つて來て、唐突に、

『お歌さん！』と、呼びかける。

お歌は吃驚して、初めて眼をこめてみると、看板の燈火の射した中で、眞面に此方をみながら、にいッと笑つてゐるその顏は、思ひも掛けない相川さんだつた。

お歌はそれをみると、譯もなくはッとして、そこへ立止まりながら、

『あら、旦那。まあ……』と、云つたッきり、先の口がきけなかつた。

相川は笑ひながらもう一歩側へ寄つて來て、

『お歌さん。今歸るんですか。』と云つて、京枝の方へ氣を兼ねながら、『いや、私もどうせ歸るんだから、そこまで一緒に行きませう。どうもえらい暑氣で、別にお變りもありませんか。』と、厭

に他人がましくいふ。

お歌もそは〳〵と胸ばかりが彈んで、

『え、有難う御坐います。別に。』と、云つて、『あの、又毎晩寄席へ被來つて下すつて、ほんとに有難う御坐います。一度御挨拶に伺はふと思つてゐましたんですけれど、却つて御迷惑になると可けないと思ひましてねえ。』と、いふ。

相川は笑つて、

『いや、私も此頃は暇だもんだから、つい好きな道でねえ。はゝゝゝゝ。』と、云つて、そのまゝお歌のあとからついてくる。

三人はやがて茅場町の通りの方へ出ていつた。

八の六

明るい電車通へ出ると、相川は京枝の方ばかり氣にしながら、お歌と肩を並べて歩いてゐたが、やがて態と京枝を先へ遣り過ごすやうに歩調を遲らせて、その間が五六歩離れると、相川はお歌の方へ寄り添つて來ながら、

『ねえ、お歌さん、突然で何だが、實は一寸あんたに相談したいことがあるんだが、今夜は都合が悪いかねえ。』と、耳打ちをするやうにいふ。

お歌はあんまり唐突だつたのでどぎまぎして、

『え？　さあ、別に。』と答へたが、相川は疊みかけるやうに、

『あの、それでね、あんた。あの京枝さんがゐちや困るんだが、やつぱり一緒でないとあんたの方が工合が悪いだらうねえ。』といふ。

お歌はちらりと京枝の方をみて、

『いゝえ、そんなことありませんわ。私、實はあの人と一緒に歸り度くないんで、どうかして撒かうと思つてますのよ。』と、いふ。

相川はにやりとして、

『それぢや却つて都合がいゝよ。何んとかして別れちまふ工夫はないかねえ。』

先へ行つた京枝は、ふツと氣づいたとみえ、角のところで足を止めながら、さも迂散臭さうに此方をじろ〳〵振顧つてゐる。

お歌はもうすつかり心得て、態とそつちへ歩み寄つていきながら相川には構はずに、

『ねえ、姐さん。』と、京枝に聲をかけて、『ねえ、姐さん。あの私失禮ですけど、一寸此方と御一緒に他處へ廻らなけりやならなくなりましたから、姐さん、一足先にお歸りになつて下さいましな。』と、ぶツつけに云つてしまふ。

京枝はその顏をみて、少時の間默つてゐたが、やがてにやりとして、

『さう、そんなら仕方がないから私一人で歸るわ。』と、云つて、又じろりと相川の方をみながら彼には聞えない程な聲で、『貴女、これから何處へいくの？　何處か食べもの屋へでも行くんなら、私もお誘ひな。どうせ彼方はお客さんだらう。』と、眞顏でいふ。

お歌は一寸厭な顏をして、

『お客にやお客ですけど、一寸込み入つた話があるもんですから。』と、いふ。

京枝はお歌の耳へ口を寄せて、

『お歌さん、貴女、そんなことを云つたつて、私ちやんと知つてるよ。隨分だねえ。ぢやまあ一人で精々お娛しみ。私や折角いゝ割間になつてやらうと思つてゐたけど、貴女の方で撒くんなら撒かれて歸りますよ。ほゝゝゝゝゝ。』と、忌味なことを云つて、態と大きな聲で、

『それぢやお歌さん。左樣なら、又明日逢ふわ。』と、云つて、そのまゝ電車の停留場の方へ當て

つけがましく大股にとつとと歩いていつてしまつた。

お歌は口の中で舌打ちをして、そのあとを見送つてゐたが、やがてくるりと踵を返して、五六間先の電信柱の蔭へ立つて待つてゐる相川の方へ、小走りに歸つていつた。彼女の足調はさも嬉しさうにいそ〳〵してゐた。

八の七

相川はお歌が近寄つて來るのをみると、街燈の光の中で白い齒をみせて笑ひながら、

『どうだい、うまく行つたかね。』と、云つて自分も電信柱の蔭から出てくる。

お歌はにつこりして、合點きながら、

『え、到頭歸しちまひましたわ。あの人もいゝけど、ほんとに煩う御座んすんでねえ。』と、云つて、

『あの、まだしみ〳〵お禮も申上げませんで、ほんとに先夜は有難う御座いました。又いろ〳〵頂戴ものなんか致しまして、あんなことをして頂くと、私、却つて困つてしまひますわ。』と、嬌態をしながらいふ。

相川は事もなげに笑つて、
『いや、お禮なんか云はれると、私の方が恥かしいよ。まあ、そろ〳〵歩きながら話さうぢやないか。』と、云つて、ぶら〳〵深川の方へ向つて歩き出す。
お歌も彼に引添うて歩きながら、
『ねえ、貴女、今夜はお園さんは何うしまして？　御一緒ぢやないんですか。』と、ふッと思ひ出して訊く。
相川は此方を向かずに、
『え、今夜は誘はなかつたのさ。』と、云つて、何か思惑ありげに、
『ねえ、お歌さん。かうやつて歩いてゐても仕様がないから、何處かへ一寸上つて、ゆつくりひとつ話をしようぢやないか。何處がいゝだらう。』
お歌は相川の心を測り兼ねて、
『さあ、私、何方でも結構ですわ。旦那の被往る處なら何處へでもお伴致しますわ。』と、いふ。
相川は笑つて、
『ほう、此奴あしめたね。それぢや又鶴の家へでも誘惑するかね？』と、輕い調子で云つて、又

考へ直したやうに、『いや、あすこは可けない。お目附役が煩いからねえ。それよりも何うだい、いつそ中洲へでも行かうか？』
『さあ、私は何方でもよう御坐んすわ。私、お園さんにも逢ひ度いしますから。』
相川はそのまゝぶら〳〵歩きながら頻りに考へてゐたが、やがて又お歌の顏をみて、
『ねえ、お歌さん。あんたにや何だが、實は私、正直なことを云ふと一寸芳町界隈ぢや困ることがあるんで、お氣の毒だが、いつそのこと私の家へ來て呉れないか。私や御存知のとほり女房はなし、子供はなしさ。家にや店の者が三四人と、それに女中ッきりしきやゐないんだから、ちつとも氣の塞ることはないし、それに住居の方から入りや誰にも分りやしないからねえ。お園なんかもよく遊びにやつて來るんだが、店の者なんざまるで知らないのさ、だからいつそ家へ來て、二階で涼みながら話さうぢやないか。その方が第一人目に立たなくつていゝからねえ。』といふ。
お歌は素人の家へこんなに遲く行くのはさすがに氣がひけたが、併し厭だとも云へないので、
『え、何つてもいゝんですけれど、御迷惑ぢやありませんか知ら。』と、いふ。
相川は笑つて、
『迷惑なことなんかあるもんかね。それぢやさう極めよう。さ、さう極つたら此方だ。此處を眞

直に行つて左へ曲らう。』さう云ひながら彼はずんずん先へ立つて歩いていつた。

八の八

相川の家は南茅場町の通から、一寸奥へ入つた横丁にあつた。表はそこいらによくある仲買の店らしい、半西洋風の建物になつてゐて、その奥が住居になつてゐた。店と店との庇間になつた露路を入つてゆくと、左手に小格子をした粋な玄關がついてゐて、そこからみると、高い板塀のうへに二階座敷の硝子戸が見えてゐた。

家の中も萬事粋好みで、さう手廣な家ではなかつたが、六疊四疊半といつたやうな小間ばかり六つ七つはあるらしく、何處も鹽一本澤れてゐないやうにきちんと隅から隅まで形づいてゐた。飾りものや調度の類も凝つたものばかりで、さつぱりとして居心持ちがよく、お歌は獨りものでこんない〻生活をしてゐるのかと思ふと、今更のやうに相川の人柄が奥床しくみえてならないのであつた。

相川は自分で紙襖をあけて、

『さあ、お歌さん。ずつとお上りよ　二階の方がいくらか涼しいだらうから。』と、云つて、廻り

階段になつた上り口へ上つてゆく。

お歌は婆やがたつた一人出迎へに出て來たッきりで、外にはまるで人の氣勢もないので、すつかり氣が大きくなつて、そのま〻相川の後へ從いて上りながら、

『旦那、ほんとにい〻お住居で御坐んすのねえ。私、すつかり氣に入つてしまひましたわ。』と、浮々しながらいふ。

相川は笑つて、

『いや、私の家には汚すものがゐないから、いくらでも家の中が片づけて置けるんだよ。さ、まあ此方へおいで。』と、云つて、奥の立派な八疊の座敷へお歌を案内してゆく。

そこは木口もい〻し、茶風の床の間や、違棚のか〻りなどもいかにも凝つてゐる、天井の網代などもお歌にはひどく氣に入つてしまつた。相川は自分で次の間から絹の座布團をもつて來て、端近に敷きながら、今度は硝子戸を繰つて、

『いや、かうして置きや涼しいよ。此處からは川が近いんで、晩になると風は冷えるんだが……』

と、云ひ云ひ、お歌の方をみて、につこりやさしく笑ふ。

お歌はもう嬉しくて耐らないやうに、

『ほんとに、いゝお住居で御坐んすわねえ。こんなお家に被居つて、どうしてさう毎晩待合さんなんかへお出懸けになるんでせう。此處で晩酌でも召飲つて、好き勝手にして被居る方がどんなにいゝか知れませんのにねえ。』といふ。

相川はお歌と對向ひに坐りながら笑つて、

『はゝゝゝゝゝ。さうはいかないさ。いくら道具立てはよくても、婆やと小婢とたつた二人きりぢや何うにもならないからね。やつぱり色つぽいのが二人三人ゐて、お酌でもして呉れなけりや、ものが理に落ちていけないよ。はゝゝゝゝゝ。』

相川はさう云ひながら、折柄茶道具を運んで來た小婢に、

『おい、お豐、婆やにさういつて、酒の支度をして呉れないか。肴は有り合はせでいゝからな。早いとこで頼むよ。』と、命ずる。

お婆はまだ物珍しさうに四邊を眺め廻してゐた。

八の九

お歌は、さうしてゐるうちに家の中があんまり森としてゐるので、自分でも變な氣になつて來

て、

『ねえ、旦那。成る程かうして被居ると、お寂しいにやお淋しいでせうねえ。たつたお一人ぢや全くお話相手も御坐んすまいからねえ。』と、云つて、笑ひながら、『旦那、あなた何故奥さまをお持ちにならないんで御坐んすの。いくら何んだつて、これぢや御不自由なことも御坐んせうし、何かにつけて、お困りになるでせうがねえ。』と、いふ。

相川は煙草をとつて火をつけながら、機嫌がよさゝうに笑つて、

『いや、かみさんも持ち度いんだが、正直なことを云ふと來手がないのさ。はゝゝゝゝゝ。』

お歌は艶めかしい嬌態をして、

『あら、御笑談ばつかり。そんな來手がないなんてことは御坐んせんわ。旦那があんまり選り好みを遊ばすから、それでいゝ方がないんで御坐んせう。奥さんは又別だつて云ひますからもういい加減に難かしいことを仰有らずに、お持ちなさいましよ。それでないと何んだかかうやつてみてゐましても、物足りないやうな氣がしますわ。』お歌はそんな遠慮のない調子で口がきけるほど打解けてゐた。

相川は煙草の煙をふうつと吐いて、

『はゝゝゝゝ。私や何も女の撰り好みなんかしやしないよ。これだけ道樂をして來たんだもの、一緒に苦勞して呉れる心懸けさへありやどんな女とだつて一緒にならあね。』と、云つて、じいつとお歌の顏をみながら、『だがね、お歌さん、ほんとうのことを白狀すると、我々みたやうな相場師にや足手まとひが何よりも禁物さ。女房や小供がゐて、そいつにまつはられるとなると、とてもこんな水稼業はしちやゐられないからね。今日あつて、明日の知れないてえのは全く我々の境涯だからねえ。それだけに、女房になる女だつてうつかりしちやゐられないやね。』

『さう云やあさうですけれど、でもそんなことを云ひだしたら、生きてる人間は皆可けないことになつちまひますわ。いつ病氣になつてぽつくり行つちまふか知れやしないんですもの。』

相川は其額から眼を離さずに、

『はゝゝゝ。お歌さん、あんたも中々うまいことを云ふねえ。面白い。私や氣に入つたよ。』と、云つて、笑談のやうに、『それぢやどうだね、お歌さん。あんたひとつ思ひ切つて私の女房になつちや呉れまいか。あんたのやうに、稼人で、容貌よしなら、私やそれこそ大事にするぜ。はゝゝはゝ。』

『ほゝゝゝゝ。嬉しう御座んすねえ。是非さういふことにお願ひ致し度う御坐んすわ。』と、お歌

は艶かに笑つて、『相場師に女義太夫ぢやどうもちつとお題を頂きますの形が御坐んすわねえ。せめて旦那が糸屋さんか何んかですと、いくらか引懸りが出來ますけどもねえ。ほゝゝゝゝ。』

『はゝゝゝゝ。冗談ぢやない。話に下げをつけツこなしさ。面白い人だ。はゝゝゝゝ。』

二人が腹を抱へてゐるところへ、階下から先刻の小婢が酒の支度をして運んで來た。からすみの小皿に盛つたのや、ちよつとした佃煮のやうな肴などもひどく氣が利いてゐて、とても中處の待合の突出しなぞは及びもつかなかつた。

八の十

小婢が隣の間から紫檀の小卓を持つて來て、それを二人の間へ置いて、運んで來た酒の道具をその上へきちんと並べると、もう相川は盃をとつてお歌にさしながら、

『さ、お歌さん。ひとついかう。』と、いふ。

お歌はいきなり銚子を取り上げて、

『まあ、旦那。さう仰有らずに旦那から召飲れよ。私お酌を致しますから。』と、云つて、あべこべにその盃へ波々と注ぐ。

相川はそれをひと口にぐうッと呷つて、すぐにお歌にさしながら今度は自分が酌をしてやる。お歌は端に氣兼のある人はゐないし、相川とそれこそたつた二人對向ひなので、その晩の酒はいつになくうまかつた。で、つひいつもより過ごして、六七杯たてつゞけに飲むと、もう何だか氣が浮々して來て、無上に噪いでみたくなつて來た。彼女は頻りに相川に酌をしてやりながら、

『ねえ、旦那。それはさうとお園さんは、此頃どうしてゐますの。先達ての晩は何だかしみ〴〵話しが出來ませんでしたんで、私、聞き度いことも訊けなかつたんですけれど……』といふと、相川は外方を向いて、

『お園かい。彼奴は相變らずさ。何でも今日も店の方へ電話をかけて來たさうだけど、私が場へいつてゐて留守だつたもんだから……』と、いふ。

お歌はその顏をしげ〴〵みて、

『ねえ、旦那。私、變なことを伺ふやうですけど、一體旦那とあのお園さんとは、何う云ふんですの。お園さんは旦那のお世話になつてゐるんで御坐んすか？』と、正面きつて訊く。

相川はうす〳〵笑つて、

『さあ、どうだかねえ。世話をしてゐるといやあ、つまり月々高い金を取られて所謂旦那なるものにさせられてゐる譯だらうが、ねえ、お歌さん、私やもうちつと役がいゝ心算だよ。』と云ふ。

お歌は艶めかしい流眸をして、

『役がいゝつてと、何ういふんで御坐んすの？　でも無論關係はおあんなさるんでせう？』

相川は變に笑つて、

『さあ、さうみえるかね？』と、いふ。

お歌は又盃をとりあげてぐいと飲みながら、

『まあ、さうみえるかはないでせう。ほんとに憎らしう御坐んすのねえ。ほゝゝゝ。』と云つて、

『でもねえ旦那、いつかもお園さんは何んですか、旦那のことをそりや惚話てゐましたわ。ですから私、あの人はきつと旦那のお世話になつてゐるんだらうと、その時に目星をつけてしまひましたの。』

『はゝゝゝ。そこで惡事露顯か、併し私やほんとうのことを云ふと、あの女ぢやいくらも遣つちやゐないのさ。つまり客色といふ奴かね、氣障な奴だが。全くの處、私や旦那なんて大きな顏の出來る身分ぢやないのさ。それだけに私も、正直に白狀するといゝ夢もみたよ。はゝゝゝ。』と、笑つて、急に眼を落としながら、『だが、その夢ももういよ〳〵醒め際さ。お歌さん、聞いて呉れる

かい。』と、相川さんは何か打明け話でもしたさうに居坐ひをなをした。

八の十一

お歌は相川のその云ひ方がひどく譯ありげなので、團扇で煽ぐ手をやめて、

『まあ、何うしたんですの。何か私が伺つていゝお話なら、いつでも伺ひますわ。』と、捜りを入れるやうな顔をしていふ。

相川は少時の間あとさきのことを考へてゐるやうな顔つきをしてゐたが、やがて稍困つたやうに笑つて、

『ねえ、お歌さん。こりやあんただから打明けて話すんだから、どうか吳々も祕密にして置いて下さいよ。』と、改まつた調子で云つて、

『ねえ、お歌さん、實は僕、今度あのお園と切れようと思つてねえ、藪から棒にこんなことを云ひ出したつて分るまいけど、今お園の話が出たから、序にお話しするんだが、……』と、てれたやうに笑ひながらいふ。

お歌はきよとりとした顔で、

『まあ、旦那、今お園さんと出來た話をしてゐるのに、もう別れ話ですか。何んだか變ですわねえ。そんなことを云つて、私が眞に受けて眼の色を變へたところで、わツとお笑ひなさらうツて云ふんぢやないんですか。旦那も却々お人が惡うござんすわねえ。』と、態と話を逸らすやうにいふ。さう云ひながらお歌はまじ〳〵相川の顔ばかりみてゐた。

相川はそれを手で打消けして、

『いや、お歌さん、そんなんぢやないよ。あんたは譯を知らないから、そんな風にとるかも知れないが、それにはいろ〳〵面倒なことがあるんだよ。もうどうせ此處まで話してしまつたんだから、何も彼もぶちまけてしまふが、實は私からいふとおほきに器量がよくない話なんだが、あのお園奴、此頃どうもちつと臭いことがあるのさ。何でも朋輩に聞くと、お園にや何か出來て、今それで兩方がジヤン〳〵になつてゐるつていふんだが、さうと聞いちや私だつてさういつまで馬鹿な顔してあの女にくツついてもゐられないからねえ。そこで此方が逆手に出て、おさらばを極めてやらうと思つてゐるのさ。私も旦那といふ名儀にこそなつちやゐないが、それでも彼奴が看板を買ふ時なんぞにや一寸したこともしてゐるし、それに現金で何うかうついふんでなくても、もとを貸してやつて株でも可成握らせてやつてゐるんだからねえ。彼奴としたつてそれを考へり

や今更後足で砂も引懸けられた義理ぢやあるまいと思ふが、併しそいつあ未練な男の愚痴さ。だからもう何んにも云はずに反對に此方からすぱりと手を切つてしまふのが一番いゝと思ふんだ。で、私も今迄の引懸り上、一寸あんたにもそのことを相談し度いと思つてねえ。』と、いふ。

お歌はさうと聞くと、まさかに笑へもしなくなつて、

『まあ、ぢやあの、お園さんが別に何かこしらへたんで御坐んすつて？　そりや怪しからん話しですわねえ。私やまさかとは思ひますけど、でも旦那のお耳へ入る位なら萬更根のないことでも御坐んすまいねえ。』と、云つて、又盃を取上げながら、『尤もあの人は私達と一緒にゐる時分にや隨分浮氣な方でしたからねえ。いゝえさ、別に惡氣はないんですけど、つまり性分なんですわねえ。……』

八の十二

お歌はさう云ひながら、相川の顏をみて、

『ですけど、旦那、全くかういふ商賣をしてゐりや浮氣ぐらゐするのは無理はありませんわ。自分ぢや堅くしようと思つてゐても、端でさうはさせないんですもの。さうなるのもつまり皆さん

が惡いんですわ。ほゝゝゝ。』と、艶かしく笑つて『それにお園さんのやうに藝者なんかに出てゐりや猶ほのことですわ、旦那だつてもとを云へばやつぱりお園さんが浮氣だからこそ出來たんぢや御坐んせんか。ほゝゝゝ。』

相川は苦笑ひをして、

『いや、はや、何うも散々だねえ。折角此方の役をよくしやうと思つてゐたら、お歌さんに逢つちや型無しさ。』と、云つて、『併しそりや浮氣はまあ仕方がないとしても、土地で私の顏を潰すやうなことをするのはよくないと思ふんだ。そりやどうせ數にも足りない客かも知れないが、併し私だつてこれで一寸芳町ぢや年季を入れてゐるんだからねえ。それだのにまあ云はゞ驅け出しのお園なんかに背負ひ投げを食はされちや、私だつて、はあ、左樣で御坐いますかで引込んぢやゐられないからねえ。』

お歌は飽くまで笑談のやうに、

『ほゝゝゝ。大層お冠が曲つちまつたんですのねえ。そりや旦那の仰有るのも御尤もですわ。今迄にいろ〳〵お世話にもなつてゐるんでせうから、それを振り捨てゝどうのかうのツていふのは全くあんまり讃めた仕方ぢやありませんわねえ。』と、云つて、氣を變へたやうに、『それで旦

那、一體お園さんの浮氣の相手つていふのは何者なんで御坐んすの？』

相川は又盃をあけて、お歌にさしながら、

『さあ、それがお歌さん、飛んでもない奴なんだよ。あんたも知つてゐだらうが、落語家の小圓治ね、あいつなんだつていふから厭になつちまふぢやないか。人もあらうに、あんな女ッ喰ひの手のつけられないやうな奴に何んだつてまた、引懸つたらうと思つてねえ。私や全くのところお園の奴の了見が分らないのさ。』

お歌はさういふ相川の顏をしげ〳〵みてゐたが、やがてぷすりと噴き笑して、

『まあ、あの小圓治さん？　ほゝゝゝ。笑談ぢやありませんわねえ、あの人なら、何も浮氣どころぢや御坐んせんわ。それこそ燒木杭ぢやありませんか。旦那、ほんとにしつかりなさらなけりや駄目ですわよ。ほゝゝゝ。私や誰かと思つたら、ほんとにお園さんも惡い了見ですわねえ。』

相川はまじ〳〵しながら、

『それぢやお歌さん。お園は前からあの小圓治と關係があつたのかね。』と、眞顏で訊く。

お歌は盃を返しながら、

『ほゝゝゝゝ。關係があつた處ぢやありませんわ。もう三年程前に新聞でも散々浮名を唄はれた

仲なんですもの。ほゝゝゝゝゝ。』

八の十三

お歌はそれから相川に、お園と小圓治との過去の情事を細かに話して聞かせた。小圓治といふのは今でこそ一方の眞打ちで、相當に人氣ももつてゐるが、今から五年程前には、それこそ藝地の惡い藝人で、唯親爺の小圓があれほど賣出してゐるお蔭で、つまり家柄の子として高座でお茶を濁してゐたのであつた。一寸踊りがあるのでそれを賣物にやつと看板をつないでゐるやうな有樣であつた。

そのかはり一方では家に金があるだけに、道樂といふ道樂は片端からしつくしたのであつた。それに顏がのつぺりしてゐるので、女の間では相當にもてゝゐたので、彼は自分の手の及ぶ範圍の女は片端から荒して歩いたのであつた。

お園が小圓治と出來たのは、丁度本郷の若竹へかゝつてゐる時のことであつた。お園はその時分、師匠のところを失策つて、一枚看板で色物席へ二月程勤めてゐた。一座を組んでゐる時と違つて、第一體が自由なので、彼女はその間には隨分眼に餘るやうな浮氣もしたらしかつた。その

中で一番血道をあげたのが小圓治であつた。ひとしきりはもう一人とも席の方は見向きもしずに、伊香保へ山籠りをして浮世離れた乙な寸法で日を暮らしてゐたことなぞもあつた。お園は小圓治には隨分絞られもし辛い思ひもさせられてゐるのであつた。

あんまり亂行が募るので、昔氣質な親爺の小圓は到頭勘忍袋を切らして、小圓治に強意見を加へた。藝人の分際で、高座を忘れるやうなことぢや世間樣へ對して申譯がないと云つて、彼は小圓治を大阪の文左衛門のところへ追ひ遣つてしまつた。表面は修業といふのであつたが、併し小圓は野育ちな小圓治に、みつちり浮世のしほを踏ませ、見ず知らずの他人の中で性根も藝もすつかり立て直るやうにと、それを目宛に旅へ出してやつたのであつた。その爲めにいつかしらお園とも遠々しくなつて、この三年ばかりの間は切れたも同樣になつてゐたのであつた。

そのお園が又小圓治と燒木杭になつたと聞いては、お歌も稍呆れずにはゐられない。

『ほんとにあの小圓治さんに懸つちや、お園さんも又裸にされつちまふのは分つてゐるのに、やつぱり昔のことが忘れられないんですわねえ。困つたもんだ。』と、嘆息を吐くやうに云つて、『ねえ、旦那。それならそれで旦那の御了見ひとつで、いつそ切れておしまひなさいましよ。私の口からこんなことは云へませんけど、でも後で馬鹿な目を御覽になつても詰りませんわ。お園さん

の方がそんな氣なら、旦那だつて何も溫和しくして被居ることはありませんわ。』と、お歌は醉つてゐるので嗾しかけるやうに云つた。

相川は何か思惑ありげな眼つきをして、じいッとお歌の顏を見てゐた。

その時、階下で柱時計が十二時を打つのがかすかに聞えて來た。

九の一

お歌は昨夕はもう二時頃になつて、やつと相川の家を辭したので馬道の家へ歸つた時分には、彼此三時が過ぎてゐた。相川は女一人の夜道だからと云つて、態々自動車を呼んで呉たので、お歌は大威張でそれに乘つて歸つて來たが、ひどく醉つてゐたので、どう見違へたか、山谷の近くまで乘り過ごした。それから彼女はふら〳〵千鳥足で家まで歩いて歸つて來たのであつた。

酒がよかつたせいか、今日は宿醉をするほどでもなかつたが、それでもお歌は何んだか體がかツたるくて耐らないので、一日二階の居間でぶら〳〵寢たり起きたりして時を消してしまつた。そして夕方になると近所の風呂へいつて、ざつと汗を流して來て、いつものやうに夕飯の膳へついたが、何うしたものか、一口でも酒が飲みたくて耐らないので、階下の料理場へいつて自分でこつそり一本つけて來て、窓際の風の吹き通すところでちび〳〵一人で飲り出した。

その日は午頃から雨雲が出て、ひや〳〵した涼しい風が吹いてゐたが、夕方になると雲は益〻低くなつて來て、北西の空には、蒼白い電光がぴかりぴかりと光りだした。雨はあんまり香ばしくなかつたが、併し涼しくなるのが嬉しくて、お歌は今にもぽつりぽつりとやつて來さうな空模

樣を眺めながら、甘い酒を手酌でついでは、樂しみたのしみ飲んでゐた。

ぽうッといゝ心持になつて來ると、お歌の胸には昨夜の相川の家の出來事がぽつ〳〵思ひ返されて來た。何しろ昨夜は大變に醉つたので、もう歸り際のことなぞははつきり覺えてゐないといつてよかつた。何を饒舌つたのか、どんな話を聞いたのかさつぱり胸になくて、唯いつになく面白い一夜を送つたといふ氣だけが殘つてゐる。それだけに彼女は又何か失策でもしやしないかといふ不安があつて考へれば考へるほど安心がならなくなつて來た。

いろ〳〵に思ひ返してみると、お歌はもう歸るといふ時になつて足許が危いので、相川に抱へて貰つて、階段を下りたのを覺えてゐる。それから戸外へ連れ出されて自動車に乘るまでの間に、相川にじいッと抱き緊められて、接吻をされたやうな氣もする。その時、自分も譯もなく氣持がよかつたので、何か甘いことを云つて、彼の手をぎうッと握り緊めたやうな記憶も殘つてゐる。それに氣がつくと、お歌は何かしら胸がどぎ〳〵して來て、誰れもみてゐないのに一人でぽうッと顏を紅くしてしまつた。いかに醉つた上とは云へ、そんな取亂した姿を相川にみせたのが氣恥かしくて、お歌は相川の思惑を考へると、耐らなくなつて來た。

それにしても相川は何だつて又昨夜は自分をつかまへてあんな話ばかりして聞かせたのであら

う。今迄の引ッ懸りがあるとは云へ、お園と自分とは昔朋輩であつたといふ以外に何も深い關係がある譯ではないのである。それだのにあんな二人の關係を打明けて話して切れるの切れないのといふ相談まで持ちかけるとは、一體何ういふ性根なのであらう。それを思ふとお歌は又咽喉が狹くなるやうな氣がして、胸が擽られるやうに騒いで來た。

九の二

お歌は漸次と微醉機嫌になつてゆくに從つて、ふと相川が自分に惚れてゐて呉れるのではなからうかと思ふやうになつて來た。昨夜のあの素振りは、何うあつても何の氣もない人の素振りではなかつた。初めはあんなに笑談のやうな調子であつたのが、漸次としんみり生眞面目な話になつて來て、歸り際には隨分色めかしいことを云つたり、したりしたらしかつた。それを思ふとお歌は相川の心持ちが少しづゝ合點がいくやうに思へてくるのであつた。

お歌は驚へつて自分の胸の中を考へてみた。自分はあの相川に對して何の氣もないのであらうか。彼に對して唯ひゐきになる旦那といふ以外に、何も色つぽい心持ちをもつてはゐないであらうか。さう考へてくると、お歌は自分ながら自分の心持ちがよく分らなくなつてくるのであつた。

お歌は山谷で自動車の椿事があつて、それから吉原へ連れていかれて、初めてあの相川としみじみ話しをしてから今日に至るまでのことを、出來るだけ細かに思ひ返してみた。と、相川は今迄に唯の一度も自分に對して厭な感じを與へてはゐなかつた。それよりも寧ろ好いたらしい人として、いつも何かしら好い印象ばかり殘してゐるのである。もしあんな人にふッとしたことで云ひ寄られるやうなことがあつたら、自分はきつとその場のきつかけで浮氣をしてみる心持ちになるに相違ない。お園といふものさへゐなければ、いくら何をしたつて構はない人なのだからと思ふと、お歌は又かあッと頰へ血が上つてゆくのを覺えるのであつた。

お歌は何う考へてみても、相川に此方から戀しいと思つて摺り寄つていくほどまだ惚れてはゐなかつたが、併し誘はれゝば水に引かれて靡いていくだけの心持ちは充分胸に芽ざしてゐた。お歌は自體がかういふ商賣をしてゐるので、口のきゝ振りなどもひどく傳法で、摺れ枯らした女のやうな物腰も絶えずみせてはゐるが、併し男に對する經驗と云つては今迄に例の島田が最初で、しかも最後であつた。あざれた戀はしてゐながら體まで許したのは、たつたあの島田一人であつた。で、彼女は柄や素振の割に男に對する心持ちはまだ初心で男との深みへはまつた情事を想像する時には、何よりも島田のことが先づ思ひ起されるのであつた。相川のことを考へつめてゆく

と、彼女の心には又島田に初めて逢つた夜のことが恥かしく思ひ起されて、息のつまるやうな蠱惑が體中の血を啜のかすのであつた。

お歌がさうした色めかしい空想に耽つてゐるうちに、ふと階子段の方で、誰やらが此方へ上つてくる足音を聞きつけた。と、間もなく、上り口のところから、店の方のお隆といふ若い女中が顔を出して、

『姐さん、ちよつと。』と、呼ぶ。

お歌はそれを聞くと、うつかりしてゐたゞけに虚を衝かれて、

『お、吃驚した。何にさ。』と、云つて、そつちを振顧つた。

九の三

女中はそのまゝ部屋へ上つて來もしずに、

『ねえ、姐さん。あの、店二階で内儀さんが呼んで被居いますよ。』と、いふ。

お歌はいつにないことなので、眼を丸くして、

『何に？　店二階で叔母さんが呼んでゐる？』と、訊き直して、眉を顰めながら、

『何うしたつて云ふのさ。可笑しいぢやないか。叔母さんは何んだつて又店二階なんかへ出ていつたのさ。』と、粗雑な口をきく。

と女中は笑つて、

『いゝえ、ねえ、姐さん。お客様なんですよ。今しがた店へお二人連れで上つたお客様が、何んですか、途中で内儀さんに逢つたとかいふんで、戸外から内儀さんと一緒に歸つて被居つたんですよ。それで何んですか。姐さんに急な御用があるから、是非彼方へ來るやうにさう云つて呉れつて仰有るんで、私、お言傳けに來たんですわ。』と、いふ。

お歌は益分らなくなつて、盃を置きながら、

『お隆、もつとはつきり分るやうにお云ひよ。何んだつて？　叔母さんが途中で誰かに逢つて、それで家へ一緒に歸つて來たつていふのかい？　そのお客様つてのは、一體誰なのさ。』

『そりや私、知りませんわ。お市さんが番で出てゐるんだもの。』

『お市の番？　そんならお市を此方へ呼んどくれ。叔母さんも叔母さんだ。だしぬけにそんなことを云つて寄越したつて、店へなんぞ出ていけるもんかね。人を馬鹿にしてゐるよ。』と、もう突つ慳るやうに喧嘩腰になつてゆく。彼女は叔母のことつていふと、いつもこれなのであつた。

お隆はさう云はれると、膨れッ面をして、默つてそのまゝ階下へどたばた降りていつてしまつた。

お歌は、きつと叔母が又變な男でも引張込んで來て、自分を賣物に出すのだらうと思ふと、腹が立つてならなかつた。かういふ商賣をしてゐる家のことであるから、高座へ出てゐる自分で人氣が賣れるんなら、顏を知つた客の座敷へはちよい〳〵顏を出したつていゝのだが、叔母の聲がかりではそれも出る氣になれなかつた。殊に相手が何ものとも分らない客であつてみれば、猶更いやであつた。

お歌は又銚子を取り上げて、手酌でちび〳〵やりながら今度は叔母のお國のことを思ふともなく思つてゐた。お國は此節でも例の辯士の月岡天洲といざこざしてゐて相變らず三日にあげず家を明けてゐた。昨夜も公園へ活動をみにいくとか云つて出たまゝ、今まで歸つて來ないのであつた。お歌ももう此頃では高座があるだけにそつちへ氣を取られてゐて、もう叔母の亂行もさのみ苦勞にもならないのであつた。自分に差し障りの來ないことなら、何うでも勝手にするがいゝやと、いふやうな氣になつてゐた。

さうしてゐるところへ階下からは今度はお市が代り合つて上つて來た。

九の四

お市は世馴れた女なので、にこ〳〵笑ひながら二階へ上つて來ると、媚びるやうに

『あら、姐さん。お一人で召飲つてゐるんですか。まあ、御馳走樣。ほゝゝゝゝ。』と、お世辭を云つて、『あの、唯今はどうも相濟みませんでした。私が來りやよかつたんですけど、一寸忙しかつたもんですから、お隆さんに賴んで、何んだか姐さん、御機嫌を惡くなすつたんですつてねえ。ほゝゝゝゝ。』と、顏色を讀むやうにいふ。

お歌はさう云はれると今迄ぷり〳〵してゐた顏つきのやりばがなくなつて、苦笑ひをしながら、『いゝえ、さう云ふ譯ぢやないんだけれど、お隆があんまり譯の分らないことばかし云ふからさ。』と、云つて、盃を置きながら、『一體お客樣つて誰れなのさ。』

お市は笑つて、

『それがね、私もよくは分らないんで御坐んすけれど、何んでもでつぷりした、立派な男の方ですの。お話の樣子でみると、お內儀さんが淺草公園あたりでばつたりお逢ひなすつて、御一緒に此方へ連れて被居つたらしいんですわ。お身裝の樣子なんか、どうしても兜町か、魚河岸の方ら

しう御坐んすよ。』

その言葉を聞くと、お歌は昨夜の今日だけに、何といふ所因もなく、ひよつとしたら相川が訪ねて來て呉れたのではあるまいかとさう思ふと自分でも可笑しい位、胸がどき〳〵して來て、少し居坐ひを直しながら、

『それでお客様つてのは、その男の方お一人きりかい？』と、訊く。

お市はその顏をまじ〳〵みて、

『え、いゝえ。もう一人女の方が御一緒ですの、その方がお内儀さんとお知り合のやうで、男の方は默つて、お酒ばかり召飲つて被居いますわ。』

お歌はさうと聞くと、きつと相川がお園を連れてやつて來たに相違ないと思ひ込んでしまつた。お園は高座へ出てゐる時分には、よく家へも遊びに來たので、叔母のお國とも顏見知りの仲であつた。それであるから、きつとお國が途中で逢つて、家へ二人を案内して來たのであらうと思ふと、お歌はもうゐても立つてもゐられなくなつて來た。

お歌はやがて膳を彼方へ押し遣つて、

『お市。それぢや私、すぐに行くからつてさう云つて置いて頂戴』と、いつて、そのまゝ立つて

押入の中から鏡臺を引出して、すぐさま化粧を直しだした。

それにしても相川はどうしたのであらう。昨夜はあんなにお園のことを云つて置きながら、又肩を並べて淺草邊へ浮かれ出すとは、どうしたのであらう。それとも相川は此處の家を訪ねる下心があつて、一人では極りが惡いので、案内役にお園を連れて來たのではあるまいか、お歌はそんなことまで考へながら、一人でせか〳〵身支度をした。

やつと身じまひが濟むと、お歌は帶をしめなをして、やがていそ〳〵しながら店二階の方へ出ていつた。

九の五

店の正面についてゐる大階段を上つて、突當りの廊下の左手のところに、やつぱり入れ込みの、八疊の座敷があつた。粗末な葦戸がはまつてゐるので、中の客の顏はよくみえなかつたが、そこからお國の醉つた癇高な聲が聞えるので、お歌はきつと此處に違ひないと思つて、躍る胸を抑へながら、

『叔母さん、此方？』と、聲をかけてみた。

と、中では叔母の語聲がふつりと止んで、
『お歌かい？　さ、お入り。珍らしいお客様が被居つてゐるんだから。』と、いつにない猫撫で聲でいふ。
お歌は少許ためらつたあとで、そうッと葦戸を開けてみたが、それと一緒に彼女は悸乎として、
『あら……』と、云つたつきり、そこへ立竦んでしまつた。相川と思つたのは大間違ひで、その座敷の眞中に、膳を控へて、圓座になつて飲んでゐるのは、今戸さんに京枝に、それから、叔母のお國であつた。
お歌はあんまり思ひ懸けなかつたので、此方がひどく氣拙い心持ちがして、そのまゝ呆れたやうな顏でぢろ〳〵三人の樣子をみてゐると、京枝は先づ口をきつて、
『お歌さん。昨晩は。』と、云つてにこ〳〵笑ひながら、『ねえ、お歌さん。まあお入んなさいよ。今日はほんとに不思議なことでねえ。公園でひよつくら叔母さんにお眼にかゝつちやつて、到頭此方へお邪魔に上つたんですのさ。ねえ、お歌さん。さあ、此處へ被居いよ。』と、手で招く。
お歌はもう醉つてほうッと紅くなつてゐる京枝の顏をみると、むか〳〵ッと腹が立つて來たが、それでもやつと抑へて、仕方がなしに京枝と叔母の間へいつて坐つたが、叔母もひどく御機嫌で、

少し座を開きながら、
『ねえ、お歌。お前が私に何んにも打明けて話して呉れないもんだから、今日は私、とんだ恥を搔いちやつたぢやないか。お前、此方の濟邊さんに御贔屓になつてゐるんなら、何故そのやうに私に聞かせてお呉れでなかつたんだい？　まさかと思つたもんだから、私、すつかり此方を失策つちやふところだつたぢやないか。ほゝゝゝゝゝ。』と、いふ。お國ももう大分醉つてゐるらしかつた。
お歌は何が何とも分らないので默つて、きよとりとしてゐた。
今戸さんは氣味の惡い位にや〳〵しながら、
『お國さん。まあさう唐突に云つたつて、お歌さんにや分りやしねえやな。すつかり事の次第を筋道をつけて話さねえぢや、まるで籤から棒だからね。はゝゝゝ。』と、云つて、お歌の方を向きながら、
『お歌さん。先夜はどうも大變に醉つちやつて、はゝゝゝゝ。まあどうか勘辨してお呉んなさい。私やどうも醉ふと、事を壞すんでねえ。はゝゝゝゝ。』と、埒もなく笑つてばかりゐる。彼はその笑ひで何事もごちやまかしてしまはふとしてゐるらしかつた。

お歌はその時初めて今戸さんの顏を眞面にみたが、今戸さんはいつになく髯を剃つて、白上布の細かい縞の單衣に、献上の紗の帶をしめて、りうとした風裝をしてゐた。

九の六

お歌は何んとも返事のしやうがないので、唯默つて外方を向いてゐたが、今戸さんはそれでも盃を突き出して、

『はゝゝゝゝ。お歌さん。まあ一つ献じませう。そんなに愛想ツ氣のねえ顏をしてゐねえで、もう先夜のことは、さらりツと水に流して貰ひ度えね。私や何も惡い氣でやつたんぢやねえんだから。』と、云つて、機嫌を取るやうに、『それにねえ、お歌さん。全く緣てものは異なものさ。私や今迄ちつとも知らなかつたが、このお國さんてのは、お前さんの叔母さんなんだつてねえ。私やさうとは夢にも知らねえもんだから、今日は話がまるで頓珍漢になつちやつて、大笑ひをしたのさ。京枝さんがゐて呉れなけりや、それも分らず仕舞ひになつちまふ處だつたが、幸ひこの人がゐて、叔母さんだつてえことが分つたんで、全く私も變な氣になつちやつてねえ。はゝゝゝゝ。』

京枝も面白さうに笑つて、

『ほゝゝゝゝゝ。先刻の出會ひはほんとに不思議で御坐んしたねえ。お歌さん、まあ、お聞きよ。實はね、今日一寸良人の用で旦那のお宅へお邪魔をしたのさ。ところが旦那が仲見世の金田へ御飯でも食べにいかうツて仰有つて下すつたもんだから、私も好い氣になつてお伴をして來ると、公園でばつたり此方の叔母さんにお眼にかゝつちやつたんですのさ。私やまだあんまりお馴染がないんで、そのまゝ御挨拶だけして行過ぎやうとすると、旦那がね、おい、お國さんぢやねえか、久濶だなあ、とおいでなすつたぢやありませんか。私吃驚しちやつてねえ。眞逆旦那が此方を御存知な譯はないし、それともひよツとかしたら、私の知らないうちにもう叔母さんへ迄渡りがついてゐるのかと思つて、呆氣に取られてゐましたのさ。そのうちに漸次樣子を伺つてみると何んのこつてせう。旦那は此方とはもう二年ばかり前にちやんとお馴染になつて被居るんだつていふんだもの。ほゝゝゝゝゝ。』

お國はその話を引取つて、

『ねえ、お歌、お前は知るまいけれど、此方の渡邊さんはね、私が向島で待合を出してゐた時分に、よく被居つて下すつたお客樣なのさ。私やあんまり思ひ懸けないんで、吃驚しちやつてねえ。お國さんと仰有つた時にや眼ばかりきよろ〳〵させてゐたのさ。全く御緣てものは何處で何うつ

ながつてゐるか分りませんよねえ。』と、さも感に入つたやうにいふ。

お歌は端でがあ〳〵云はれるので、もう頭ががあんとするやうな氣がして、むづ〳〵してゐた。今戸さんにさゝれた盃をそのまゝにして置く譯にもいかないので、彼女はぐッと呑んで又今戸さんへ返したが、彼はそれを相格を崩して受けながら、

『いや、お國さんにや昔隨分厄介になつたもんだよ。それに惡事の數々も皆握られてゐるんで、頭は上らねえよ。はゝゝゝ。』

お國もその顏を見返して、妙ににやり〳〵笑つてゐた。

九の七

叔母のお國はやがて盃を取上げて一杯ぐうッと飲んで、今戸さんへさしながら、

『ほんとに、さう云へば旦那もそつちの方は隨分箸まめで被居いましたねえ。私や今でも覺えてゐますよ。ですけど、私やいつも若い妓の見立てが上手だつて、お讃めに預かりましたねえ。ほほゝゝゝ。』

『はゝゝゝ。かな、[illegible]ッと云ひッこなしさ。今考へると、冷汗の出るやうな奴があるよ。

はゝゝゝゝ。』今戸さんは一人で嬉しさうであつた。脂ぎつた顏は一層てか〳〵光つて、鼻の紅いのがいかにも下卑てみえた。

京枝はお太鼓をつとめるやうに媚びをみせて、

『ほんとに旦那も隨分お遊びになつたんですねえ。まさか向島まで伸して被居いようとは、知りませんでしたよ。今迄にお費ひなすつたお金を積んでみたら、それこそ大した額になるでせうねえ。考へてみりや惜しいもんですわ。年に五軒づゝ貸家を建てゝいつたとしても、今頃はまあ大した上りでせうねえ。あゝ厭だ、厭だ。良人なんざお道樂をし度くつたつて、出來ないんですから、可哀想なもんですよ。』と、云つて、今度はお歌の方を向きながら、『ねえ、お歌さん。それはそうと昨夜はどうして？　貴女何時頃家へ歸つたの？』と擽つたさうな眼つきをしながら訊く。

お歌は態と平氣な顏で、

『さうですねえ。もう彼此三時頃でしたか知ら。』と、いふ。

京枝は大業な驚き方をして、

『まあ、三時？　呆れたもんだわねえ。一體何處へいつてそんなに遲くなつたのさ。そんなこと

を云つて、何處かへしけ込んで、朝歸りぢやないの。』と、猾さうな眼つきをしていふ。
お歌は笑ひもしずに首を振つて、
『いゝえ、兎に角歸るにや歸つたんですの。あれからお客様のお宅へ伺つたもんですから。』
京枝は疑はしさうに、
『何うだか知れたもんぢやないよ。まさか、あんた、お客があんたのやうな人を家へ連れていく譯はないもの、そんなことは素人にお云ひよ。ほゝゝゝゝゝ。』
今戸さんは傍から口を入れて、
『おい、おい、京枝さん、穏かならねえ話をしてるぢやねえか。どうもお耳障りになつて可けねえ。お歌さんは昨夜お嬉しみがあつたのかい。』と、いふ。
京枝は手柄顔に、
『えゝ、えゝ、旦那、まあお聞きなさいましよ。昨夜はお歌さんにもうすつかり毒氣を抜かれちまひまして、ねえ寄席から一緒に歸らうつてんで、電車の方へ出て來ると様子のいゝ粋な男の人が表看板のところへ立つてお歌さんを待つてるぢやありませんか。お歌さん、私もどうせ歸るんだから、一緒にそこいちまで行かうかなんかで、茅場町の角まで出て來たのはいゝんですが、彼

處で私や體よく撒かれちやつたんぢやありませんか。私やもう口惜しう御坐んしてねえ、よつぽど後をくツつけていつて、男の正體を見屆けてやらうかと思つたんですけど、それも餘り罪だからと思ひましてね。ほゝゝゝゝゝゝ。』

九の八

今戸さんはそれを聞くと、一寸厭な顔をしたが、それでも態と笑ひに紛らかして、
『はゝゝゝゝゝ。これでお歌さんも中々やるんだねえ。口ぢや堅いことばかり云つてゝ、そんなのを陰で拵へとく手際は鮮かなもんだ。』と、云つて、氣懸りさうに、『それで京枝さん一體その相手は何者なんだい？』と、訊く。
京枝はじろ〳〵お歌の顔をみながら、
『それがねえ旦那、私にやどうしても見當がつかないんですわ。一寸みた處ぢや兜町あたりの人かとも思へるんですけど、でも拵への澁いことや、言葉つきのやさしいところをみると、藝人ぢやないかとも思ふんで御坐んすよ。』
『藝人といつても、いろ〳〵あるが、まさか八木節や浪花節語りぢやあるまい。はゝゝゝゝ。』と

今戸さんは何處か口惜しさうにいふ。
京枝は笑つて、
『ほゝゝゝゝ。まさか、何んぼ何んでもねえ。』と、云つて、自分でもよく見定めがつかないやうに、
『あの、もし藝人とすりや舊派の役者ですよ。きつとさうに違ひない。ねえ、お歌さん、さうでせう。』と、いふ。
お歌は態と焦らすやうに、唯にいッと笑つて、
『冗談ぢやないわ。』と、云ひながら、傍を向いてしまつた。
今戸さんはお歌と京枝の顏を見比べながら、
『どうも自烈ッ度えなあ。京枝さん、お前さんもそれほど苦勞人でゐながら、その男の商賣が見分けられねえとは、あんまり情なさ過ぎるぢやねえか。ひと眼みたつて、藝人か藝人でねえか位は分りさうなもんだ。』
京枝はそれを抑へるやうに、
『ですからさ。私きつと舊派の役者に違ひないと思ふんですよ。誰つてことは分らないけど、たしかにさうですよ。ねえ、お歌さん、もう白狀してしまつたらどう？　あんたどうせこの私に手證を握られちやつてるんだもの、つまらない隱し立をすると、あとが煩いよ。ほゝゝゝゝ。』
お國はそれを傍から引取つて、
『まあ、お歌がそんな氣の利いた眞似をしてゐますの？　ほゝゝゝゝ。そりや初耳ですねえ。この子は一寸私が何かすると、もう眼の敵にして、がみ〳〵云ふ癖に、やつぱり陰ぢやこそ〳〵うまいことをしてゐるんですねえ。道理で、どうも此節は樣子が變だと思つたら、やつぱり私の眼は黑う御坐んすよ。ほゝゝゝゝ。』
今戸さんは口惜しさうに、
『蛇の道や蛇かね。はゝゝゝゝ。どうも油斷も、透きもならねえ世の中になつて來やがつたぜ。こりやうつかりしてゐると、飛んだどぢを踏ませられてしまふ處さ。おい、お歌さん。お前さんももうそこまで種が上つちや四の五の云へた義理ぢやねえ。今度はいよ〳〵私の番だぜ。いゝかい。よろしくお賴ん申しますぜ。はゝゝゝゝ。』と、笑つて、又盃をさす。
お歌は氣がつかないやうな振りをして、態と外方を向いてゐた。
京枝は見兼ねて、

『ちよいと、お歌さん。そんなにほんやりしてないでさ、旦那がお盃を下さるぢやないか。』と、云つたが、その聲で初めて氣がついたやうに、お歌はしぶ〳〵盃を受けた。

九の九

京枝は、お歌が今戸さんからさゝれた盃をそのまゝ疊のうへゝ置くのをみると、銚子をとつてそのうへゝ置き注ぎをしやうとしながら、

『お歌さん。こりや罰盃よ。さ、ぐうツと思ひ切りよく飲んで、彼方へお返しなさいッたら。』といふ。

お歌はその顏を蔑むやうにみて、

『姐さん、そんな宴會のお客みたいなことをいふのはお止しなさいよ。私、そんなに飲めやしませんわ。姐さんだつてこれから寄席があるんぢやありませんの。』と、いふ。

京枝は笑つて、

『もう寄席なんざ、どうだつて構やしないよ。どうせ私が車輪でつとめた時に、お客樣は感心して叩いちや哭れやしないんだもの。ほゝゝゝ。』と、云つて、『ねえ、お歌さん、それはそれとし

て、ほんとに昨夜の一件を白狀しておしまひな。何にもそんなに隱すことはないぢやないの。ねえ、お歌さん、私やちよつと氣になることがあるんだから、焦らさずに云つておしまひよ。』と、せがむやうにいふ。

お歌はさういはれると、態と片意地な顏になつて、

『姐さん、もういゝぢやないの。そんなこと何うだつて。』と、煩さゝうに云つて、又仕方なしに盃をとりあげて、それをぐツと飲んで今戸さんへ返す。

京枝はそれでもまだ思ひ切れないやうに、

『何うだつてよかないわよ。あんなところを見せ付けられて、このまゝぢや引退れないわ。ねえ、旦那。』と、今戸さんの方をみる。

今戸さんも大きく合點いて、

『さうだとも。大きにさうだ。第一そんなのがあるんなら、何にも私達にかう手をかけさせることはねえんだ。ねえ、お歌さん。お前さんもそれだけ荒してるんなら野暮は云はねえもんさ。どうだい、今夜は寄席が閉ねてから、ひとつ氣を變へて、水神へでもお伴を致しませうかね。はゝゝゝ。』と、腹を搖すぶつて笑ふ。

お歌はぶんといふやうな顏をして、
『どうぞ。』と、云つて、又外方を向いてしまふ。
今戸さんは一寸厭な顏をして、
『はゝゝゝ。どうも氣の惡い返事だなあ。ならば手柄に討つてみやてえ形で。始末にいけねえ。』
と、云つて、酒ばかりがぶ〳〵飲みながら、『ねえ、京枝さん、此方もさうなりや意地づくだぜ。今夜はひとつ是が非でもこのお歌さんを誘惑しやうぢやねえか。ちやんと叔母さんのお許しも出てゐるんだもの。私も腕に撫をかけて、厭應なしに水神へお伴つてなことにしたいもんだ。なあ、お國さん。』
お國も面白さうに笑つて、
『ほゝゝゝ。如何やうなりと御存分に。何にもかうなりや旦那の腕ひとつでさあね。昔のあの意氣でおやんなさりや、こんな子の一人掌くらゐへのつけちやふでせう。向島時代の箒さんのあの意氣でねえ。ほゝゝゝ。その代りどうか水神迄はお紙幣で道をつけて被往つて下さいよ。私達があとから拾ひにいきますから、ねえ、京枝さん。』お國はさう云ひながらぢろりとお歌の方をみた。

九の十

今戸さんは得意さうににた〳〵笑つて、
『はゝゝゝ。お國さん、まだ出來もしねえ前から、もう紙幣の話かい。平民の子は直とこれだ。困つたもんぢやねえか。はゝゝゝ。』
お國はその顏をみて、
『だつて旦那。今時は何事もさうですよ。私やもう此間からお紙幣のことぢや申譯のないほど苦勞してゐんですから、山を見懸けりやすぐと喰ひつきまさあね。ほんとうならこのお歌を稼業にでも出して、埋合はせをつけて貰ふんですけど、まさかさうもいかないんでねえ。だからこれの體でお錢になることなら、私やどうしたつて一口乘りますわ。ねえ、京枝さん。』と、笑談ともつかず、眞面目ともつかないやうに云ふ。
京枝も合點いて、
『ほんとにさうですともさ。旦那だつてお歌さん故なら、何にも糸目はおつけなさらないに極つてまさあね。ほゝゝゝ。』

今戸さんは太い手で脂顔をつるりと撫でゝ、
『はゝゝゝゝ。まるで鉢ケ森の雲助だなあ。がん張れ、がん張れか。はゝゝゝゝ。』と、機嫁がよさゝうに笑つて、『なあ、お國さん、お前さんも昔とちつとも變らねえね。その方の腕はあの時分から大したもんだつたからなあ。おい、お歌さん、お前も氣をつけねえと可けねえぜ。この叔母さんの手に懸つちや、とんだ食ひものにされッちまふぜ。はゝゝゝゝゝ。』
『食ひものはないでせう。此頃のやうだと、此方が反對に食はれさうですからね。』と、云つて、お國はそのまゝ銚子を取り上げて、
『さ、旦那。まあ、お酌をしませう。』と云つて酌をしてやる。その銚子はもう殘り少になつてゐた。
それをみると、お歌は何食はぬ顔で、
『叔母さん、今度は私が下へいつて、お銚子を取つて來ませう。』と、云つて、ついと空いた銚子をもつて立ち上り。
今戸さんはそれを押へて、
『おい、お歌さん。お銚子は姐さんに任せときなせえ。そんなことを云つて、遁げていつちや可

けねえぜ。』と、いふ。
お歌はそれでも廊下へ出て、
『遁げや致しませんよ。一寸私も下へいく用がありますから。』と、云ひ捨てゝ、それなりとんとんとんと足音も荒く階下へ下りていつてしまつた。
お歌は料理場へいつて、そこにうろ〳〵してゐるお市に銚子のお代りを命じて、今度はその足で自分の居間へ歸つていつた。そして手早く外出着の浴衣に着換へて、身支度もとゝのへ、そゝくさしながらそつと裏口から戸外へ飛出してしまつた。彼女はうか〳〵してゐると何んな目に逢はされるか分らないので、家にゐないのが一番だと思つて、遁げてしまつたのであつた。
戸外へ出てみると、もう日は沈んで、燈火の美しい宵闇が涼しい風と一緒に何處の町にも下りて來てゐた。お歌は叔母や京枝が皆して自分を食ひものにしやうとしてゐるのがよく分つて、何も彼も無上に腹が立つてならなかつた。向ふがそんな氣なら、此方だつて負けるものかと思ふと、彼女は今迄に覺えなかつたやうな、激しい反抗心が胸一杯に溢れてくるのを覺えた。

十の一

それからはもう日に日に、今戸さんの追窮は激しくなつていつた。初めは唯面白づくで變つた女を先から先と手に入れてゆく氣でやつてゐるのかと思つてゐたが、併し日が經つにつれて、今戸さんが眞劍にお歌に惚れて、どうしても一度は自分のものにしなければ置かないといふ意氣込みでかゝつてゐるのが、お歌自身にもよく分つて來た。その證據にはあれほど吝ツたれだと云はれる今戸さんが、錢金には殆ど糸目をつけないし、それに京枝の話によると、今戸さんはもう十年ほど前に奥さんを亡してそれからずうツと獨り身でゐるのだが、お歌の方さへ承知なら家へ入れても構はないといふ上氣せ方ださうであつた。今戸さんは今では五十萬からの大身代で、地所家作も皆自分のものだし、何ひとつ不自由のない、それこそ三井さんや岩崎さんのやうな奢つた生活向きだと、京枝はその時にもそんな媒入口をきくことを忘れなかつた。

今戸さんは一度お國に逢ふと、それからはもう三日とあけず天定へ飯を食べにやつて來た。その間に二人のなかにどんな話があつたか知れないが、併しお國のことであるから、どうせ唯でゐる譯がなかつた。きつと何かお歌を種に、うまい話を持ちかけては、京枝と二人でたんまり溫ま

つてゐるに相違ないと、お歌は目星をつけてゐた。

今戸さんは天定へ來る度に、お歌をその座敷へ呼んだ。呼ぶばかりではなく、何の彼のと云つては、秋口に着るお召だとか、片側帶だとかいふやうなものを持つて來ては置いていつて呉れる。お歌はさうされゝばされるほど今戸さんが厭になつて、しまひには今戸さんの名を聞いても、ぞうッとするやうな心持ちがした。反物なんぞを貰つても、無論、自分では身につける氣なぞはしないのでお歌はいゝ加減にして、突返さうと突返さうとしてゐた。お國はそんなことをしては勿體ないといつて、いつもそれを階下へ持つていつては、自分の箪笥へしまつて置いた。

今戸さんの追窮が激しくなればなる程、お歌の心持ちは反對に相川さんの方へ傾いてゆくのであつた。相川さんはあれ以來、どうしたのかふつつりと寄席へも姿を見せなくなつてしまつたので、お歌はそればかりが氣に懸つてならなかつた。今夜は來てくれるか、今夜は來て呉れるかと思つて、樂屋へ入るとすぐに高座の棧窓から客席の方を覗いてみるのだが、相川さんは毎晩お歌に失望させるのであつた。

あんまりお歌がそは〳〵してゐるので、師匠の團糸までが怪しんで、寄ると觸ると彼女を冷評したりした。さうなると妙なもので、益々心がもだ〳〵して來て、人にそやされる爲めに却つて

深みへ落ちてゆくやうな氣がしてくるのであつた。

お歌はどうかしてもう一度相川さんに逢ひ度いと思つてゐるうちに、いろ〳〵な出來事の爲めに妨げられて、相川さんの家へ訪ねていくことさへも出來なかつた。そのうちに日は一日と經つて、もう宮松亭での上席も千秋樂近くになつてしまつた。

十の二

もう明日が千秋樂といふ前の晩お歌は何うしても相川に逢ひ度くて耐らないので、寄席がかぶるとすぐに又京枝が一緒に歸らうといふのを、いゝ加減に撒いて、せか〳〵しながら藥師樣の裏へぬけていつた。見覺えのある細路次へ入ると、お歌はそれでも胸がどき〳〵して來て、何んだか氣恥かしいやうな心持がしてならなかつた。

相川の家の格子先まで入つていくと、此前來たときと同じやうに家の中は森と靜まり返つてゐる。ひよつとしたら留守なのではないかと思ふと、まだ案内も乞はない前からお歌はもう輕い失望を覺えて、やがて我れにもなく相川の家の前をすうツと通り過ぎてしまつた。

振顧つて、庇間から二階を見上げると、そこにも燈火の影はなく硝子戸がぴたりと閉まつてゐ

て、人のゐさうな氣勢もなかつた。あの遊び好きな相川のことであるから、きつと又今頃は何處かの待合へでもいつて、遊び呆けてゐるのかも知れない。いつそさうと知つたら、今日寄席からこつそり電話でもかけて置けばよかつた。さうすればあの人のことだから、きつと支度をして待つてゐて呉れたどらうものを、それを思ふと、お歌は自分の手ぬかりが我れながら口惜しかつた。

併しさうは云ふものゝひよつとしたら相川が家にゐるかも知れないと思つて、兎に角一度樣子を訊いてみやうと思つた。で、お歌は又引返して、相川の家の前へくると、そこの格子先へ立つて、

『御免下さいまし。』と、態とつくり聲をして、案内を乞ふた。

と、中からは葦戸をあけて、此間の小婢が取次ぎに出て來た。彼女はお歌をよく覺えてゐて、につこり愛想よく笑ひながら、

『被來いまし。』と、云つたが、やがて氣の毒さうに、『あの、今晩は旦那は、お留守なんで御坐いますよ。』と、いふ。

お歌は案の定と思つて、落膽しながら、

『まあ、さうで御坐んすか。いゝえね、別に用があつて伺つたんぢや御坐いませんけれど、先達

は大變に失禮しちまひましたもんですから、一寸お詫び旁たお禮に伺ひましたんですの。』と、云つて、『あの、旦那は夕方からお出懸けになつたんですか？』と訊く。

小婢はもぢ〳〵して、

『い〻え、あの、實はもう一週間ほど前から、お店の御用で大阪の方へ被往つてゐるんで御坐いますの。』

『あら。まあ、大阪へ？　そりやそりやちつとも存じませんで。一週間も前からぢや隨分お長いんですのねえ。それぢや私が伺つたあの翌日頃お立ちになつたんですねえ。』

『え、たしかあの翌日の晩で御坐いました。』

『まあ、さうで御坐んすか。道理で此頃は寄席へもまるでおみえになりませんし、おたよりもないもんですから、私、ひよつとしたらお體の工合でもお悪いんぢやないかと思ひましてねえ、つひ心配になるもんですから、今夜一寸御様子を伺ひに參りましたんですの。』と、云つて、お歌は寂しさうな顏で、『大阪へ被往つたんですか。さうですか。』と、もう一度繰返して獨語のやうに呟いた。

十の三

お歌はさう云ひながら今度は格子戸へつかまつて、顏だけ中へ差入れるやうにしながら、

『あの、それで旦那はいつ頃お歸りになりますんですの？』と、訊く。

小婢は疊のうへ〻親指で丸を搔きながら、

『さあ、まだよく分らないんで御坐んすけれど、何んでもさつきお店の方の話に、明日の晩か、明後日の朝はお歸りになるとかいふんですけれど……』

『まあ、さうですか。明日お歸りになつて下さると私都合がい〻んですけれど、明後日になると、ひよツとしたら、もうお眼に懸れないかも知れませんわ。』と、云つて、お歌は明後日の晩の汽車で上野を發つて、北海道へいく話をした。そして妙にしんみりした顏になつて、

『あの、彼地へ行きますと、當分は又お眼にかゝれませんから、私、發ちます前に是非もう一度旦那にお眼にかゝつていき度いと思ひますんでねえ。もし明日にでも旦那がお歸りになりましたら、どうかさう仰有つて置いて下さいませんか。寄席へ一寸お電話でもかけて下されば、私、又歸りにお邪魔に伺ひますから。』と、いふ。

小婢は合圖いて、

『お歸りになりましたら、すぐにさう申上げますから。』と、微笑みながらいふ。

お歌はさう云ひ置いて、やがて名殘惜さうに別れを告げて歸つていつた。さうなると相川の家そのものにさへ妙な愛着が殘つて、彼女はその前を立去るのが何となく心寂しくてならないのであつた。

お歌は大通りへ出ると、すぐに電車に乘つてしまはふかと思つたが、何んだか氣が沈んでならないので、そのまゝ鐙橋を蟹殼町の方へ渡つて、足に任せてぶらり〳〵と歩いていつた。

お歌は全くの處その晩ほど相川さんのことが思はれたことはなかつた。自分でも何う云つていいか分らないほど相川さんが戀しくて、態々訪ねたのに、留守であつたゞけに、ひどく氣が殘つてならないのであつた。もうこのまゝ相川さんに逢へずに、遠い北海道へ渡つてしまはなければならないのかと思ふと、お歌はまるで十七八の小娘の時分に感じたやうな情なさを覺えるのであつた。

相川さんは今頃大阪で何をしてゐるであらう。商用とは云ひながら、ひよッとしたらお園を一緒に連れてゞもいつてゐるのではあるまいか。さう思つてくると、お歌は今迄は思ひもしなかつ

たやうな嫉妬らしい感情で胸が一杯になつてくる。それにしても大阪へいくんなら一寸便り位して呉れてもよさゝうなものである。默つて發つてしまふのは餘りだと思ふと、泣き度いほど先の心が恨めしくなつてくるのであつた。

と、みると、空には十三日ばかりの月が雲の間からぽッと浮かび出て、四邊は柔かな蒼白い光りに包まれて來た。河岸の並藏の影は黑く路上に落ちて、何處かでやつてゐる蓄音機の音までが甘い悲しみを唆るやうに思はれる。お歌は懷かしい此東京の月を見捨てゝ、遠い見も知らぬ北海道なぞへ旅立つていくのがしみ〴〵厭になつて來た。

十の四

宮松亭が千秋樂になると、團糸達の一座は、すぐその翌日の夜の急行で、北海道へ向けて、いよいよ巡業の旅へ上ることになつた。最初函館が振り出しで、それから小樽、札幌、旭川、それに釧路といふ順で、大概三日立か五日立の飛脚興行であつた。大分芝居や相撲などの一行も乘り込んでいつてゐるので、土地に低つては可成りに危險な興行もしなければならないやうな樣子であつたが、併し仕打ちの藤野は充分成算があるらしく、此方の云ひ分は一つ殘らず聞いて呉れた

ので、圓糸なぞも今迄にない旅だといつて、ひどく喜んでゐた。それもその筈で、諸雜用を差引いて、唯手取りだけの金が三百圓のうへも殘らうといふのであるから、滅多にない分のいゝ興行であつた。それに又彼方で座敷でもあれば、その祝儀はまる〳〵浮くので、もう一座の面々はほくほくものであつた。

お歌は、別に旅支度といつても大したことはないので、發つ日の朝木内に來て貰つて、大行李へすつかり着物から何からつめてしまつた。そしてそれを皆の荷物と一緒にひと纏めにして、もう午過ぎには木内と、仕打方の番頭が二人してそれを才領して驛へ持つていつて預けてしまつた。

お歌はそれでも午過ぎになると手廻りのものを少しばかり揃へ度いと思つて、銀座まで買物にいつた。一寸した手提袋や、化粧品や、それに銀杏返しにかける竹長のやうなものを彼方此方の店で買つて、それを小風呂敷に包んで彼女は又歸りの電車に乘つたが、何んだか急に相川の家へいつてみたくなつたので、彼女は一度切つて貰つた切符をもう一度切り直して貰つて、茅場町の方へ廻つた。相川からは昨日も一日何の音沙汰もなかつたし、今日も何とも云つて寄越さないので、もうお歌はじり〳〵した氣持になつてゐたのであつた。こんなことをしてゐるともう彼に逢はずに立つてしまはなければならないので、それがお歌にはひどく殘り惜いのであつた。

今日はきつと大阪から歸つてゐるに相違ないと思つて、お歌は勢込んで相川の家へ訪ねていつてみたが、併し豫想は向ふから外れて、相川はまだ歸つてゐなかつた。お歌はもう落膽して、此間の小婢にくれ〳〵もよろしくと云ひ殘して、そのまゝもう歩く元氣もないやうに家へ歸つていつたのであつた。

お歌はそれから汽車の時間がくるまで家の二階でもだ〳〵しながら時を消してゐた。二度も訪ねてみて留守となると、よく〳〵緣がないのだといふやうな氣がして、彼女は何んだか胸が痛いほど悲しくなつて來た。せめて一寸でも逢へたら、氣持ちよく旅へも立てるのに、かう心が殘つては行く先々での惱ましいその日〳〵が今から思ひ遣られてならない。それを思ふと、お歌は小娘のやうに焦れて折角化粧をした頰を又涙でしとゞに濡らしてしまつたのであつた。

青森行の急行が發車するのは、午後の十時なので、八時半になると、お歌はそれでも仕方がなしにそろ〳〵支度をして家を出た。性急な師匠のことゝて、皆に九時迄には必ず停車場へ集まつてゐるやうにと堅く觸れ廻はしてあつたのであつた。

十の五

上野の停車場へ來てみると、一座のものはもうあらかた揃つてゐた。暑いので皆な態と待合室へは入らずに、涼しい風の吹き透す通路のところへひと塊りになつて立つてゐた。三四吉、團光、花吉、巴昇、秀駒といつたやうな若い連中は、今日を晴れと着飾つて、こつてりと化粧をした顏に、何處か嬉しさうなそは〳〵した色を浮べかながら囁いだ聲でべちやくちや饒舌つてゐるので、他の旅客達は皆眼を欲だて〻此方をみていつた。女ばかり十六人といふ一座なので、人目に立つのも無理はなかつた。

仕打方からは年老つた村田といふ番頭が一座の才領をする爲めに從いて來てゐた。仕打の藤野はひと汽車先に立つてしまつたので、その村田と、師匠の番頭の木内が萬事を取仕切ることになつてゐた。

師匠は一人群を離れて、木内と何事かひそ〳〵打合はせをしてゐたが、お歌が皆に挨拶をした後でそつちへ近寄つていくのをみると、につこり笑つて、

『お歌。大變に遲いぢやないか。』と、云つて、『到頭東京に當分お別れといふことになつちやつたねえ。今朝までは別に何んとも思はなかつたけど、いよ〳〵となるとこれで何んだか心寂しいもんだねえ。』と、いふ。

お歌も氣が浮かないやうに微笑んで、

『え、……』と、唯一言答へる。

師匠は頻りに停車場の入口の方を見ながら、

『ねえ、お歌。京枝さんはまだ來ないんだよ。ほんとにあの人にも困つちまふぢやないか。こんな時にや氣を揉ませないやうにして呉れないと、私ばかりぢやない、お仕打ちさんの方でも面喰つちまふからねえ。』と眉根を寄せていふ。

お歌も相槌を打つやうに、

『まあ、京枝さんはまだなんですか。あの人もほんとに呑氣ですからねえ。きつと汽車の出る五分か十分前に來ればい〻つて氣で、ぐづ〳〵してゐるんでせう。』と、反感をみせながらいふ。

師匠は入口の方ばかりみながら、

『きつとそんなことだらうよ。あの人のこつたから、汽車つてものはどうせ出る時間でなけりや出ないんだから、一時間も前から停車場へいつてごと〳〵するなあ素人だとか何んとか文句を云ふに極つてゐるんだよ。ほんとに仕樣のない人だ。』

そんな話をしてゐるうちに停車場の時間は容赦もなく經つて、いつかしら改札口も開いた。若

い連中のところへは、それ〴〵身内のものや、馴染の客の顔なぞも混つて、その賑やかさといつたらなかつた。殊に三四吉は例の藥問屋の番頭とかいふ男が送りに來てゐるので、冷評かされたり、笑はれたり、やい〳〵大變な騒ぎだつた。あんまり騒々しいので、四邊には人だちがする始末であつた。

師匠はその時になつてもまだ京枝が顔をみせないので、もう焦れ切つて、腹を立てながら、

『おい、木内、お前、そこの入口のところで京枝さんをみてゐてお呉れな。私達やもう汽車へ乘り込んでゐるから。』と、ぷん〳〵しながら云つて、皆を促して、プラットホームの方へ出ていつた。皆は各自信玄袋やら、小鞄やらを提げて、ぞろ〳〵その後に續いた。

お歌はまだ相川のことが氣になつて、もう一度自動電話でもかけてみやうかと思つてゐたが、師匠が急きたてるので、到頭それさへすることが出來ずに、そのまゝ汽車へ乘り込んでしまはなければならなかつた。

十の六

一座のもの達は、プラットホームへ出ると、もう先を爭つて列車へ乘込んだ。師匠だけは座頭

格で二等車室を當がはれたか、あとは皆雜用の三等であつた。ずつと明日の午後の三時まで乘通さなければならないので、成る可く皆な一緒のところがいゝといふので、村田は彼方此方と駈けずり廻つた揚句、やつと列車の先頭から二輛目の三等車へ座席をこしらへて呉れた。そこは師匠の乘つてゐる二等車のすぐ隣で、一座のもの達が背中合はせに並んで四つの座席へ占めることが出來た。

皆は村田に手傳つて貰つて、各自の手荷物を網棚へ上げるやら、座席の下へ押込むやら、ひとしきりは非常な混雜を極めた。中でも絃の方の連中は三味線箱があるので、それがひどく荷厄介になつた。彼方でも此方でも態ときやツきやツと聲をたてるので、村田は一人で轉手古舞ひをしてゐた。

やつとのことで何うやら形がつくと、お歌は車室からまたプラットホームへ下りて、そこに立つてゐる師匠の方へいつた。師匠は敷島をぷかりぷかり吸ひながら、改札口の方ばかりみてゐたが、ふツと眼を瞑つて、

『お、やつと來たよ。どうだい、まあ、あの格好は。きつとまた醉つてゐるんだよ。』と、いふ。

とみると、改札口のところからは京枝が片手に三味線箱を抱へ、片手には可成り大きな信玄袋

を提げて、よち〳〵しながら息せき此方へ出て來る。そのあとから木内が、それもやつぱり京枝の荷物らしい小行李を引提げて、急ぎ足についてくる。京枝も酒でも呑んでゐるとみえ、顏を眞紅にして、遠くからみても分る位に大汗になつてゐた。

お歌はその格好の滑稽なので、くす〳〵笑つてゐたが、やがて彼女も大きく眼を睜つて、

『あらッ。』と、口のなかで、小聲で叫んだ。

よくみると、京枝と木内のすぐあとからは人込に紛れながら、今戸さんがやつて來た。いつになく今夜は白い脊廣を着て、麥稈帽子からネクタイのやうなものまで、ひどく若づくりで、片手に角鞄を提げながら肥つた體をゆらり〳〵と此方へ運んでくる。

お歌はそれをみると　思はず顏を顰めて、師匠の横へ隱れてしまつた。

京枝はやつと皆のゐる處までやつてくると、どかりと荷物をそこへ置いて、手帛で汗を拭きながら、

『どうもお師匠さん、ほんとに相濟みません。もうちつと早く來る筈だつたんですけれど、出鼻に急にお客樣があつたもんですから……』と、眞紅な、うれたやうな顏をしながらいふ。

師匠は笑ひもしずに、一寸頭だけ下げて、

『もう、あんた來て呉れないのかと思つてゐたよ。』と、まだ腹を立てゝゐるやうにいふ。

そこへ今戸さんはにた〳〵笑ひながら師匠の方へ近づいて來て、顏を知り合つてゐる位の間柄なのに、いかにも心易立てな調子で、

『やあ……』と、いふ。

師匠も仕方がなしに、惡く丁寧な挨拶を返した。

十の七

木内はもう時間がないので、大急ぎで京枝の荷物を車室へ入れてやつた。京枝は口だけで、

『どうもお世話樣。』と、云ひながら、汗ばかり拭いてゐたが、今戸さんはそれをみると、

『お、京枝さん、あんた達は此處へ乘るのか。それぢや私や、このお隣へ乘らう。』と、云つて、そのまゝ師匠の乘つていく二等車の方へ入つて、鞄を置くとすぐに又出てくる。

お歌はその樣子で、初めて今戸さんが自分達と同じ列車で何處かへ出懸けるのだなと氣附いた。初めは唯見送りに來たのだとばかり思つてゐたのに、一緒に從いてくると知つては、お歌もひどく當惑しない譯にはいかなかつた。

京枝は今戸さんの顏をみて、

『でも、旦那。ほんとに間に合つてようござんしたねえ。伸の來やうがもう一寸遲かつたら、とても駄目でしたわねえ。』と、態と落着き拂つて、何氣ない顏でいふ。

今戸さんも衣嚢から煙草を取り出して、火をつけながら、

『ほんとさ。彼處の家はほんとに氣が利かねえんで、かういふ時にやきつと面喰はせられるんだよ。第一飯の出しやうが遲いやな。』と、云つて、氣味の惡い笑顏で、そつとお歌の方を見る。

お歌は態と知らん顏をして、外方を向いてゐた。師匠ももう二人の方へは取合はないやうに、木内と村田を呼んで、何事か又打合はせ初めたが、さうしてゐるうちに、いよ〳〵發車時間になつたので、皆なぞろ〳〵つながつて車室へ入つた。彼方でも此方でも見送りに來た連中と一座のもの達の間では別れの言葉や笑ひ聲が聞えて、又ひとしきり車窓は賑やかになつた。その中で京枝と今戸さんはまだ車室に入らずに昇降段の前へ立つて、ひそ〳〵耳打ちをしてゐた。

上屋の柱に取付けてある警鈴は俄にヂリ〳〵と消魂しく鳴り出した。それが止むと一緒に車掌は發車の號笛を吹き鳴らした。とみる間に列車は一時の警笛を殘しながら、徐々と動き出した。今戸さんは慌てゝ京枝を先に乘せて、自分も昇降段へ飛び乘つた。

見送りに來た人達は各自手を振つたり、左樣ならを云つたりして最後の別離を告げた。お歌も車窓から顏を出して、その人達に挨拶をしたが、その時、ふつとみると改札口の方から此方へ向つて、一散に走つてくる人影があつた。それは鳥打帽子を眼深に被つて、薄い羽織を着た中年の男で、脛もあらはに息を切りながら此方へ駈けて來たが、やつと、お歌達の傍までくると、多勢の見送り人の間から帽子を取つて此方へ眼顏で會釋をした。それは思ひもかけない相川さんであつた。

お歌は狂喜して、

『あら、貴方！』と、叫んだが、さうしてゐるうちに列車は刻々に速力を增して、二人の間は一間二間と遠退いてしまふ。

相川さんも口をきく餘裕がないので、ほんやり笑ひながら、さも殘り惜しさうな顏をして、じいッとお歌の顏を見送つてゐたが、お歌ももう何うすることも出來ないので、車窓から首を伸ばして、我を忘れて相川さんの方ばかりみてゐた。彼女の眼にはその時云ひ甲斐もない涙が一杯に浮んで、相川さんの顏がぼうッと霞んだやうになつてしまつたかと思ふと、列車はプラットホームの端へ出て、いつかもう轉轍線の曲角へ入つてしまつた。

お歌はもう身悶えしたい程悲しくなつて、思はず深い嘆息をほツと吐きながら、いつまでも暗い停車場の方を眺めてゐた。

十一の一

お歌は少時すると皆に變に思はれてもと、やつと氣がついて、そのまゝ車窓を離れて自分の座席へ就いた。丁度彼女は絃の巴昇と並んで座席をとつたので、やがて二人してそこいらをいゝ工合に取形づけ、やう〳〵いくらか落着いた氣になつて、ぽつ〳〵話しなぞしはじめた。併しお歌はまだ心の中には相川の面影が濃く烙きつけられてゐて、ともすると沈み勝ちになつてしまふ。逢ふまでは一寸でもいゝから逢ひ度いと思つてゐたが、扨て逢つてみると、今度は何か知ら堪能する程しみ〴〵話しをして、そのうへでゆつくり別れが告げ度かつた。さうなると慾には限りがなかつた。これから一月ばかりの間、どうあつてもあの相川さんに逢ふことが出來ないのかと思ふと、お歌はもう旅へ出るのが耐らなく厭になつて來た。

さうしてゐるところへ、隣の車室から木内がにた〳〵笑ひながら入つて來て、

『ねえ、お歌さん。彼方で呼んでゐるよ。』と、いふ。

お歌はおいでなすつたなと思つて眉を顰めて、

『誰れが呼んでゐるの？　お師匠さん？』と、白ばツくれて訊くと、木内はそのまゝ自分の座席

の方へ入つていきながら、
『いゝえ、京枝さんですよ。まあ行つて御覧なさい。大變な御馳走が出て、もうお酒が初まつてますぜ。』と、いふ。
一座のものは話をやめてお歌の方をみた。
お歌は京枝といふ名を聞いても胸がむか〳〵するやうな氣がするので、默つてそのまゝ知らん顏で巴昇と話しをしてゐた。と、そこへ今度は待ち兼ねたやうに京枝が出て來て、車室の入口から手招きをする。
お歌は先へも分るやうに大きな舌打ちをしたが、それでも默つてゐる譯にもいかないので、澁澁立つていつてみると、隣りの二等車では、今戸さんが上着も何もぬいで、座席のうへゝ大胡座をかきながら、料理のつめてある折や、壽司の折なぞをあけて、金屬製のコップで酒をやつてゐる。師匠は隅の方へ入つて、態と夕刊を讀みながら、その座へ加はるのを避けるやうな風にみせてゐた。
京枝は噪ぎきつて、
『お歌さん。あんたもうずつと此方の二等にゐていゝのよ。今旦那が車掌さんに談判して、あんたの切符まで買つて下すつたんだもの。まあそこへお座んなさいよ。』と云つて、よろ〳〵しながら、彼女を今戸さんの隣へ座らせやうとする。
今戸さんもお歌の座るものと豫期して、少し向きを變へたが、お歌は態と京枝の手の下をくゞつて師匠の隣へいつて腰をかけてしまふ。
京枝も仕方がなしに、今戸さんと對向ひの座席へ腰を下して、手帛で顏を拭きながら、
『ねえ、お歌さん。ほんとにいゝ鹽梅でねえ。あの、旦那が急に秋田まで材木を買ひに被往ることになつたんで、かうやつて一緒の汽車に乘つて下すつたのさ。お庇護樣で私とあんたは二等で大威張りでいけるし、それにこの通り御馳走は攝へて來て下さるし、もう大した成金だわねえ。ほゝゝゝ。』と、嬉しさうに云ふ。
周圍の旅客達はじろ〳〵此方をみてゐた。

十一の二

お歌は仕方がなしにそれからずうツとその車室にゐたが、うつかりした隙をみせると、何んな目に逢はされるか分らないので、もう何を云はれても、いゝ加減な返事ばかりしてゐようと心を

極めてゐた。それに師匠が傍にゐて呉れるので、それが何よりも心強かつた。

京枝は頻りに取持つやうなことを云つては、何うかしてお歌に取入らうと一生懸命になつてつとめてゐたが、お歌は中々穴を見せないので、しまひには酒で殺ろすより他はないと思つたらしく、今度は盛んに盃をさしだした。お歌は頭痛がすると云つて、それさへ素氣なく斷つた。

今戸さんも京枝もこの暑氣に、停車場へ來る前から飲んでゐたので、列車が宇都宮に着く頃にはもうぐでんぐでんに醉つぱらつてゐた。二人はそれでも杯を離さずに、顏を突き合はせて、取留のない管ばかり卷いてゐたが、さうしてゐるうちに、今戸さんはもう肝腎なお歌のことは忘れてしまつて、座席のうへゝ後様に引覆つて、いつかしらぐう〳〵鼻のつまつたやうな大きな鼾をかきながら睡入つてしまつた。

京枝はそれをみると、困つたやうな顏をして、呂律の廻らない口で、

『旦那、旦那、眠ちやつちや駄目ですよう。それぢや折角段取つて置いたことがふいになつちやふぢやありませんか。』と、自分から泥を吐いて『さ、お起きなさいましッたら、旦那、起きなけりや駄目ですつてば。』と、云つて、執拗く絡りついたが、今戸さんはもう一向に多愛がなく、唯『うむ』『うむ』といふばかりで眼を覺さうともしなかつた。

京枝はさうなると今度は師匠とお歌との間へ割込んで來て、煩さく管を捲いた。師匠は初めのうちは默つて聞いてゐたが、周圍の人がじろ〳〵みるので、居耐まれなくなつて、腹立たしさうに、

『お歌、彼方へ行かう。』と、云つて、お歌を促して、隣の三等車の方へ席を移してしまつた。お歌もほつとして、やつと自分の體になつたやうに、巴昇の傍へ歸つていつた。

少時して木内を見せにやると、もう京枝も師匠の座席へなが〳〵と横になつて、前後も知らず寢入つてしまつてゐるといふ。師匠は舌打ちをして、

『ほんとに仕様のない奴だッ。』と、呟いたが、その顏には憤怒の色さへみせてゐた。

その晩、皆は寢ようと思つても鐵輪のどよみと暑さでとても眠られないので、到頭それなり夜徹しをしてしまつた。若い女同志のことと先々の話は盡きなくて、いつかしら短い夏の曉が白白と車窓に映るまで、面白可笑しく時を消してしまつた。

翌朝になると、今戸さんは小牛田で乘り換るといつてゐたのに、どうせ此處まで來てしまつたんなら、青森を廻つたとて同じことだと云つて、到頭その列車で更に北へ北へと乘り越していつた。京枝はさすがに昨夜の醜態を恥ぢてかそれとも宿酔で苦しいのか、その日は何をするにも控

へ目にしてゐた。

お歌はいくら二等車の方へ呼ばれても今行きます、今行きますと返事だけして、晝のうちは空氣枕を出して、巴昇と代り番に自分の座席で寢てばかりゐた。その爲めに却て何事もなく無事に旅をつゞけることが出來たのであつた。

一座の乘つた列車はその日の午後の三時廿五分に青森へ着いた。

十一の三

函館への連絡船はその晩の十一時にも出るが、併しそれでは乘込みがあんなり朝早くなるので仕打ちはその晩は皆を青森の宿屋へ一泊させる手筈にして置いた。そして明朝の午前の船で向ふ地へ乘込ませて、すぐその晩初日を出させようといふ手順にきめて、それ〴〵準備をして置いた。皆は驛からすぐに歩いて、千鶴屋といふ中處の宿屋へいつた。

今戸さんの乘つてゆく汽車は午後の四時一寸前に出るので、すぐそれに乘り繼げば、五時間ばかりで目的地の秋田へ着くのであつた。それだのに、彼は何の彼のと思圖々々いつてゐて、何うするかと思つてみてゐると、京枝を呼んで、

『ねえ、京枝さん。私は腹が空いていけねえから、兎に角此處で飲だけでも食つていかう。それに何んだか、こゝまで一緒に來てみると、別れが辛いからね。はゝゝゝ。』なぞといつて、呑氣さうに笑つてゐる。

京枝は合槌を打つやうに、

『旦那、もし御商賣の方の御都合さへいゝんなら、さうなさいましよ。一時間でも餘計にゐて下さる方が私達もよう御坐んすから。』と誘ふやうに云ふ。

今戸さんは汽車中で飲んだ酒が出て來たやうにふら〳〵しながら、

『なあに、商賣なんざ何うだつて構やあしねえさ。買ひそこなつて、損をした時に、高が二千兩か、三千兩さ。もと〳〵手を出さねえと思やあ、何んでもありやしねえよ。』と、腹を搖りながら笑つて、そのまゝ又皆の後から隨いてくる。

師匠はもうじり〳〵するやうな顏で、眉根ばかりびく〳〵慄はしながら、二人の方をみてゐたが、やがて一足遲れて、京枝を呼びながら、

『ねえ、あんた。私達の宿はお仕打さんの方の雜用なんだから、そこへあの渡邊さんを連れ込んぢや困るぢやないか。大概にしてお呉れよ。私達や物見遊山にいくんぢやなし、商賣でかうやつ

て來てゐるんだから、ちつたあ端の思惑も考へて呉れなけりや困るよ。』と、我慢しかねていふ。

京枝はさう云はれると、さすがに小さくなつて、

『お師匠さん、ほんとに濟みません。實は私福島まで一緒にいくつていふんで、その心算でお伴して來たんですけど、たうとう此處まで乘り越されちやつて、私もほんとは少しお荷物で困つてゐるんですよ。まあ、何んとかしますから……』と、見え透いた嘘をいつて、その場を胡魔化さうとする。

さういつてゐるうちに、千鶴屋はすぐ驛の向ふ横丁なので、そこの店口まで來てしまつた。皆は番頭や女中に迎へられてそのまゝ二階座敷へ上つていつたが、お歌もぐづ〳〵してゐてつかまると煩さいので、始終師匠の後を離れないやうにして、皆と一緒に階上へ上つていつてしまつた。

京枝と今戸さんは店口で何かごと〳〵話してゐたが、少時すると、今戸さんは平氣な顏で、のつそりその宿屋へ上つてきた。

十一の四

宿屋へ上られてしまつては、もう何うする譯にもいかないので、師匠も今戸さんの圖々しさ加減に呆れ返つてゐたが、それでも今戸さんはさすがに皆の部屋へは入つて來ずに、すぐ隣へ別に一間座敷を取らせた。そしてすぐさま風呂へ入つて、大きな聲で女中達に飯を命じてゐたが、それが來るとやつぱり口寂しいと云つて、酒を持つて來させた。

京枝は初めのうちは師匠にあゝ云はれた手前、此方の思惑をはかつて、一座のもの達と一緒に風呂をつかつたり、飯にしたりしてゐたが、いつか知らすうツと姿を消したかと思ふと、今戸さんのところへいつてゐた。二人はさすがに聲を潜めて、列車中のやうに、傍若無人な樣子はみせなかつた。

師匠は皆と膳を並べて食事を濟ましてしまふと、やがてお歌を傍に呼んで、

『ねえ、お歌。ほんとに隣にも困つてしまふぢやないか。どうして京枝さんはあゝなんだらう。渡邊さんのことになると、もう夢中ぢやないか。お前、一寸そこへいつて立聞きをして御覽な。先刻からあゝやつて、こちよこちよ曉舌つてばかりゐるんだが、一體何を企んでゐるんだらう。あの渡邊さんはまご〳〵するとほんとに北海道までついて來るかも知れないよ。』と、いふ。

お歌もあんまり執拗いので、もう腹が立つてならないやうに、

『ほんとに厭ですわねえ。あれ程つけ〳〵云つてやつたんですからもういゝ加減に見切りをつけ

て歸りやいゝんですのに、あんな足許の見えない人ッちやありませんわ。京枝さんも京枝さんだと思つて、私、もう胸がむか〳〵して來ますわ。』と、云つて、隣座敷の物音へ耳をとめながら、『ほんとに何をあんなに饒舌つてゐるんでせう。お師匠さん、私、一寸様子をみて來ますわ。』と云つて、お歌はそれなり足音を忍びながら、紙襖の方へ寄つていく。

先刻女中が閉める時に端の方へ五分ばかりの隙間を殘していつたので、お歌はそこへ這ひ寄つて、そつと隣を覗いてみた。と、そこでは今戸さんが電燈の下へ膳を置かせて、大きな腹を便々と現はしながら、京枝にお酌をして貰つては、ぼつり〳〵飲んでゐる。彼はどうしたのか、むくむくした大きな手の指へ一寸ばかりの厚さの十圓紙幣の束を挿んで、ひと口飲んでは二十枚づゝほど數へ、數へては又飲むといふ風にしながら、京枝と何か囁き合つてゐた。京枝は今戸さんの手の中ばかりぢろり〳〵とみながら、媚びるやうに何か受答へをしてゐた。

お歌はそれをみると、可笑しくなつて、そつと師匠の方へ手招きをする。師匠もやがてお歌のところへやつて來て、なるべく先方へ氣づかれないやうに、重なり合つて、隣を覗いた。

師匠はお歌の顏をみて、

『おや、おや、大層なお紙幣ぢやないか。一體何をしてゐるんだらう。あの京枝さんの顏を御覽な。今にも涎が垂れさうぢやないか。見つともない。』と、嘲るやうに呟いた。

十一の五

さうしてゐるうちに、今戸さんは手に持つた紙幣をすつかり勘定してしまふと、そのまゝ器用な手つきでそれを揃へて、紙の帶をかけて、鞄の中へ押入れながら、

『京枝さん。それぢや兎に角さうしよう。それが一番手取り早さうだ。』と、小聲で云つて、京枝と何か眼顏で合點き合つた。

京枝は又銚子を取上げて酌をしてやつたが、今戸さんはもう可成醉つてゐて、盃を差出す指先が小さく慄へてゐた。二人はそれからも顏をよせて頻りに囁きあつてゐたが、此方でみてゐては別に變つたこともないので、お歌と師匠はそれなり又もとの座へ歸つた。隣ではあれでも彼是れ一時間の餘も飲んでゐたが、やがて今度は急にごと〳〵物音がしだして、少時すると今戸さんは何うしたのか、又背廣に着換へて、ちやんと身支度をとゝのへ、京枝に鞄を持たせながら師匠の部屋へ入つて來て、

『やあ、お師匠さん。どうもお邪魔をしました。それぢやいよ〳〵お別れですよ。はゝゝゝゝ。』

と、脂ぎつてら〳〵した額で笑ふ。
師匠はあんまり思ひ懸けなかつたので、慌てゝ愛想笑ひをしながら、
『まあ、貴方、これからお立ちですか？』と、いふ。
京枝はそれを引取つて、
『あの、お師匠さん。旦那は七時五十分の汽車で被往るんださうですよ。その汽車で被往ると、十二時に秋田へ着くんださうですが、今日一日乗りとほして、これから又五時間はえらう御坐んすわねえ。』と、いふ。
師匠もい〻工合に相槌を打つて、
『まあ、そりやお大抵ぢやござんせんねえ。それではまあ、どうか御機嫌よう。又東京でお眼に懸ります。』と、笑ひながらいふ。
今戸さんはお歌の方ばかりみながら、
『いや、お師匠さん、貴女方もどうか彼方地へ渡つたら、達者でうんと儲けていらつしやい。私や東京で待つてますから。は〻〻〻。』と、云つて、『それぢや皆さん御免蒙ります。』と、別れを告げて京枝に送られながら、ぼた〳〵階下へ下りてゆく。

お歌もそれを聞くとほツとして、黙つてみてゐる譯にもいかないので、店口まで送りに出ていつた。
今戸さんはそれをみると、嬉しさうにこ〳〵して、
『やあ、お歌さん。到頭うめえことにもならずに、私やすご〳〵引退りさ。お前さんの手剛いのにやさすがの私も甲をぬいだよ。まあこの先にだつて長え月日があるんだから、氣永に東京で待つことにするぜ。は〻〻〻。それぢや左様なら、彼方地へ入ると急に時候が變るから、まあ、どうか體ばかりは大事にしなせえ。い〻かね。』と、云ひ置いて、彼はそのま〻停車場へ向つていつた。
お歌は寂しい店明りの中をたつた一人でとぼ〳〵歩いてゆく今戸さんの後姿をみると、何んだか可笑しくもあり、憐れでもあつた。
今戸さんは角のところでもう一度此方を振顧つたやうであつた。

十一の六

お歌は今戸さんの後姿がみえなくなつてしまふと、重荷を下したやうに急に嬉しくなつて、京

枝の方をみながら、

『ねえ、姐さん。貴女何故停車場まで送つて被往らないの？』と、いふ。その言葉にはいくらか相手を揶揄ふやうな氣の輕さがみえてゐた。

京枝はふンといふやうな顏になつて、

『誰が送つてなんかいくもんか。』と捨臺白のやうにいつて、お歌の顏をみながら、『だけど、あんたも隨分罪な人だよ。さすがの旦那がもうすつかり悄氣ちやつて、散々泣きごとを云つて歸つて被往つたもの。それもその筈さ。何しろ東京から二百何十里もあらうといふ、こんな國の果まではる〳〵引摺られて來てさ、それであばよぢや誰れだつて眼を瞑らうにも瞑れやしないからねえ。私やほんとにこんな辛い思ひをしたことはないわ。』と、いふ。

お歌はてれたやうに笑つて、

『どうも相濟みませんでしたわねえ。』と、云つたつきり、そのまゝぱた〳〵師匠達のゐる座敷の方へ上つていつた。京枝もそのあとから何かぶつ〳〵云ひながらついて來たが、二階の廊下のところでばつたり村田に出會はすと、彼女はにやりと妙に笑ひながら、今度はそこで彼と何か立話をしだした。

お歌はもう京枝には構はずに師匠の傍へ歸つていつたが、師匠はその顏をみて、嘲るやうに、

『彼方も無事にお立ちかい？』といふ。

お歌は合點いて、小聲になりながら、

『え、これで私も厄が落ちましたわ。もう昨夜からむしやくしやして腹ばかり立つてなりませんでしたが、やつと晴々しましたよ。』と、云つて、彼女はのび〳〵したやうに笑ふ。さうは云ひながらお歌の胸には、昨夜上野の停車場で不思議な別れをした相川のことが、時とともに漸次と焦悶しい思ひを湧かせて、相川の顏を思ひ出す度にお歌はゐても立つても耐らないやうな心持ちを覺えてくるのであつた。

さうしてゐるところへ村田が顏を出して、

『ねえ、お師匠さん、あの、彼方で皆さんが町見物に行き度いと云つて、やい〳〵云つてゐなさるんですが、如何でせう。私が御案内しますから、出して頂く譯にやいきませんでせうか。』と、いふ。

師匠は笑つて、

『まだ皆若いねえ。何にしろ夜徹し汽車に乘つて來て、これから外へ出る位な元氣がありや何に

よりだよ。ほゝゝゝ。皆一緒なら構はないから、お前さん面倒でも何うか才領して連れていつてやつて下さいな。』と、云つて、お歌の方をみながら、『ねえ、お歌お前も青森は初めてなんだから、一緒にいつて來りやいゝちやないか。』と、いふ。

お歌もすぐにその氣になつて、

『えゝ、私もお伴しますわ。私知らない土地を歩くのがそりや好きなんですから。』と、云つていそいそしながら身支度にかゝる。

廊下の障子の陰のところには、京枝が態と身を隠すやうにして、此方の様子をこつそり窺つてゐたが、お歌がいくと聞くと、にやりと笑つて、それなり隣の間に集まつてがや〳〵騒いでゐる一座の若い連中の方へ入つていつた。

十一の七

やがて一座の若い連中は、それ〴〵身支度をして、村田に案内されながらひとかたまりになつて、ぞろ〳〵宿を出た。誰れも彼も旅先へ出てゐるので、久し振りに籠を離れた小禽のやうに、埒もない笑談なぞを云つたりしては、きやツきやツと笑ひさゞめいてゐた。お歌ももう今戸さん

は行つてしまつたし差當つて警戒を要する人間もゐないので、初めて羽を伸ばして浮々した調子で皆と一緒に歩いていつた。

戸外へ出てみると、さすがに北の國だけに冷々しい風が吹いて、秋の初めのやうなしみ〴〵とした心持ちにならずにはゐられなかつた。秀駒はお歌の方へ寄つて來て、

『ねえ、お歌さん。此處いらは東京と違つてやつぱり陽氣が違ひますのねえ。浴衣ぢや寒いぢやありませんか。』と、いふ。

お歌も肩を縮めながら、

『さうねえ。此處いらがこんなぢや北海道へいつたらどんなでせう。晩は羽織でも着なけりや風邪をひいてしまひますわね。』

空には銀河がほの白く夜風に洗ひ出されて、北斗七星が分けて美しく輝いてゐた。

宿からものゝ四五丁もきたと思ふ頃、後から誰れかゞ追驅けてくるやうな足音がした。村田は眞先にそれを聞きつけて、そこへ立止つたが、とみると、寂しい店明りの中をばた〴〵此方へ驅けてくるのは、思ひもかけない京枝で、彼女は後から眠早くお歌の姿を見付け出しながら、つかつか近寄つて來て、

『お歌さん、お待ちよ。私もたうとう思ひ切つて出て來たのさ。もう昨夜の汽車ですつかり草臥れちやつたんで、あれからすぐに寢ちまはふかと思つたんだが、何にしろお師匠さんが頑張つてゐるんで、お先へとも云へずさ。何んだか氣が塞つてしようがないから、出て來たのさ。私も一緒に連れてつてお呉れよ。』と、笑ひながらいふ。

お歌は折角京枝に離れてい〻氣持ちだと思つてゐたところであつたが、そんな素振はみせずに、『まあ、ぢや宿屋にやお師匠さん一人ツきりなんですねえ。放棄つといてい〻でせうか。』と、いふのを京枝は押へて、

『偶にやい〻やね。お師匠さんのこつたもの。お小遣ひのお帳面を出して、克明に今日の旅費の勘定か何かしてゐらあね。却つて誰れもゐない方がい〻さ。ほ〻〻〻〻。』

皆の中では二三人それを聞いてくす〳〵笑つたものがあつた。

やがて皆は又ひとかたまりになつて、ぶらりぶらりと歩き出した。東京で育つたものには、目貫の町へ來ても別に物珍しいものもなく、却つて田舍町の寂しさが身にしみて來た。

さうやつて歩いてゐるうちに、やがて皆は藝者屋や料理屋のやうなもの〻建ち續いた町へ出て來た。そこには可成立派な活動寫眞の小屋があつて、頻りに樂隊で囃したてながら客を呼んでゐ

た。丁度看板には松之助の兒雷也が出てゐたので、皆は面白さうだから入つてみやうぢやないかと云ひ出した。

京枝はそれを聞くと、ひどく姐さん振つて、『皆若いねえ。』なぞと云つて笑つてゐた。

十一の八

若い連中は、ひと暮でも〻いからみていかうと云つて聞かないので、村田は當惑したやうな顏になつて、

『此處いらの活動なんか見たつて詰まらねえが、まあ、そんなに入つてみたけりや、入つて御覽なせえ。京枝さん、姐さんはどうなさいます？』と、笑ひながら訊く。

京枝は鼻の先で笑つて、

『笑談ぢやないよ。私や松之助なんざ、此方からお金を出しても嫌だ。』と、云つて、今度はお歌の方をみながら、『ねえ、お歌さん、あんたどうするの？　やつぱり見度い方の口なの？』と、いふ。

お歌はもとから活動はあんまり好きぢやないので、それよりもかうしてぶら〳〵町を歩いてゐ

度かつた。で、巴昇や秀駒や三四吉の方をみて、
『あんた方、どうせこんな處の活動は淺草の出枯らしなんだもの。およしなさいよ。江戸から來た姐さん方の名折れだわよ。ほゝゝ。それよりももつと歩きませうよ。東京で精々暑い思ひをして來たんだから、この涼しい夜風に吹かれて歩くとそりやいゝ氣持ちぢやないの。さうなさいよ。』と、いふ。
皆はそれでも思ひ切れないやうに、
『でも、でも。』なぞと云ひながら顏を見合せてゐる。
京枝はその中へシヤシヤリ出て、
『それぢやいゝぢやないか。皆は活動へ入ることにして、私達だけ歩かうよ。そして歸りは又御苦勞だけれど、村田さんに迎へに來て貰へばいゝわ。さうしませう。さうすれば恨みツこがなくていゝよ。又宿へ歸つて、折角活動をみようと思つてゐたのに、姐さんがあんなことを云ふからなんて恨まれでもすると困るからねえ。ほゝゝゝ。』
と、お歌が今度は小首を傾げて、
『でも……』と、云ひ出した。彼女は京枝とたつた二人になつてしまふのが煩さゝに、二人きりになるのなら、いつそ自分も活動を見に入らうかと思つてゐたのであつた。さうしてゐるうちに、お春は師匠をたつた一人で放ツとくのも何んだから、自分も歸ると云ひ出したので、お歌も仕方がなしに、京枝の方へつくことになつた。
皆はやがて村田に切符を買つて貰つて、
『それぢや後程。』と口々に云ひながら、ぞろ〳〵電燈の明るい小屋の入口に吸込まれていつた。
村田はすつかり始末をしてしまふと、此方へ歸つて來て、今度はお春も入れて四人で、又その町を眞直に歩いていつた。
お歌はまだ思ひ切れないやうに、
『私もみて來ようかしら。』なぞと云つて、心を殘してゐたが、京枝はそれを笑つて、
『ほゝゝゝゝ。およしよ、見ツともない。活動なんざ、東京でいくらも見れるぢやないか。それよりもお春ちやんこそ見て來りやいゝのに。お前さんはほんとにお師匠さん思ひだねえ。そんなにお師匠さんが恐いのかねえ。』と、云つて、さも荷厄介にしてゐるやうにお春の方をみた。

十一の九

そこから三四丁も歩くと、もう寂しい町盡れのやうな處へ出てしまつた。京枝は村田と肩を並べて歩きながら、

『ねえ、あんた。もう見るとこツて此れだけなの。呆氣ないねえ。』と、いふと、村田は自分のことのやうに頭を掻いて、

『はゝゝゝゝ。田舍はまあ大概こんなもんですよ。』と、いふ。

京枝は袂から煙草を出して、蓮ッ葉に火をつけて吸ひながら、

『村田さん、それぢや又ぶら〳〵引返すんだわねえ。でも、いゝ散歩になつたよ。これだけ歩いとけば、よく寢られるわ。』と、云つて、

『ねえ、あんた、だけど、私や一杯飲み度いねえ。かう冷ついて來ちやとても耐らないよ。宿ぢやお師匠さんが眼を光らかしてるから、まさか女中さんにさう云つて、一本てな譯にやいかないし、村田さん、いつそどう？　歸りに何處かへ寄つて、一杯やつていかうぢやないかね。』と、いふ。

村田は嬉しさうに、

『へえ、結構ですなあ。私も御馳走になることなら、いつだつて贊成しますよ。はゝゝゝゝ。』

『ほゝゝゝゝ。いゝ了見だねえ。それぢやあんたが水先案内なんだから、これから何處かへ連れて上つてお呉れよ。但し懐が少々手薄なんだから、あんまり嵩の上るとこはいけないよ。』

『え、心得てますとも。此處いらの家は一寸小上りつて譯にいきませんから、やつぱり停車場の近邊がようございますよ。姐さん、そつちへ眞直に行つちや可けません。此處を右へ入りや停車場の方へは近道になりますから。』といふ。

四人はそこの角を右へ入つて、今度は眞暗な道を彼方へ曲り、此方へ曲りしていつた。と、汽笛の音や、機關車が蒸氣を噴出する音が思ひがけない間近に聞えて來て、間もなく、停車場の前の明るい廣場へ出た。

村田は皆をそこの突當りにある一寸した西洋料理へ案内していつた。お歌は京枝と一緒に酒を飲む氣はしないので、お春と一緒に別れて歸らうとすると、京枝はそれを無理に引留て、今宿へ歸つていつても活動を見にいつた連中が師匠に對して顔が惡からうから、そこは察してやつて時間つぶしにこゝで飲んでいかうといふ。村田もともどもすゝめるので、お歌も斷りきれなくなつて、到頭そこへ上つてしまつた。ひとつにはお歌も氣が伸々してゐるので、何だか馬鹿に酒が戀しくて、つひその誘惑に克てないのであつた。

京枝はお春へは帰たい顔をみせて、

『ねえ、お春ちやん。お前さんはお師匠さんのところへ歸り度いだらうから、遠慮なしに歸つてお呉れ。さうしてね、私達も一緒に活動へ入つたことにするんだから、此處へ上つたことをお師匠さんにや内證にして置くんだよ。分つたかね。』と、いふ。

お春は何かうまいものでも御馳走になれるのかと思つてゐたのに、さう云はれてしまふと何うにも出來なくなつて、そのまゝ變な顔をしながら歸つていつてしまつた。

京枝と村田はお歌を促して、その家の二階へ上つていつた。

十一の十

二階は三間になつてゐて、いづれも三四脚づゝ粗末な卓子が置いてあつて、電燈ばかりが自棄にぎら〳〵輝いてゐた。大方は船車連絡の待合ひ所に利用されるので、それ相應の設備も出來てゐて、三方の壁には北海道の溫泉場や、宿屋や、さういつたものゝ廣告ビラが一杯張りつけてあつた。

村田は便所へでもいつたのか、一寸姿を隠して、少時すると又歸つて來ながら、とツつきの部

屋の窓際の卓へ行つて、京枝とお歌を坐らせたが、その時下から上つて來た男のボーイに、酒にそれから野菜サラダのやうなものを命ずる。お歌は村田の態度が急に變つて、今迄控へ目にしてゐたのに、何かしら自分一人で引受けてゐるやうな顔になつて來たのが可笑しくてならなかつた。もう何年も何年もの間、藝人社會の澱滓を啜つて生きて來たやうな彼の性根が見え透いてゐて、田舎風に摺れてゐる口のきゝ方なぞがお歌には却つて甘くみえてならなかつた。

酒がくると、村田は臺のついた硝子の洋盃を京枝とお歌の前へ並べて、酌をしてやりながら、やがて自分も手酌で注いで、

『いや、姐さん、御馳走樣になります。』と、しみ〴〵嬉しさうに飲む。

お歌もひと口飲むと、いやに甘つたるいその酒が腸へしみ渡るやうな氣がして、何んだかその晩はほつちりの酒で醉ひさうな心持ちがしてならなかつた。

京枝もぐいと二三杯立てつゞけに飲んで、

『ねえ、村田さん、どうも北めは酒が悪くつていけないねえ。何うしてかうなんだらう。』と、いふ。

村田は頭を掻いて、

『いや、その、酒ばかりはな。これで北海道へ入りますと、又悪うがすよ。こいつばかりや御辛抱を願はなけりや。はゝゝゝ。』と、笑つて、何うしたのか、京枝と二人で何かしら眼でものを云はせてゐる。

京枝は又何喰はぬ顔で、

『どうもお酒の悪いのばかりはねえ。ねえ、お歌さん、あんた昨夜からちつとも飲まなかつたんだから、今夜はちづとお過ごしよ。このまゝ宿へ歸つて、すぽッと床の中へ入つちまやあ分りやしないもの。ほゝゝゝゝ。ねえ村田さん、このお歌さんは中々飲けるんだからねえ。これからはそのつもりでおつきあひよ。ほゝゝゝゝ。』

村田は笑つて、

『いや、そりや耳寄りな話ですねえ。それぢやまあ、ひとつ失禮ですが……』と、云つて、彼は洋盃をお歌にさす。

三人はさうやつていゝ氣持ちに献酬してゐたが、皆なで五本ばかり瞬く間にあけてしまつて、誰れの頰にも醉ひがみえて來た。

京枝は腕まくりするやうな手つきをして、

『お歌さん、私や下地があつたせいか、馬鹿にいゝ氣持ちになつちやつたよ。ほゝゝゝゝ。さ、あんたももうひとつ何う。』と、云つて無理に飲ませやうとするやうにお歌に酌をしてやる。

お歌はもう幾らでも飲み度いやうな氣持ちになつて、その洋盃へ口をつけやうとしたが、その時、入口の廊下の方で突如、人の足音がした。それは何うやら隣の部屋から出て來たらしい足音で、とみると、白い背廣を着た男がふらりと此方の部屋の入口に來て立ちはだかつた。

十一の十一

お歌は誰れとも分らないので、その儘ぐうッと洋盃をあげながら入口の方をみたが、それと同時に彼女は悸乎として、思はず洋盃をもつたまゝ釘づけにされたやうに體を堅くしてしまつた。入口からふら〳〵しながら此方へ入つて來るのは、紛れもない今戸さんだつた。もう先刻の汽車で立つたものとばかり思つてゐたので、お歌は口もきけないほど吃驚してしまつたのであつた。

今戸さんは朦朧とした醉眼を据ゑながら此方をみて、

『やあ、皆なやつて來たな。はゝゝゝゝ。妙な處で逢ふぢやないか。やつぱり御縁は盡きねえんだねえ。』と、いひながら、いきなりお歌の後へきて、椅子の椅背へよろ〳〵と捉まる。

京枝はさも吃驚したやうに椅子から立上つて、

『あら、まあ、旦那、どうなすつたんですよう。』と、云つて、彼の方へ廻つていきながら、『旦那、ほんとに何うなすつたんですの？　まだこんな處をうろ〳〵して被居るんですか。』と、云つて、村田が持つてくる椅子をお歌の隣へ置かせて、それへ今戸さんを坐らせる。お歌は思はず椅子をずらして、態と窓際の方へ遁げていつた。

と、今戸さんはお歌の椅子の椅背へ手をかけながら、くな〳〵して、

『やあ、京枝さん、面目ない。實あ俺あ汽車に乗り遲れちやつてねえ。何うにも出來ねえから、あれからずツと此處へ上つて、今迄飲んでたのさ。お師匠さんの面つきが大分惡いから、又お前さん達の宿へ歸へるのも業腹だし、と云つて、汽車がなけりや歩いてく譯にもいかねえしさ。もう自棄になつちやつた揚句がこの通りの醉ッぱらひよ。はゝゝゝゝ。面目ねえ。お歌さん、勘忍して呉んなよ。俺醉つてるんだ。はゝゝゝゝ。』と、埒がない。

京枝はいたはるやうにその肩へ手をかけて、

『まあ、ぢや旦那、あの汽車に乗り遲れておしまひなすつたんですか。呆れたもんですわねえ。どうしてさうだらしがないんだらう。』と、お歌の方をみながら笑つて、

『それでこれから何うなさるおつもりなんですの。秋田の方は明日になつちやお困りなんでせう。』

今戸さんは泳ぐやうに手を振つて、

『いや、秋田の方なんざ、もうどうでもいゝんだ。俺あ、何よりもこのお歌さんに別れるのが辛いんだよ。なあ、お歌さん。お前そんな怖い顏をしずに、まあ、一杯俺あに呉んな。そんなに邪慳にするもんぢやねえよ。はゝゝゝゝゝ。』

京枝は笑つて、

『ほゝゝゝゝ。隨分醉つてるらつしやるのねえ。だけど、汽車に乗り遲れておしまひなすつたのは困つたねえ。いろ〳〵急な御用もおあんなさるんだらうに……』と、村田と顏を見合はせながらいふ。

今戸さんはそれを押へて、

『まあいゝ、何んでもいゝつてことよ。おい、京枝さん、どうせかうなるやうにしきやなりやしねえつてば。さ、おい、皆酒だ、酒だ、はゝゝゝゝ。』と、お歌のあけた洋盃を横合からとつて、やけに振廻す。

お歌はもう唯呆氣にとられて、隅の方へ小さくなつてゐた。

十一の十二

京枝は自分も今戸さんの傍へ椅子をもつて來て、それへ腰をかけながら、彼に酌をしてやつて、『でも、旦那、ほんとに何うなさるんですよう。いかにお醉ひになつたつて、汽車に乗り遲れるのは酷うございますわ。いつもの旦那のやうでもない。』と、云つて、ともすると酒を濕しさうなので、今戸さんの手をもち添へてやりながら、『それでどうなさるんですの。今夜は此處へお泊りなさるんですか？』と、訊く。

今戸さんはふら〳〵しながら洋盃の酒を飲んで、

『まあ、いゝ、何んでもいゝッてことよ。お今さん、お前素面ぢやねえか。さ、俺が現はれたからにや、何もびく〳〵することはねえさ。さ、うんと飲んで呉れ。はゝゝゝゝ。』と、だらしがなく笑つて、その洋盃をお歌にかへす。

お歌はもう先刻から何うしようかと思つておろ〳〵してゐたが、さうなると、何にかしら度胸が据つて、何うなるものかといふやうな氣がして來た。何かにつけて素面でゐてはぼん〳〵口もきけないので、いつそ此方も醉つて、今夜こそ何か忌やらしいことでも云ひ出したら、面の皮を引剝いてやらうと覺悟を極めてゐた。で、彼女はさゝれるまゝに、その洋盃へなみ〳〵と受けて、息もつかずにぐい〳〵とあけた。

今戸さんはとろりとした眼を据ゑて、その樣をみてゐたが、ひどく嬉んで、頻りに手を叩きながら、

『おゝ見事、見事。お歌さん、お前さんはいゝよ。聞きしにまさる手のうち、手のうち。はゝゝはゝ。京枝さん、嬉しいぢやねえか。お前さんも、そんな氣のぬけた風船玉みてえな顏をしてゐねえで、飲みなよ。村田、お前も飲むんだ。今夜は夜どほし飲むんだ。はゝゝゝゝ。』と、云つて、又自分もぐつと呷る。

京枝も村田もさしつ押へつしながら飲んだが、京枝は心配さうな顏になつて、

『ねえ、旦那、それはさうと、ほんとに今夜此地へお泊りになるんなら、そのつもりにして早く宿屋をとつておかなけりや駄目でございますよ。ねえ、村田さん……』と、村田の方へぢろりと流眸を呉れて眼顏で合圖をしあふ。

村田も大きく合點いて、

『それなら、それで早くいゝお坐敷をとらせて置きませんと、此處いらは全く不自由で御坐んすからなあ。』

今戸さんはその言葉も耳に入らないやうに、お歌の顏ばかりみながら、

『まあ、何でもいゝツてことよ。俺あに任せて置きな。なあ、お歌さん、俺が萬事心得てゐらなあ。一體お前さん達は野暮でいけねえよ、汽車に乘り遲れたなあ、俺あだぜ。だから俺あは俺で一寸と寸法をつけてゐるんだ。まあ、だから默つてみてゐなせえ。惡いやうにしやしねえよ。なあ、お歌さん。お前さん、一杯ぐれえ、俺にさしたつていゝぢやねえか。さ、その洋盃をくんな。はゝゝゝゝ。』と、云つて、今戸さんはがくりとお歌の方へしなだれかゝつていつた。

十一の十三

お歌はそのいさくさで、大概皆の企んでゐることも讀めて來たので、態とがらりと態度を變へて、相手方に油斷をさせるやうに、自分も醉つた振りをしながら、

『さ、旦那。そんなことを仰有らずに、あんた御自分のお洋盃をお持ちなさいよ。このお洋盃は私んですから、さう彼方へさしたり、此方へさしたりしてゐちや、私が醉へませんわ。そんなこ

とを云はないでお酌でもして下さいよう。』と、蓮葉にいふ。

今戸さんはすつかりその手に乘せられて、けら〳〵矢鱈に笑ひながら、

『はゝゝゝゝゝ。よし、よし。ほんとにお歌さん。お前は面白え女だ。さ、もう一杯飲みな。今度は俺のお酌だ。』と、云つて、京枝の手から正宗の壜詰をとつて、彼女の肩へしなだれかゝつたまゝ酌をする。軀にしまりがないので、ともすると、注ぐ酒は零れさうになり、お歌はその壜を持ち添へて、

『ほゝゝゝゝ。だらしがないのねえ。しつかりなさいよ、旦那。』と、云つて、又ぐうツと呷りながら、

『さ、今度は旦那の番ですよ。私がお酌をするから、ぐうツと威勢よくお飲みなさい。』

今戸さんは洋盃を出して、

『有難えー、有難え。お歌さんのお酌と來ちやこてえられねえ。』と、ほた〳〵しながら。飲むお歌は重ねて酒を强ゐながら、何杯も何杯もたてつゞけに飲ませてしまつた。

京枝も村田も急に風向きが變つて來たので、彼等も豹目を外してさかんに手酌で飲み出した。

お歌は熱い息をふうツと吐いて、

『あゝいゝ氣持ちに醉つぱらつた。旦那、あんたもほんとに男らしくない方ですねえ。汽車に乘り遲れたなんてのは嘘なんでせう。およしなさいよ。ちやんと私にや分つてゐるんだ。前々から段取りをつけて置いて、此處の家で旦那と私を突合せるやうに狂言が書いてあつたんでせう。京枝さんと村田さんぢや、手もなく買收されてしまひさうな顏だからねえ。ほゝゝゝゝ。』と、傳法に笑つて、『それにしても、どうしてかう遣り口が拙いんだらう。これぢやあんた、すぐにお尻が割れちやふわ。』と、いふ。

今戸さんは頭を搔いて、

『いや、此奴あ手酷しいね。さうネタを割られちやつちや仕方がねえ。なあ、お歌さん。こいつあ仰せの通り狂言さ。だがお前さんだつて俺が現はれるまではまさかと思つたらう。かうやつてまで苦勞してゐる俺の氣ちつたあ買つて呉んねえ。お前だつて萬更物の分らねえ女でもなからうからねえ。』と、云つて、今戸さんはお歌の肩へ頰を摺りつけるやうにする。

お歌はせゝら笑つて、

『旦那、いくらあんたが押賣りをなすつたつて、玉が悪いんだもの買へやしないわ。あんたも何んの某つて人なんですから、何故もつと男らしく、度性根を据ゑて、正面から私を口説かない

の。いつも堂々辷りをしちや鼻から鯖を出してゐるんだもの、あんまり馬鹿々々しくつて、腹も立たないわ。ほゝゝゝゝ。』と、眞向から浴びせかける。

京枝も村田も稍呆氣にとられてお歌の顏ばかりみてゐた。

十一の十四

今戸さんは一人で額を叩きながら、

『はゝゝゝゝ。正面から口説けは恐れ入つたね、どうも。はゝゝゝゝ。いや、お歌さん、さうは云はせねえぜ。俺が開き直つて口説きや、いつもお前さんはすらりと外してしまふぢやねえか。さうかといつて、遠卷に責めかけりや、その口だ。全く手におへねえよ。はゝゝゝゝ。』

お歌は兩肱を卓子のうへゝ突きながら、

『それもこれも皆旦那が拙いからなんですよ。女なんてものは、旦那のやうな手が懸つて來たつて、なか〳〵うんといふもんぢやありませんよ。旦那だつて今迄さんざ藝者衆やなんかを食べ散らかして被居つたんだつてから、もつと奥の手をお出しなさいよ。私だつて序の口の角力ぢやないんだもの。四ツに組まなきや、待つたも御免だわ。ほゝゝゝゝ。』と、先を舐めきつてゐるやう

に笑ふ。

今戸さんはすつかり悦に入つて、

『こん、畜生、小生意氣なことを吐かしやがる。敵にとつて不足はねえんだから、そいぢや俺もいよ〳〵奥の手を出すかな。はゝゝゝゝ。』と、又洋盃を口に持つていきながら、『だが、お歌さん、お前だつて卑怯だぜ。何かツてとすぐに逃げを打つから、それぢやお前、勝負になりやしねえやな。ちやんと、とことんまで行つて、そこで押伏せるなり、押伏せられるなり、どつちかに形をつけなけりや、軍配は上げられねえぢやねえか。』

お歌は聲高に笑つて、

『さうねえ、千兩角力は土俵際ですからね。土俵際へ來て、放棄られりやもうお角力さんの足を洗ふのさ。ほゝゝゝゝ。』と、云つて、

『それぢや旦那、そんなに口惜しけりや土俵をおこしらへなさいな。さうしたら土俵際なり何處なりと旦那のお好きなところで、申合ひをしようぢやありませんか。その代り今度いなされたら、もう旦那もお諦めなさいよ。あんまり鼻から鍋ばかし出してゐると、出癖がついてみつともないからさ。ほゝゝゝ。』

今戸さんはその顏をうつとりみて、

『生意氣いふなよ。俺だつて行く處まで行きや、お前の一人位ふうツだな。はゝゝゝ。』と、負けてゐないで、急に何か思ひついたやうに、

『おい、村田、かうなりやもうたもんだ。早く自動車を一臺呼んで呉んな。』と、村田の方へいふ。

村田も顏を紅くして、立上りながら、

『旦那、自動車で御坐んすつて？　自動車なんか呼んで、何うなさるんですえ？』と、怪訝さうな顏になる。

今戸さんは手ばかり振つて、

『何んでもいゝ。早くして呉れ。おい、村田何を愚圖々々してやがるんだ。又もや御意の變らぬ中にぢやねえか。はゝゝゝ。』と、そつちをきつとみる。

村田は仕方がなしに　大急ぎで階下へ自動車を命じに降りていつた。

京枝は何事とも分らないので、今戸さんの顏ばかりみてゐたが、今戸さんはもう夢中になつてゐるやうに、

『おい、お歌さん、もう一杯飲みなよ。』と、云つて、又お歌の肩へしなだれ懸りながら、酌をしてやる。

十一の十五

お歌はやがて落着き拂つた聲で、

『ねえ、旦那。一體自動車なんか呼んで、どうなさる心算なんですの？』と、訊く。

と、今戸さんはにたり〳〵笑ひながら、

『どうもかうもねえさ。お前さんの仰せに從つて、土俵をつくらうッて了見だあね。はゝゝゝゝ。』

お歌も鼻の先で笑つて、

『そりや分つてますけどさ、何處へいくんですの？』

『さあ、何處でもいゝが、私や淺蟲の濕泉まで飛ばさうと思つてるんだ。彼處は一寸乙だからね。』

『まあ、淺蟲つて、先刻汽車で通つてきたとこでせう。あすこはいゝわねえ。あすこなら私、もう何んにも文句を云はずにお伴しますわ。海があつて溫泉があるんだつてから、さぞいゝでせうねえ。』と、お歌はいゝ氣持ちになつていふ。

今戸さんはお歌のその言葉を聞くと有頂天になつて、

『ぢや、お歌さん、お前素直に行つて呉れる氣かい？　はゝゝゝゝ。此奴あ有難え。これこそ瓢簞から駒が出たね。』と、いつて、京枝の方をみながら『おい、京枝さん、媒役がそんなほんやりした顏をしてゐちや可けねえぢやねえか。しやッきりしなよ。お歌さんは今夜淺蟲へいつて呉れるんだとよ。どうてるぢやねえか。』と、だらしもなく相恰を崩して嬉ぶ。

京枝も計略圖に當つたといふやうな顏で、無理に追從笑ひをしながら、

『まあ、旦那、それ御覽なさいな。案ずるより生むが早いぢや御坐んせんか。お歌さんも、隨分私達に手古摺らせたんだから、今夜はひとつ罪亡ぼしによろしくお賴ん申すよ。ほゝゝゝゝ。』と、機嫌をとるやうにいふ。

お歌は少時の間考へてゐたが、ふッと京枝の顏をみて、

『ねえ、だけど姐さん、これから行つちやどうせ今夜はとても歸れまいから、お師匠さんの方の首尾が惡いわねえ。姐さん、あんたそこんところはうまく何んとか胡魔化して下さらない？　序のことに姐さんにもう何も彼も引受けて貰ふわ。よくつて？』と、投げ遣りな調子でいふ。

京枝は幾度か合點いて、

『あゝ、いゝともさ。そんなことはちつとも心配しないだつていゝよ。ちやんともう私の腕ん中にや寸法がついてゐるんだもの。明日は十一時の汽船だつてえから、今夜ゆつくり泊つて、明日の朝の二番で歸つて來りや、大威張で間に合はあね。あの村田さんもちやんと心得てゐるんだから、仕事がしいゝんだよ。だからお師匠さんの方のことなんかちつとも心配しずに、ゆつくり旦那と二人で遊んでおいで。さうしてねえ、お歌さん、旦那の鞄の中にや大概な人間の一身代ほどのお紙幣が入つてゐるからね、あれをお前さんの腕次第でねえ。ほゝゝゝゝ。そうして今度の旅はお前さんと二人で成金みたやうな顔をして歩かうぢやないか。ほゝゝゝゝゝゝ。』

今戸さんはげら〳〵笑つてばかりゐた。

やがて間もなく、村田が呼びにいつた自動車がやつて來た。

十二の一

お歌と今戸さんがたつた二人きりの自動車に乗つて、青森の町端れの方へ出て來たのは、丁度その晩の十時半頃のことであつた。その自動車は村田から行先を聞いてゐるので、松並木の續いた稲田の間の街道を非常な速力で一散に驅けぬけていくのであつた。淺蟲までは途中に山道の難所があるので、運轉手はそれを慮つてやけに車を急がせてゆくのであつた。

今戸さんはもう前後のことも分らないやうに泥醉してゐて、唯お歌と一緒にかうして淺蟲へいけることが嬉しくて耐らないやうに、呂律の廻らぬ口でそればかり云ひ續けてゐた。

お歌はともすると彼女の胸へ倒れかゝつてくる今戸さんを邪慳に引起しながら、

『旦那、自動車がこんなに早く駛つてゐるんですから、しつかりして被居らなけりや駄目よ。』と、いふ。

今戸さんは何ういふ扱ひをされるもまるで感じないやうに、

『やあ、御免、御免、此奴あ俺が悪かつた。はゝゝゝゝ。いや、どうもすつかり嬉しくなつちや

つたんで、今夜はひどく醉つたよ。』と、手帛で顏ばかり拭きながら、『だが、お歌さん、到頭うめえ話になつちやつたねえ。これで俺あもう死んでもいゝや。かうやつてお前達のあとを追駈けて來たゞけあつて、やつとのことで念願が屆きさ。はゝゝゝゝ。なあ、お歌さん、俺あお前がひと晩でも云ふことを聞いて呉れりや百兩出すよ。手つかずで、お前、百兩つて錢が、お前のぽツぽへ入るんぢやねえか。どうだ、お歌さん、それでも不承知か。はゝゝゝゝ。』

お歌も醉つてゐるので、ふら〳〵しながら、

『旦那、たつた百圓ですつて。笑談云つちや可けないわよ。私やそれんばかしの目僂れ金でこの體は賣らないわよ。だから私や叩き大工から仕上げたやうな人は嫌ひさ。旦那は唸るほどお金をもつてゐるんだつてえから、そんなに吝ツ垂れなことを云はずに、思ひ切つてもつとお出しなさいよ。』と、いふ。

今戸さんは譯もなくげら〳〵笑つて、

『はゝゝゝ。叩き大工だつてやがらあ。扨ては俺の前生を聞きやがつたな。まあいゝ。そんなら二百兩、そんならいゝだらう。はゝゝゝゝゝ。』

『ほんとに旦那も思ひ切りの惡い人ねえ。あんた今死んでもいゝツて云つたぢやないの？　死ぬ

氣ならもつとお出しなさいよ。』

『はゝゝゝゝ。畜生奴。うめえことを云ひやがる。とんだ言葉尻をつかまへられちやつたな。だが、お歌さん。途端場になつて居直りや恐れ入るぜ。その話や、まあ彼地へついてからゆつくり手を〆やうぢやねえか。まあ、とにかくさ、値打ちだけのものはさらりと並べてみせるから、安心してゐねえツてことよ。俺だつて、今戸の渡邊さんだ。なあ、おい、お歌坊、馬鹿にして貰えますめえぜか。はゝゝゝゝゝ。』と、云つて、又お歌の膝へ倒れかゝる。

眞暗な街道は何處までも何處までも續いてゐた。

十二の二

お歌は又今戸さんの肩へ手をかけて、ぐいと向ふへ突き遣りながら、

『旦那。ほんとに、そんなにぐにや〳〵になつちやつちや駄目よ。しつかりなさいツてば。今に車の外へ放り出されちやつてよ。』と、いふ。

今戸さんは海鼠のやうに首ばかり動かしながら、

『はゝゝゝゝ。今此處で振り落とされて耐るもんか。なあ、お歌さん、大丈夫だよ。俺あこの通

りしつかりしてゐるぢやねえか。酔ふにや酔つてゐるが、まだ體はこの通りシヤツキリしてゐらあな。はゝゝゝゝ。さ、矢でも鐵砲でも持つて來い。はゝゝゝゝ。』

お歌はその喋ぎかたがあんまり馬鹿げてゐるので、噴笑しながら、

『旦那もいゝお年をして、酔ふと罪がないのねえ。あんまり馬鹿々々しいから、少し靜かにして被居いよ。運轉手さんが笑ふわ。』と、云つて、自分もともすると披かりかゝる着物の前裾を氣にしながら、

『ねえ、旦那。あんた、秋田へ御用があるなんてのは、皆な嘘なんでせう。つまり私をどうかして手に入れたい爲めに、かうやつて態々こんな處までくツついて被來つたんでせう。』と、底を割るやうに云ふ。

今戸さんはそれを聞くと、手を振つて、

『いや、さうぢやねえよ。そりや無論それもあらあな。だがそればかりぢやねえやね。全くのところ俺あ秋田へ材木を買ひ出しにいくんだよ。もう俺あの前生がお前にばれちやつてるんだから、今更隠しても初まらねえ。お歌さん、俺あ今大工のブローカーみてえなことをしてゐるのさ。はゝゝゝゝ。』

『ブローカーつて何あに？』

『ブローカーか？　ブローカーつてのは、つまり仲買みてえなもんさ。つまり手下の大工達に仕事を周旋してやつて、それで帆待をとるんだなあ。唯口ひとつで商賣が出來るんだから、こんなうめえ話やねえやな。それだから今度秋田で賣りに出てゐる山があるんで、それを俺あが一手に引受けてよ。その材木をすつかり伐り倒して東京で賣りに出さうといふ魂膽なんだ。今迄にもその商賣ぢや儲けの四割七八分つてとこは、缺かしたことはねえからね。はゝゝゝゝ。』

『まあ、呆れたもんだわね。だから私やお金を持つてる人を見ると腹が立つんだわ。何んだつて大きく山を張るから、資本が二倍にも三倍にもなるんだわ。人を馬鹿にしてるわねえ。それに、あんた、默つて何んにもしずにゐたつて、ずん〳〵子が子を生んで、お金つてものは増えていくばかりなんだもの。』

『はゝゝゝゝ。まあ、さう怒んなさんなよ。だつてそりや仕方がねえやな。資本をつくるまでにそれこそ苦勞に苦勞をしてるんだもの、それ位えな應報はなくつちや引合はねえやね。』

『引合ふも、引合はないもないわ。旦那なんざそのうへにまだ儲けようつていふんだもの。ちつと押しが太過ぎるわよ。どうせあんたなんぞ泡錢なんだから、もうちつと太ツ腹になつて、ぱつ

ぱと私達に吳れるがいゝんだわ。せめて罪滅ぼしにねえ。』お歌はさう云ひながら仲買ひと云はれた言葉からふつと相川のことを思ひ出してゐた。懷かしい彼の面影は、それと一緒に烙きつくやうに彼女の醉つた胸の底に映つて來た。

その時、突如、車の下では何かゞ爆發でもしたやうに、バアンといふ轟響が起つて、車は二度ほど振動した。

十二の三

自動車はそれから五間ばかりいくと、そのまゝ何うしたのか、ぱつたり停つてしまつた。お歌は悸乎として立上つて、前幌の間から運轉手の方をみながら、

『ねえ、ちよいと。何うかしたの？』と、訊く。

と、運轉手は自棄にエンヂンを止めて、側の扉を開けて下へ下りながら、

『え、なあに、前輪がパンクしたらしいんですが……』と、いふ。

お歌はやつと安心して、

『まあ、パンクならいゝけど、私又誰れかゞ鐵砲でも擊つたのかと思つたわ。あゝ、吃驚した。』

と、云つて、胸を撫で下ろしながら又もとの座席へかへる。

今戸さんは氣にもかけてゐないやうに、

『お歌さん、誰れが今頃鐵砲なんぞ擊つもんかな。何んでもねえやな。はゝゝゝ。お前と二人でかうしてゐられりやパンクしようが、引覆へらうが構つたこたあねえよ。死なば諸共さ。はゝゝは。』

『笑談ぢやないわよ。自動車が引覆へつて、旦那と一緒に情死なんざ隨分氣が利かないわ。ほゝほゝ。』

『まあ、何んでもいゝ。お歌さん、お前もつと此方へ寄んなよ。お前厭でも寄懸らして吳んな。自動車が止つたんで、がたごとやらねえで、いゝ氣持ちだ。はゝゝゝゝ。これぢやまるで待合の四疊半で寢てゐるのも同じ氣持ちだ。このうへの贅澤にや枕が欲しいぜ。はゝゝゝゝ。ヱヽ、人目を忍ぶ四疊半か。』と、今戸さんは中音で鼻唄をうたひだして、彼はお歌に寄りかゝりながら、さもいゝ氣持ちさうに、とろりとした眼つきをしてゐた。

お歌も車が止まると何んだか眼が眩るやうな醉ひを覺えて、蟀谷のところでづきん〳〵脈を打つてゐるのが自分でもよく分つた。それと同時に車の動搖はなし、ふつくりとしたクッションの

肌觸りが馬鹿にいゝ工合で、彼女はいつかしらうつとりと眠氣を催してくるやうな心持になつて來た。今戸さんの濃い唄聲は胸の底へ滲むやうに聞えて來て、それが一層眠氣を誘つてくるのであつた。

運轉手は車の前輪のところへ踞んで、一人でせつせとパンクしたタイアを取換てゐる。その鐵槌の音も遠くに聞えて、お歌はともすると、氣が遠くなつてゆく……。

お歌は少時の間うと〳〵したかと思ふと、何うしたはづみだつたか、危く前蹌りに倒れようとしてはツと眼が覺めた。と、みると、今戸さんはもうクッションの向ふへ大の字なりに倚りかゝつて、大きな鼾をかきながらぐう〳〵寢込んでしまつてゐる。だらしなく口を開けて、帽子は床のうへゝ放り出して、前後も知らずに睡りこけてゐるその顏は、噴出したくなるほど可笑しかつた。

お歌は幌のところから顏を出して、

『ねえ、ちよいと運轉手さん、まだなか〳〵直らないこと？』と、囁くゝ

と、運轉手は此方を見もしずに、

『え、お氣の毒ですが、もう十分ほどお待ちなすつて下さい。』と、いひながら、一心不亂に新しいタイヤを車體へ取附けてゐる。

お歌は待ち草臥れて、今度は欠伸をしながら、ふつと手を伸ばすと、彼女の手先は何か固いものに觸つた。眼をとめてみると、それは今戸さんが大事に抱へてゐたあの折鞄であつた。

十二の四

お歌は先刻宿屋で今戸さんがその鞄の中から、紙幣をざく〳〵出しては勘定をしてゐたのをふつと思ひ出した。勘定を濟ますと片端から束にして、又その鞄へ藏つたのもみてゐた。それを思ひ出すとお歌は何にかしら好奇心に似た或心持ちに胸を咬られて、何といふ譯もなくその鞄の口を開けて見度くて耐まらなくなつて來た。それには慥かに彼女の醉ひも手傳つてゐて、とにもかくにも彼女が平心を失つてゐたのは事實であつた。

お歌はやがてそつと今戸さんの方へ寄つていつて、薄暗い前燈の照り返しの中でその寢顏をじいッと眺めた。今戸さんはすつかり醉ひが廻つて、もう何をされても分らないやうに、ぐう〳〵眠つてゐる。それをみると、お歌は安心して、然るで盜みでもするやうな心持ちで、そうッと鞄へ手をかけた。

鞄の口は、先刻西洋料理屋で勘定を拂ふ時に、急いだせいか、鍵も何もかけずにあつた。で、金具へ指をかけてうへゝ押すと、それは手もなく開いてしまつた。

お歌は今戸さんの方をみい〳〵暗い光の中で鞄の口を一杯にひろげて、中を覗いてみた。その中には先刻のやうに、幾つとなく紙幣束がぎつしりつまつてゐる。そのうへには落ちないやうに細いビジョウが二つほどかけてあつて、そのうへにもう一枚蓋がかゝるやうになつてゐた。

お歌は少時の間、見てはならないものをみてゐるやうに、身動きもしずにじッとしてゐたが、やがて小聲で、

『旦那。旦那。』と、呼びながら、今戸さんの膝のところを揺ぶつてみた。それでも今戸さんは眠を覺さうともしない。

その時、お歌の頭腦には、構はないから の中から幾らか紙幣をぬきとつて、知らん顔でほッほをしてやれといふ考へが閃めいて來た。この人はいつも金ばかりみせびらかしていけ好かないから、取つてやつたらどんなにいゝ氣味だらう。自分は別に金そのものは欲しくはないが、業腹だから取つてやれといふやうな、稍惡戯の氣持で、お歌は鞄の中へ手を入れた。

さうなるとお歌は大膽になつていゝ加減に數へながら幾枚かの紙幣を束の中から引拔いた。そ

してそれを帶の間へ押込むと、手早く鞄をもとのやうに閉めて、又今戸さんの側へ寄つていきながら、

『旦那、旦那。』と、聲をかけて見た。

ぐつすりと前後も知らずに眠り轉けてゐる今戸さんが、それ位なことで眼を覺す譯がなかつた。お歌はそれを見澄すと、何と思つたか其まゝすうッと立つて、右手の扉を開けて、自動車から下りた。

と、みると、今迄は氣が附かなかつたが、暗い畑の彼方には一筋長く土手が闇を劃つてゐて、その彼方には町らしい燈影が小山と小山の間に點々と續いてゐる。その土手のうへは鐵道路にでもなつてゐるらしく、空には星が降るやうに瞬いて、吹く風は夏とは思へないほどれついてゐた。

お歌は車の修繕に沒頭してゐる運轉手の方をみて、

『ねえ、運轉手さん。向ふにみえるあの町はなんてえところなの？』と聞いた。

十二の五

運轉手はいつの間にかお歌が車から下りて來てゐるので、怪訝な顏で此方を向いて、
『あれですか、ありや浦町といふ村ですよ。』と、答へる。
お歌は眠を据ゑて、闇に瞬く小さな燈影を眺めながら、
『まあ、浦町つていふんですの。浦町つていふのに村ぢや可笑しいわねえ。ほゝゝゝ。あの、あすこには停車場があつて？』と、訊く。
運轉手は宙腰になつて、
『えゝ、ありますとも。あすこに小高く見えてゐるのが、驛の倉ですよ。』
『あそこまで何丁位あるでせう。』
『さあ、それでも六七丁はありますかなあ。』
お歌はそれを聞くと、ふつとこのまゝ遁げてしまつてやらうかといふ氣になつて來た。今戸さんがぐつすり眠つてしまつてゐるのは勿怪の幸であり。ひとつもう一遍鼻を明かさせてやらうかと思ふと、もうお歌はとてもじッとしてゐられなかつた。で、彼女はもう一度そつと車内の樣子を窺つてみて、今度は運轉手の傍へいつて聲を潜めながら、
『ねえ、あんた。その浦町の停車場へは、この道を眞直にいけばいゝの？』と訊く。と、運轉手

は捻鍔をしめながら、
『え、これを眞直にいつて、村へ入つたらすぐ右へ曲ると停車場の前へ出ますよ。』
『さう、あの、それでこれから行つて、まだ青森へいく汽車があるでせうか？』
『え、ありますとも。丁度十一時四十五分に青森へつく終列車がありますから、少し急いでいきや間に合ひますよ。』
それを聞くと、お歌はもう矢も楯も耐らなくなつて來た。で、彼女はもう何を考へてゐる餘裕もなく、運轉手の顏をみて、
『ねえ、あんた。實は私、淺蟲までこの旦那のお伴をする氣で來たんだけど、何だか氣持ちが惡くつて、とても乘つてゐられないから、これから汽車で青森へ歸らうと思ふのですから、どうかこの旦那だけ淺蟲へ連れてつてあげて頂戴。今それをお斷りしようと思つていろ〳〵にして起してみたんですが、何しろ醉つてらしつて、どうしてもお眼覺めにならないから、あんたあとでさう申上げて置いて頂戴な。』と、云つて、それなり嘔吐しでもするやうな樣子をしながら、ついと道傍の桑畑の中へ入つていつた。そしてそのまゝ畑の畔を一足々々傳つて、自動車の停つてゐるところから漸次と遠ざかつていつた。もうさうなるとお歌は全く盜人が現場から遁げ去る時と同

じやうな心持ちになつてゐた。

お歌はものゝ三丁もくると、やつと安心して本街道へ出た。そして一生懸命になつて、村の燈影を目當てに浦町の方へ辿つていつたが、そのうちにもしや今戸さんが眼を覺まして、自分が遁げたのを知つて、慌てゝ追驅けて來やしまいかといふ不安が俄に胸を衝いて來たので、彼女は何にかしらうかくしてゐられなくなつて、せつせと歩きながらも、もと來た道の方へ始終氣を配つてゐた。

その時、彼方では突如として、エンヂンの爆音が夜の靜けさに、轟々と響き渡るのが遠く聞えて來た。お歌は怪乎としてそこへ立疎んでしまつた。

十二の六

お歌はもうてつきり今戸さんの乘つた自動車が此方へ追驅けてくるものと思つて、ぞうッとしながら、いきなり又道傍の桑畑の中へ入つていつた。そして背丈よりも高い桑の葉の繁みの中へ身を隱しながら、少時の間は息を殺して彼方から近づいてくる物音に聞耳をたてゝゐた。

エンジンの音はまるで空耳のやうに、いつまでもいつまでも聞えてゐたが、併しどう聞いても

それは此方へ近づいて來るやうな氣勢はしなかつた。そのうちにふつと聞えなくなつてしまつたので、お歌は漸う安心して、又桑畑から出て、今度は道の片蔭をそゝくさ足に任せて急いでいつた。時々彼女は後を振顧つてみたが、自動車の音はもう遠く去つたのか唯道傍の草叢で鳴きしきつてゐる蟲の聲ばかりが、異樣な靜けさをお歌の醉つた胸に、滲ませて來るのであつた。

それから間もなくお歌は見も知らぬ浦町の村へやつとのことで辿りついた。そこはどうやら海沿ひらしく、何處からともなく磯の匂ひが漂つて來て、まるで漁師町のやうな寂れた村であつた。もう方々の家々では戸を閉ざして、夜深い闇がそこの軒先へ來て佇んでゐた。たつた一軒小料理屋のやうな家が戸を開けてゐたが、明るい燈影が凸凹した道の面に流れ出してゐるきりで、そこでは人聲さへ聞えなかつた。

お歌は時間ばかりが氣になつて、もう手も足もぬけていきさうに疲れてゐるのをやつとの思ひで、停車場まで辿り着いた。そこはほんの名ばかりの停車場で、二人ばかりの年老つた客が待合室で列車を待つてゐた。

お歌はいきなり出札口のところへいつて、そこから中を覗いてみながら、

『ちよいと、あの、青森へ行く汽車はまだありますの？』と訊く。

と、中では一人の若い驛員が思ひ懸けない女の聲に驚かされたといふ顏で、此方をじろ〳〵みながら、

『え、もう十六分ほどで來ます。』と、東北訛の强い聲でいふ。

お歌はそれを聞くと、やれ〳〵助かつたといふやうな氣になつて、直ぐさま自分の財布を出して靑森までの切符を買つた。その時、彼女は先刻今戸さんの鞄からぬき取つた紙幣が內懷へ押込んであるのをふつと思ひ出して、それをそつと取出してみた。と、それは思つたよりも澤山あつて、少くとも三百圓から上はあるらしかつた。お歌はそれをみると、今更のやうに驚いて、心の底では飛んでもないことをしたとは思ひながらも、すぐに又自分で自分の心を見まいとするやうに、

「なあに、構ふもんか。三百圓だつて四百圓だつて、安いもんさ。』と、口の中で呟いて、その紙幣を無理に財布の中へ押込んで、それなり待合の冷たい木のベンチへいつて、ぐつたりと腰を下ろしてしまつた。それと同時に又眼の眩るやうな激しい醉ひが、彼女の五體に襲ひかゝつて來た。

十二の七

それから間もなく、定刻よりも五分ほど遲れて、靑森ゆきの列車は驛へ入つて來た。お歌は少時じいッとしてゐたので、醉ひはいくらか醒めては來たが、それでも列車へ乘り込んだ時には、まだ自分では足許がふら〳〵してゐるやうな氣持ちがしてゐた。

幸ひその列車はひどく透いてゐて、お歌の乘つた車室にはほんの七八人の乘客しかなかつたので、彼女は隅の方の坐席へいつて、車窓へぐつたりと上半身を凭せかけながら、ゆる〳〵と足を踏み伸ばすことが出來た。靑森迄はほんのひと丁場であつたが、お歌はこれでもういよ〳〵今戸さんに追驅けて來られる心配はないと思ふと、氣がゆるんで、せめて五分でも十分でもたつた一人で居眠りでもしながら、夜の汽車にゆられていき度かつた。

お歌はじつと眼を瞑つて考へてみると、夕方からのさま〳〵の出來事がやつと心に思ひ返されて來た。今になつて考へてみると、今戸さんが汽車に乘り遲れたなぞと云つて、あの西洋料理屋へ待伏せをしてゐたことも、それから京枝と村田がなれ合つて態々自分を宿屋から誘ひ出して、うまい工合に醉はせ、まんまと今戸さんへ取持たうとしたことも、一々はつきり分つて來る。

それにしても自分は何うして今戸さんと一緒に淺蟲へ行かうなぞといふ氣になつたのであらう。どうせ淺蟲へいつたつて、今戸さんの自由になる氣遣ひはないのであるから、構はないやう

なものゝ、併し自分は彼地へいつてから何ういふ手で今戸さんに脊負投げを喰はせるつもりでゐたのであらう。それを思ふと、お歌は自ら好んで危地へ陥づていかうとした自分の淺墓さが少しづゝ後悔されて來たのであつた。幸ひ自動車に故障が出來たので、うまく逃げて歸ることが出來て何よりであつたが、もしもあの儘ずうツと淺蟲まで行つてしまつたら、今頃はどんな目に逢はされてゐるかも知れないのである。今戸さんとてもかうしてこんな遠方まで出懸けて來てゐるのであるから、今夜こそ並大抵なことでは承知しまい。あんな前生の男のことであるから暴力でも用ゐられたら、それこそもう自分は一耐りもなく押伏せられてしまはなければならないのである。それを思ふと、お歌はぞツとして來た。

取つて來た金のことも、お歌は妙に心配になり出してゐた。どうせあの人のことだから、泡錢に相違ないとは思ひながらも、お歌は不正當な手段で盗んで來たゞけに氣が咎めてならなかつた。

列車が青森へ近づいてゆくに從つて、お歌はそんなことが先から先と氣になつて耐らなかつた。浦町ではあのまゝ汽車に乘ることが出來たが、併しひよツとしたら今戸さんはあの後で眼を覺まして、すぐに自動車をあとへ引返させたかも知れない。さうとすると、自分が青森の宿へ着く前にもう今戸さんは彼處へ歸つて來てゐて、踏捕る位なことならまだしも、もし金を盗んだことでも腹癒せに大聲で怒鳴り廻されでもしたら、師匠の手前自分はどんな思ひをしなければならないであらうか。さうした不安は刻々にお歌の胸に募つてゆくのであつた。

十二の八

その列車が青森の驛へ着くと、お歌は何よりも宿屋の方の様子が氣に懸るので、そゝくさ停車場の改札口を出て、師匠達の泊つてゐる千鶴屋の方へ歩いていつた。醉ひは大分醒めてはゐたが、それだけに彼女は却つて神經質になつてゐた。一寸した人の足音や、連絡船へ積み込む手荷物の車の音にもひやりとするほど、胸が躍つたりした。

千鶴屋の傍まで來懸ると、彼女は態とそこの角の電信柱の陰へ佇んで、少時の間四邊の様子を窺つてゐた。千鶴屋はもうすつかり大戸を卸して、正面の雨戸に切つた潜戸だけが開いてゐた。その前には別に自動車が停つたやうな氣勢もなく、宿の客間でも騒いでゐるやうな人聲も聞えないので、お歌はやつと安心して、それでもそこいらを見廻し見廻し宿の入口の方へ近付いていつた。そして潜戸の障子へ手をかけてみると、それは異様な物音を靜けさの中へ刻みながら手もなく開いたので、お歌は却つてはツとしながら、一寸躊躇したあとで、今度は中を覗きながら表の

土間へ入つていつた。

と、なかではその物音を聞きつけて、店で帳合をしてゐた番頭が吃驚したやうな顔をあげて、

『おや、お歸んなさいまし。』と、いふ。

お歌は愛想笑ひをして、番頭が何か云はうとするのを手で押止めながら、

『ねえ、ちよいと番頭さん。あの、先刻私達と一緒に此方へ來たあの肥つた男の方ね、あの方が歸つて來てゐやしませんか？』と、訊く。

番頭は怪訝な顔で、

『いゝえ、あの方はあれッきり此方へは。』

『歸つて來ないの。』

『へえ、……』

『さう。そんならいゝわ。それぢや村田さんや他の若い連中は？』

『へえ、皆さんはもう一人殘らずお歸りになりまして、先程お寢みになつてしまひました。』

お歌はそれを聞くと、もうこれで大丈夫だと思つて、

『まあ、さう。私ばかり大變に遲くなつて、濟みません。』と、云つて、それなり薄暗い電燈の點

つた階段を二階座敷の方へ上つていつた。

二階座敷には一座のもの達が三間に別れて大きな蚊帳の中へごろ〳〵雜魚寢をしてゐた。お歌は足音を忍びながらそつと蚊帳の中をのぞいてみたが、手前の方の座敷の蚊帳には秀駒や巴昇がしどけない姿をして寢こけてゐるので、彼女はもう着のみ着のまゝでその中へ忍び込んで、巴昇の隣へ手枕をしたまゝごろりと寢てしまつた。

お歌はそのもの音で誰れかゞ眠でも覺ましやしないかと思つてひや〳〵してゐたが、幸ひ皆なは旅の疲れがあるうへに、丁度寢入り端なので、誰れ一人寢返りを打つものさへゐなかつた。

一つ置いて向ふの座敷では師匠らしい咳拂ひの聲が聞えたと思つたが、その後はもう何の物音もしないので、お歌はそのまゝいつともなく自分もうと〳〵と深い夢路に落ちていつた。

十三の一

お歌はその翌日の曉方になると喉が渇いて寢苦しくて耐らないので、六時頃にふつと眼が覺めてしまつた。で、仕方がなしにソツと起き上つて、室の隅に置いてある火鉢のところまで匐つていつて、鐵瓶の湯冷しを誰れかの飲みほした茶碗に注いで、ぐうツ〳〵と、二三杯立て續けに飲んでゐると、その時、隣の座敷からは突如に、

『おい、誰れだい？』と、呼ぶ聲が聞えた。それは紛れもない師匠の聲で、昨夜はもう一間先の座敷へ寢てゐるとばかり思つてゐたのに、生憎隣の間へ寢てゐたのであつた。

お歌はその場合返事をしない譯にはいかないので、もう進退谷まつて、

『はい……』と、小聲で返事をした。

と、師匠は機嫌の惡さうな、尖つた聲で、

『はいぢや分らないぢやないか。誰だい？　名をお云ひな。』と、つんけんしながらいふ。

お歌は思ひ切つて、態と平氣を裝ひながら、

『お師匠さん、私です。歌です。』と、答へると、師匠はさも吃驚したやうに、

『なに、お歌だ？　お前いつ歸つて來たんだい？　今かい？』と、云つて、やがてむつくと起き上つて此方へやつて來るやうな足音がする。

お歌は慌てゝ披かつた着物の前を合はせて、身繕ひをしながら、

『お師匠さん。申遲れまして相濟みません。私、昨晩はつひ遲くなりまして、丁度十二時に歸りましたのですの。』

その言葉と一緒に、境ひの紙襖はがらりと開いて、そこから細かい縞の浴衣を着た師匠が半身を此方へ突入れて、

『なんだつて？　昨夜の中に歸つた？　嘘を吐くのも大概にするがいゝやね。馬鹿々々しい。私やちやんと十二時迄起きて待つてゐたんだよ。大方寢呆けてゐて、今朝の六時が十二時にみえたんだらう。』と、鋭く突込むやうにいふ。師匠の顏は蚊帳に隱れてみえなかつたが、併しお歌には怒つてゐるその顏が眼にみえるやうであつた。

お歌は昨夜からもうちやんと豫期してゐたので、格別驚きもしないで、

『いゝえ、お師匠さん。私、嘘なんか吐きやしませんわ。ちやんと十二時に歸つて、巴昇さんの隣へ今迄寢てゐたんですもの。もし嘘だと思召すなら、あの、階下の番頭さんにお聞きになつて

下さいましな。番頭さんは私が歸つて來た所を見てゐましたんですから。』と、申開きをするやうにいふ。

師匠は腹立たしさうに、

『お歌。そんな辯解はまあ、あとから聞くから、お前兎に角此方の座敷へお出で。私やお前に云つて聞かせなけりやならないことがあるんだから。』と、いふ。

お歌はもうかうなつては一度は師匠の意見を聞かなければならないと覺悟をして、やがてもう一杯ぐうツと湯ざましを呑むと、袖口で口を拭きながらおづ〳〵師匠のゐる座敷の方へ入つていつた。

十三の二

師匠はそのまゝ蚊帳の釣手を自棄にかなぐり捨てゝ、

『さあ、お歌、此方へおいでつたら、此方へお出でよ。何にも私や厭なことを云ひ度かないが、お前もあんまりだと思つて、實は昨夜は私も隨分腹が立つたのさ。どうせ旅先のことだから私はいさこざ變なことは云ひ度かあないさ。だけど、かういふ時にびし〳〵云つて置かないと、お前

はちつとも云ひしめがないんだからねえ。お酒を飲みや、昔つから氣の大きくなるお前だつた。』と、云つて、今度はそこいらの茶碗や、久須に當り散らかしながら、『おい、お歌、お前何にもそんな處へ突立つて殊勝らしく、しほ〳〵としてみせることはないぢやないか。さ、此方へお入りつたら。お前にだつて云ひ度いことは、いくらもあるんだらうから、それも聞かうぢやないか。』と、そのまゝ窓際へがくりと腰を落としてしまふ。

お歌ももう度胸を据ゑて、師匠の寢てゐたらしい臥床の裾の方へいつて、そこへ坐つた。そして次第に依つては、昨夜の一件をすつかり師匠の前へさらけ出して、何も彼も京枝と村田の故にしてやらうと腹を極めてゐた。こんな旅先へ出てゐること故、さうした問題が起れば、一座の仲間割れになるのは知れてゐるが、併しお歌はもうそんなことを考へてゐられる程の餘裕をもつてゐなかつた。それにその朝は宿醉ひで、胸苦しいうへに、もう頭腦は散々に亂れてゐた。

師匠はやがて煙草を取出して、火をつけながら、

『お歌、一體お前はどういふ了見で昨夜のやうなことをして呉れたんだい？　あれ程平常から私が云つて聞かせてゐるのに、いくら旅先へ出てゐるからつて、私に無斷で、他處へ寢泊りすると は何事だらう。つまりお前は私を舐てゐるからそんな眞似をするんだ。私の身内のものがそんな

風ぢや、外の若いもの達にまるでしめしがつかなくなつてしまふぢやないか。そんなことでお前は眞打が勤まると思つてゐるのかい？』さういふ師匠の言葉は漸次と押へきれない憤怒を示して來た。

お歌はじいッとしてそれを聞いてゐたが、やがて青くなつた顏をあげた。

『お師匠さん、口答へをするやうで私ほんとに相濟みませんけれど、あの昨夜は私決して他所へなんか泊りやしなかつたんです。それだけはどうか私の申すことを信用なすつて下さいまし。今も申したとほり此處の番頭さんにお聞きになりや分るんですから。』と、云つて、一寸調子を張りながら、『お師匠さん、私昨夜は隨分な目に逢はされたんで御座んすわ。京枝さんと村田さんと二人して、私に無理押しつけにお酒を呑ませて、私が醉つてたところで、あの今戸さんと私を一緒に自動車に乘つけて、淺蟲とかいふ處へ送り込んでしまふつもりでゐたらしいんですの。私、途中までいつて、漸うのことでその自動車から下りて終列車で此方へ逃げて歸つて來たんで御座んすわ。』と、彼女はもう臆面もなく昨夜の出來事をすつかり師匠の前で打明けてしまつたのであつた。

十三の三

師匠は逐一その話を聞くと、吃驚したやうな顏になつて、

『まあ、お歌。ぢやお前、今戸さんは昨夜の汽車で秋田へ立つたんぢやないんだね。ふむ……』と、云つて、ぢろりと蚊帳の隅の方を睨みつけるやうにしながら、『道理で、私やあんまり話がうま過ると思つたよ。ぢややつぱり何も彼も皆京枝さんの書いた狂言だつたんだねえ。』と、いくらか顏色を和げてくる。

お歌は此處だといふやうに、

『お師匠さん、さうなんですの。つまり京枝さんと村田さんが共謀になつてやつた仕事に相違ないんですわ。それでなきや今戸さんと、さうまくあすこの西洋料理屋で打衝かる譯がないんですもの。』

『さうだとも。いゝえね、私も實は少し臭いと思つてゐたのさ。何しろ京枝さんのいふのにや、お前達と皆して活動をみにいつて、歸りに口寂しいからッてんで、小料理屋へ上つて一杯飲んだら、そこでお前がすつかり醉つちやつて、嘔すやら、苦しむやらで大騒ぎをして、どうしても歩

けないッていふから、やつとそこの家へ頼んで今晩一晩預つて貰ふことにして、私達だけ歸つて來たとかういふのさ。私も變だとは思つたが、村田までがまことしやかな顔でいふんで、つひ乘つちやつたんだが……。』

お歌は呆れて、

『まあ、隨分ですわねえ。嘘を吐くにも程がありますわ。私、何ほ何だつて、旅先でそんな、そんな馬鹿な醉ひ方をして耐るもんで御座んすか。ほんとに呆れてしまひますわねえ。此方へ歸つて來ちやそんないゝ加減なことを云つて、どうかして自分達だけでうまい汁を吸はふと思つたつて、さうは問屋が卸しませんわ。私、何んでもよう御座んす。今日こそ私思ふ存分云つてやつて、お師匠さんの前で對決して貰ひますわ。それでなけりや何處までもつけ上つて、これから先、何をするか知れたもんぢやありませんもの。』

師匠もそれですつかり證據が上つたので、機嫌を直したやうに、

『ほんとにさ、お前今日はうんと云つておやりともさ。人を馬鹿にしてゐらあね。どつちかの云ひ分が立たなけりや、私が第一虚分のつけようがないもの。』と、云つて、又新しい煙草に火をつけながら、

『それで今戸さんは何うしちやつたんだい。それなりたつた一人で淺蜊へ連れていかれちやつた譯なのかい。』

師匠がさう云ひかけてゐると、その時、蚊帳の隅のところがむく〳〵動きだした。それと一緒に誰れかゞ、『あゝッ』と伸びをしながら、『おや、もう夜が明けたのねえ。』と、呟いて、むツくり起き上つて來た。蚊帳が顔へ觸るので、その女は煩ささうにそれを掻き分けながらぢツと此方を覗くやうにしたが、ふツとみると、それは京枝であつた。お歌はその姿をみたゞけで、もう妙に喧嘩を賣り度いやうな、突ッ懸ッていき度いやうな緊張を覺えて來た。

十三の四

京枝はそのまゝ振つた寢着の前を合はせながら、蚊帳から出て來たが、すぐ鼻の先に師匠とお歌が唯ならない顏をして坐つてゐるのをみると、さすがに度膽をぬかれたやうな顏になつて、

『まあ、お歌さん、いつ歸つて來たの？』と、慌てゝいふ。彼女の頰にもまだ昨夜の醉ひが殘つてゐて、眼頭にはぢゞむさい眼脂がくッついてゐた。

お歌はふんといふやうな顏で、

『お早う。姐さん。私、昨夜十二時一寸過ぎに歸つて來ましたの。』と、それでも靜かな調子でいふ。

と、京枝は怪訝さうな顏で、何ともつかないやうに笑つたが、やがて、

『まあ、ぢや昨夕のうちに歸つて來たの？　そりやよかつたわねえ。私やあんまりあんたが醉つてたから、あれから何うしたらうと思つて、歸つて來てからもそりや心配してたのよ。別に體の工合なんか惡くなくつて？』と、親切ごかしに訊く。さう云ひながら京枝は細帶をぎうとしめて敷居際のところへ、ぐたりと坐つた。

お歌はさういふ彼女の顏をじいッとみてゐたが、少時すると又、笑ふやうな語調で、

『姐さん、私、お庇護樣で、別に體に傷もつかずに歸つて來ましたから、どうか御安心なすつて下さい。だけども、私、隨分姐さんも卑怯だと思ひましたわ。人間てものは醉つてしまやあ、あどさきの考へも何もなくなつてしまふもんですからねえ。全く死んだも同然なものを引捕へて、昨夜のやうな眞似をするのは、私、ほんとに卑怯だと思ひますわ。』と、いふ。

京枝はきよとりとした眼つきをして、笑ひながら、

『あら、お歌さん。何を云つてるのさ。お前さん、まだ醉つてるんぢやないの。私が何に卑怯なことなんかして？　昨夜あんたを置いて、先へ歸つて來たのが氣に障つたの？』と、白ばくれる。

お歌はきッとした眼を据ゑて、

『姐さん、私そんなことを云つてゐるんぢやありませんわ。姐さんも隨分ひどいことをなさるぢやありませんか。姐さんは昨夜此方へ歸つて來て、お師匠さんにまるであとかたもないことを仰有つたんだつていふぢやありませんか。いゝ加減なこしらへごとを仰有るにも程がありますわ。私がお料理屋へ打倒れて寢てしまつたなんて、隨分ぢやありませんか。姐さんが此方へお歸んなすつた時分にや、私姐さんの手に乘せられて、あの今戸さんと一緒の自動車で、とんでもないところへ連れていかれてしまふところだつたんですわ。もう姐さん、何んと仰有つたつて駄目なんですよ。私もうすつかり何から何迄お師匠さんに饒舌つてしまつたんですもの。』さういふお歌の眼には激しい憤怒が燃えて來た。

京枝はさすがにもう言葉が口には出ないやうに呆氣にとられてゐた。

十三の五

その時、師匠も重々しい調子で口を切つて、

『ねえ、京枝さん、私や寢起きにこんなことを云ふのは厭だけど、實は私も今お歌が云つたやうに、お前さんの昨夜の仕打に對しては正直なことを云ふと、腹が立つてならないのさ。どうせそりや私が自體、師匠としてお前さん達を押へて立つ丈の貫目がないんだから、お前さん達に馬鹿にされて、いゝころ加減な眼瞑しを喰はせられて、のほゝんでゐなけりやならないのかも知れないけど、それにしたつて餘りな仕方ぢやないか。いかに自分の爲めになるお客だつて、あんな渡邊さんのやうな人に私の大事な弟子を押付けられて耐るもんか。それも並大抵なことなら私も大眼にみるけど、こんな旅先へ出てまで、いろんなからくりをやられちや、私だつて默つちやゐられないよ。自分で勝手な眞似をして置いて、お歌が醉つて打倒れちまつたもないもんぢやないか。人を馬鹿にするのもいゝ加減におしな。』と、怒りに燃えていふ。

お歌もそれに力を得て、

『姐さん。私、今迄は一座の看板に障ると思つて、何も彼もじッと我慢してゐましたけど、私、今日こそ云ふだけのことを云はして貰ひますわ。そりや姐さんは私を今戸さんへうまくはめこめば、某かうまい汁も吸へるでせうけど、私だつて、ずぶ素人ぢやなし、姐さんのいゝやうにばか

りにやなつちやゐませんわ。私昨夜だつてまさかあんなことになるんぢやあるまいと思つてたもんですから、安心して交際つてゐるうちに、いつの間にか自動車に乘ッけられちやつたんで、私、ひとしきりは何うしようかと思つて、そりやもう腹が立つて、腹が立つて耐らなかつたんです。幸ひ自動車が途中でパンクしたんで、それをいゝ機に私や眞暗な田舍道を歩いて、桑畑へ隱れたり、何かしてやつとのことで逃げて歸つて來たんです。私がこんな目に逢つたのも、皆姐さん、あんたの故ですわ。私やそれを考へると、何うした譯でこんな目に逢はなけりやならないのかと思つて、私、それが口惜しくつて耐らないんです。ですから、私、もしこの先もこんなことがあるやうなら、お師匠さん、私もうとても姐さんと一座は出來ませんから、こゝで別れて、東京へ歸らして下さいまし。こんなことを云ひ出して、お師匠さんにはほんとに相濟みませんけれど、でも、どうか私の身にもなつて下さいましな。』お歌はさう云ひながら甘えるやうに師匠の顏をみたが、その眼にはうすく涙さへ浮めてゐた。

師匠もお歌の心の中を思ひやるやうに合點いて、

『ほんとにさうだとも。私だつてお前の云ふことは尤もだと思ふよ。』と、云つて、又京枝の方をきッと見ながら、

『ねえ、京枝さん、お前さんは、こんなことをしでかして、私の一座を壞す氣なのかい？　それならそれではつきり云つて貰はうぢやないか。私にだつて、さうなりや又考へがあるんだからね。』師匠の言葉は持性の嚴格さと利かぬ氣をあらはにみせて來た。

京枝は下唇を嚙みしめたまゝ默つて首を垂れてゐた。彼女の肩先は云ひ甲斐もなくぶる〳〵慄へてゐた。

十三の六

師匠は京枝があんまり默つてゐるので、焦燥かしくなつたやうにやがて又腹立たしさうな口調で、

『ねえ、京枝さん。お前さんももう十臺や廿歳臺の人間ぢやなし、胸に手を置いて考へてみたらちつたあ前後のことも分りさうなもんぢやないか。私とお前さんとはもう彼此八年からかうやつて一座をしてゐるんだし、ひとつ釜の飯を食べて苦勞をしあつて來たも同然の仲ぢやないか。それだのに今になつてこんな厭なことで仲間割れがするやうなことがあつちやお前さんも私に對して濟まないだらうと思ふからこそ、私も面と向つてこんなことを云ふのさ。ほんとにお前さんは

何ういふ了見でこんなことをするのさ。あんまり馬鹿馬鹿し過ぎて笑へもしないぢやないか。』と、いふ。

京枝はその時やつと口を切つて吃りながら、

『お師匠さん、ほんとに相濟みません。私や何も惡い氣があつて、こんなことをしたんぢやないんです。あんまり今戸さんが一生懸命なんで、つひ人情にからんぢやつて……それに昨夜はお歌さんも、その氣になつて、自分で淺蟲へ行くつて云ひ出したもんですから、私もそれを眞に受けて、お師匠さんの方さへうまく胡麻化せばいゝつて氣になつて、つひあんな嘘を申して濟みません……。』と、詫る。

お歌はそれを聞き咎めて、

『あら、姐さん、まだ姐さんはそんなことを云ふんですの。私がいつ自分で淺蟲へ行くなんて云ひまして？　隨分ですわねえ。』と、いきり立つていふ。

京枝は涙ぐんだ眼でじろりとお歌の方をみて、

『お歌さん、お前さんは醉つてたから、何も彼も忘れちまつたどらうが、淺蟲へ行くつて云ひ出したのはお前さんなんだよ。私や何も此場になつて嘘や、こしらへごとは云やあしませんよ。も

しをれでもお前さんが嘘だつて云ひ張るんなら、お師匠さんへ證りの立つやうに、あの村田さんをこゝへ呼んで來て貰ふわ。あの人が何も彼もちやんと知つてゐるんだから。』と、いふ。さういふ腹には充分敵意を藏してゐた。

お歌はさう云はれると、昨夜の場景を、醉ひの爲めに朧げにしか覺えてゐないのが口惜しくて耐らなかつた。漸次考へてみると、何うやら淺蟲へいくと云ひ出したのは、たしかに自分であつたやうな氣がして來る。何の彼の云つてゐるうちに、何ういふ考へでか、ふつと何處か遠くへ行き度くなつた。その心持は今でもそれとなく思ひ出されるのであつた。してみるとお歌は、自分にも充分退けめがあるので、もう強いことが云へなくなつてくるのであつた。それと同時に、今戸さんの鞄の中から盜み出して來た金のことが又胸を責めて來て、その金の入れてある內懷が妙にむづ痒ゆいやうな、ちく〳〵痛むやうな心持ちがしてくる。そのうへ宿醉の胸苦しさがむツと喉のところまで突懸けて來てお歌はもう手近かにあるものを片端から摑み壞したいやうな焦々した氣になつて來た。

十三の七

お歌はもうさうなると、見境がなくなつて、

『姐さん、村田さんを呼んで昨夜の證りが立つんなら、いつでもお呼びなすつたらいゝでせう。何を云つたつて、姐さんと村田さんとは共謀になつてゐるんだから、お師匠さん、そのおつもりでお聞きなさらなけりや駄目ですよ。ねえお師匠さん。お師匠さんはその場に被居らなくたつて、大概お分りになりますわねえ。平常から姐さんと來たら、嘘を吐くことにかけちや、そりや名人なんですもの。ほゝゝゝゝ。』と、正面から浴びせかけるやうに嘲笑ふ。

京枝もさすがに腹が立つたか、眼角をたてゝ、

『お歌さん、酷いことをいふのもいゝ加減におしよ。私が默つてゐると思つて、あんまり附上つた口をきくと承知しないよ。お師匠さんの前だから、私や虫を殺して、お前さんのいゝやうにな つてやつてゐるんぢやないか。愚圖々々云ふと、昨夜のことをすつかりこゝで打撒けちやふよ。』

と、威嚇すやうにいふ。

お歌も負けてゐずに、

『いゝえ、姐さん、いくらそんな威嚇しを云つたつて、私やもうびくともしやしませんよ。誰れがあんな今戸さんなんかと遠出をするなんて云ふ奴があるもんですか。姐さんの日にや大した大

旦那にみえるかも知れませんが、私にやあんな厭らしい爺いはないんですよ。物の理窟も知らない癖に、いやに通がつて、氣障つちやありやしないわ。私やあんな脂ぎつたのは憚んながら大嫌ひなんですよ。あんな人と一緒に遠出をする位なら、いつそ車力とでも駈落をした方がまだ増しだわ。』

京枝はもう腹に据ゑ兼ねて、

『よし、お前さんがそんなことを云ふんなら、こゝへ村田さんに來て貰つて、昨夜の一件をあの人の口からお師匠さんに話して貰つて對決をしようぢやないか。お前さんだつてあの時分にやいくらか性根もあつたんだから、まさかまる〳〵忘れちまつたなんて卑怯なことも云ふまい。ねえ、お歌さん。もし私が口説き度いんなら、土俵をおつくんなさい、土俵際で仕切りやどうのかうのと、お角力の文句を綾に使つて、大層鮮かに持ちかけたなあ、ありや誰れだつけかねえ。淺蜊なら私、文句なしにいくわ。連れてつて頂戴なんてツて今戸さんの腕へつかまつたなあ、お歌さん、ありや誰れだつたツけねえ。ほゝゝゝゝ。ねえ、お歌さん、いくらお前さんがお師匠さんを嵩に着て、私を遣り込めようたつて、さうはいかないよ。私にだつて骨があるんだから、そのつもりでゐてお呉れ。それに第一私の方にやちやんと證據人がゐるんだからねえ。』京枝はもう一生懸命

になつてゐた。

お歌は口惜しさうに唇を嚙んでゐたが、やがてヒステリックに泣き出して、

『何が證據人だい、何が證據人だい、私や、私や……』と、云ひながら、そのまゝ物凄いほど蒼ざめた顏色になつて、袂で顏を掩つてしまつた。

十三の八

師匠もさうなると默つてみてゐる譯にもいかなくなつて、

『おい、お歌、もういゝ加減におしよ。もう何も彼も私にや讀めてゐるんだから、そんな泣き聲を立てゝ怒鳴り合はなくつたつていゝよ。もう皆も起きて來る頃だから、見ツともないぢやないか。』と、たしなめる。

お歌はそれでも口惜しさが胸一杯に込み上げて來るやうに、

『だつて、お師匠さん、私、姐さんにあんなことを云はれて口惜しいんですもの。私、云ひもしないことをいゝ加減にこしらへあげて、ほんとに憎らしいッちやない。私、……』と、云ひかけるのを、京枝は蛇のやうな眼でぢろりとみて、

『お歌さん、口惜しいのはお互様だよ。いくら私が馬鹿だつて、お前さんが云ひもしないことを、お師匠さんの前でかうやつて饒舌れるもんかね。そりやお師匠さんは長年お前さんを手鹽にかけて育てゝ被居るんだから、ひゐき目でみて被居るか知れないが、それにしたつて、かうやつて一座を背負つて立つて被居るんだもの。他の者の手前だつて、さう片手落ちな眞似もなさるまいと思ふんだ。ねえ、お歌さん、お前さんも、だからもう甲をぬいで、二人してお師匠さんにお詫をすりやそれで事がすむぢやないか。お前さんがそれでも喰つてかゝつて來るんなら、私だつて默つちやゐられないから、村田さんでも誰でも呼んで來て、對決さして貰はふぢやないの。』と、いふ。

師匠はそれを押へて、

『ねえ、京枝さん、お前さんももうお默りよ。兎に角私にや何方が何方とも云へないが、何にしろ事の起りはお前さんなんだからねえ。お前さんが今戸さんさへ擔ぎ廻らなけりや、お歌だつて何もお酒を呷りもしまいし、それに昨夜のやうなことも持ち上つて來る譯がないんだよ。だから成敗をすることになりやお前さんの方が惡いんだから、もう何も云はない方がお前さんの爲めだよ。そのかはりもう今日限りどうか、このお歌の身體には手をつけないやうにしてお呉れ。お歌は旦那なんかなくたつて、結構やつていけるんだから御親切は有難いが、どうか放ツといて貰ひ度いのさ。さうなりやお前さんもかすりが取れなくなつて、懷合ひにもさはるだらうが、もしそれで困るやうなら、お小遣ひ位は私の方からどうでもすらあね。かう云つちや何んだか、つまりお前さんは慾が深いから、こんなことになるんだよ。慾を出しだしたら全くお前さんのやうな人は限がないからね。ほゝゝゝゝ。』と、師匠は皮肉に笑つた。

京枝もてれてにやり〳〵笑つてゐた。

お歌はもう師匠の言葉も耳に入らないやうに、

『お師匠さん、私、私もうとても姐さんとは一座してゐられませんから、どうか東京へ歸して下さいまし。お願ひだから東京へ、……』と、子供のやうに駄々をこねだした。

十三の九

お歌がさう云ひかけてゐる時に、ふつと聞くと、階段の方で誰れかの足音が、身輕にとん〳〵とんと上つて來た。ひよつとしたら、村田が起きて來たのではあるまいかと思つて、お歌はひやひやしてゐると、やがてとツつきの障子がからりと開けて、そこから顏を出したのは、宿の女中

であつた。

女中はそこへ立つたまゝ、

『あの、此方に京枝さんちう人が被居るだかね？』と、いふ。

京枝はそれを聞きつけると、後を振向いて、

『京枝つてのは、私だが、何か用なの？』と、いふ。

と、女中は京枝の方をみて、

『はあ、貴女ですか。あの今ね、淺蟲の東京庵から電話がかゝつて來てね、貴女に一寸電話口まで出て呉れと云つてゐなさるんですが、……』

京枝はそれを聞くと、吃驚したやうに、

『あら、私に電話？　まあ、……』と、云つたッきり、一寸お歌と師匠の方へ流眸を呉れて、彼女はそのまゝ慌てゝ立上りながら、『姐さん、電話は階下にあるの？　一寸案内して頂戴よ。』と、いつて、そゝくさ廊下へ飛び出してゆく。

女中もそのあとから隨いていつた。

師匠はそれを見送つて、

『ねえ、お歌、淺蟲からつて云やあ、あの今戸さんからの電話なんだらう。昨夜お前に寢こかしを食はされたんで、きつとその尻が京枝さんのところへ來たんだらうよ。かうなると、遣手婆さんも中々辛いもんだね。ほゝゝゝゝ。』と、嘲るやうに笑つて、『ねえ、お歌、もう何も彼も分つたんだから、お前もどうか四の五の云はないでお呉れよ。あゝやつて一本參つて置きや、いくら京枝さんだつて、この先煩く絡りもしまいし、それにこゝでお前に妙な意地を張られると、私が仲へ立つて困つてしまふからねえ。お前がたつて、京枝さんと一座をしないつて云ひ張り出したら、もうこの一座はそれつきりになつてしまふんだからねえ。今戸さんだつて昨夜で懲りて、今度はおとなしく東京へ歸るだらうから、これで厄拂ひさ。それに今日汽船で彼方地へ渡つてしまやあ、もうそれで何にもなしさ。だからお歌、お前ももう機嫌を直して、今夜函館で出す詰物のことでも考へてお呉れよ。』と、師匠らしいしんみりした情をみせながらいふ。

その時、お歌はどうしたのか、もう顏色も鉛のやうに蒼ざめて、膝のうへに置いた片手の指は中風病みのやうにぶる〳〵細かく慄へてゐる。彼女は師匠に顏を見られると、眼の置きどころがなくなつたやうに、おど〳〵した風をみせて、もう口さへきけないのであつた。

師匠はあんまり變なので、

『お歌、お前、どうしたのさ。』と、訊いたが、それと一緒にお歌は、我慢が出來なくなつたやうに、ついと立ち上つて、

『あの、私、一寸、……』と、云ひ捨てゝ、まるで逃げるやうに廊下の方へ出ていつてしまつた。

十三の十

お歌は、淺蟲から電話と聞いては、もうとてもじッとしてゐられないのであつた。今戸さんが態々彼地からこんな朝早くに電話をかけて來るやうでは、何か容易ならぬ事件であるに相違ない。ひよッとしたら、金を盜んだことが分つて、今戸さんはそれを京枝に訴へる爲めに電話をかけて寄越したのかも知れない。

あゝした今戸さんのことであるから、今朝になつて醉が醒めてみると、昨夜自分が逃げてしまつたことで猶更腹を立てゝ、どんな云ひ懸りをつけようも知れぬ。それにもし金の失つたことに感づきでもしたら、それこそとんだ大騒ぎが起るに極まつてゐる。今はどうやら、師匠の勢を頼んで、京枝を云ひ籠めてやつたが、もしあの金の一件が京枝の耳へ入つたら、彼女のことであるから、鬼の首でも取つた氣になつて、師匠の前で反對に自分をどんな目に遭はせようも知れない

のである。

お歌はそれを思ふと、もう魂が身に添はないやうな氣がして來た。いつもなら、度胸を据ゑて、何んとか云ひぬける道も考へようし又、云ひぬける位なことは必ず出來るのに、その朝はお歌は何うしたものか、まるで元氣がなくて、おど〳〵してばかりゐた。醉醒めの苦しさが、神經を萎微させてゐた、一寸したことにも心が戰いてならなかつた。

お歌は一旦は廊下へ出たものゝ、師匠の思惑もあるので、やがて便所へでもいくやうな風をして、そつと裏階段の方から階下へ降りていつた。そして、電話室の傍へいつてそれとなく樣子を窺つてゐたが、時々京枝の聲が切れぎれに洩れ聞えて來るばかりで、さつぱり樣子が分らないので、却つて、お歌は氣が氣ではなくなつて、やがてもうゐても立つても耐らないやうな心持ちで、彼女はそのまゝこツそり帳場の裏から玄關の出口へ出ていつた。

と、そこには番頭がゐて、愛想笑ひをしながら、

『お早う御座い。』と、云つたが、お歌はそれにも返事をしずに、上框のところへ並べてある下駄を突懸けて、ぷいと戸外へ飛び出してしまつた。戸外へ出て、人のゐない處をほうつき歩きながら、お歌はどうかして自分に傷のつかないやうな手段を考へ合はせようと思つたのであつた。

まだ朝が早いので、寂しい町には人通りもなかつた。時偶在方から來るらしい小學校の生徒が前屈みになつて、急ぎ足にやつて來たが、その後影にももう秋らしい色が流れてゐた。

お歌は少し落着いて來たので、いろ〳〵なことが先々と心に考へられて來た。たとへ今戸さんが金のことをいざこざ云つた時に、貰つたといへばそれまでゞある。それにあんなに醉つてゐたのであるから、金高なぞはどうだつて云ひ黒められるのである。さう考へてくると、お歌は何恐いことがあるものかといふ氣にもなつて來たが、それと同時に、彼女はどうしたのか、俄に又懷しい相川さんのことが、耐へ難い惱ましさをもつて思ひ出されて來るのであつた。

十四の一

お歌は見も知らぬ町から町を足に任せて、ぶらり〳〵歩いていつたが、その中に何處を何う通つたのか、昨夜今戸さんや、京枝達と一緒に飲んだあの西洋料理屋の前へひよツくり出て來た。そこまで來ると、お歌は宿醉に苦しさが益〻激しくなつて來て、ともするとぐら〳〵ツと眩暈がしてくる。彼女はもう迎ひ酒の熱いのをぐうツと引ツ懸けなければとてもゐられなくなつて來たので、まるで後先の辨へもなく、いきなりその店へ飛び込んでしまつた。

店は朝一番の旅客に食事を出すので、もうちやんと卓子の支度が出來てゐた。お歌が入つていくと、昨夜のボーイは顏を覺えてゐて。

『被來いまし。』と、笑ひながら云つて、窓の傍の椅子を彼女に與へながら、『あの、何か召食りものを？』と訊く。

お歌は笑ひながら傳法な口調で、

『食物は澤山よ。私、熱いのが一杯飲み度いから、なるべくいゝお酒をつけて下さいな。』と、いふ。

ボーイは心得て、店の奥の板場へ入つていつた。

酒が來ると、お歌はもう人の見る目も構はずに、大きな洋盃へ壜詰の酒をごぼ〳〵とあけて、湯氣の立つやうな熱いやつをぐツとひと息に呷つた。もう口へ入るからその酒が五體に廻つていくのが分つて、今迄の厭な氣持ちはみる〳〵うちに拭いて取つたやうに消えていつてしまふ。

二合の酒をあけて、もう一本お代りをとつて、それを半分ほど飲むと、お歌はすつかり生き返つたやうな心持ちになつて來た。今迄胸に鬱してゐた今戸さんのことも、京枝のことも、それから師匠のことまでが薄紙をはぐやうに忘れられていつて、それこそ矢でも鐵砲でも持つて來いといふやうな元氣になつて來た。盗んだ金のことも、淺蟲からの電話のことも、もう遠い昔の出來事のやうになつて、唯相川さんのことばかりが無上に思はれて來る。今頃あの人は何をしてゐるだらう。たつた一眼でもいゝから逢ひ度い。それにしてもお園との間はどうなつてゐるであらう。あゝやつて上野の停車場まで自分を見送りに來て呉れるやうな實がある以上は、決してあの相川さんは自分を見殺しにするやうなことはあるまい。もうさうなると、お歌は商賣のことも、旅のことも何うでもいゝといふやうな一途な氣になつて、眼の前には唯相川さんの懐かしい面影ばかり描き出してゐた。

お歌は折柄出て來たボーイに、

『ねえ、ボーイさん。東京行きの汽車は何時に出るの？』と、訊いた。

と、ボーイは此方へ寄つて來て、

『さうですね。急行だと午後にならなけりや出ませんが、普通の直行なら八時三十六分ていふのがありますよ。』

『まあ、八時三十六分に？　それぢやもう二十分ばかりしきやないのねえ。』と、云つて、お歌は考へながら、『それは東京へ何時に着くの？』

『さあ、それで被往ると、明日の朝の七時一寸過ぎに東京へ着きます。』

お歌はじいツと眼を据ゑて、考へ込んでしまつた。彼女の顏には何かむら氣を起してゐるやうな、思ひ切つた表情が現はれてゐた。

十四の二

ふつと聞くと、直ぐ眞向ふの停車場の方では、驛夫が何やら大聲で喚いてゐるのが聞える。よく耳をとめてきくと、それは東京行きの列車が出ることを驛内にふれ廻つてゐる聲であつた。

『東京』といふ言葉がお歌の耳朶を打つと、醉つた彼女はもうゐても立つても耐らなくなつて來た。宿醉の殘つたうへに、又醉ひを買つた彼女は、もう理性も何もなくなつてゐて、やがて何か強い力に引摺られるやうに椅子から立上つた。そして、ボーイを呼んで、勘定をして貰ふと、一圓某かの勘定を氣前よく自分の紙入の方から出した五圓紙幣を一枚ぽいと放り出して、

『お釣は要らないのよ。』と、云ひながら、それなりその西洋料理を出てしまつた。

お歌は戸外へ出てみると、何んだか足がふらつくほど醉つてゐるのを自分でもよく知つてゐた。彼女は四邊の樣子を見廻しながら大急ぎで停車場へ入つていつて、もう何を考へる餘裕もなく東京迄の二等の切符を買つてしまつた。そして改札口を出て、すぐ向ふのプラットフォームへ長々と着いてゐる列車へ乘り込んでしまつた。

お歌の乘つた車室には、朝が早い故か、たつた一組の夫婦ものらしい乘客しか乘つてゐなかつた。それは北海道から內地へ轉任でもしていくらしい官吏風の男で、細君らしい地味な着物を着た女は、醉つたお歌の樣子をぢろ〳〵みてゐた。

お歌はそんなことは氣にも留めずに、いきなり座席の隅のところへいつて、崩れるやうに腰を下した。呼吸がせか〳〵して耐らないので、彼女は胸を開いて、じいッと眼を瞑つてゐたが、さうしてゐる間にも、いろんな空想めかしい考へは入り替り、立替り彼女の頭腦に湧いてくる。彼女は一座のことも無論氣になつたが、併しもうそんなことは考へまいと思つて、自分から打消すやうに力めてゐた。

間もなくその列車は長い汽笛の聲と一緒に青森の驛を離れた。

お歌は何うでもいゝやうな氣ではゐても、列車が町を出外れるとさすがにほッと安心して、今度は少しづゝ身のまはりを取繕ひ出した。その時になつて、又內懷に入つてゐる紙幣束のことを思ひ出して、何かしら氣になつて耐らないので、彼女はやがてそつと人にみられないやうに後を向いて、それを膝のうへゝ取出し、一枚々々勘定してみた。今切符を買つたので、小錢ちまじつてゐたが、すつかりで三百七十圓ほどあつた。さうしてみると、お歌は昨夜今戸さんの鞄から四百圓ほどの紙幣をぬき取つたことになるのであつた。それと知るとお歌もさすがに少し手酷し過ぎたと思つたが、併しもう何うでもなれといふやうな氣で、

『いゝとも、これを皆遣つちやつたつて、今戸さんにや文句は云へないんだから。』と、氣安めのやうに口の中で呟いた。そして自分の紙入を出して、それへ紙幣を無理に押込んで又帶の間へ突込んでしまつた。

十四の三

列車が浦町の驛へ着くと、お歌は昨夜のことをまざ〳〵と思ひ出した。昨夜醉つたまぎれに、ふら〳〵と歩いた街道も、小山の陰にみえてゐる。電信柱は桑畑の間に見え隱れにつゞいて、自動車のパンクしたのは彼處いらではないかと思ふと、お歌は何となく苦笑を禁ずることが出來なかつた。

列車はやがて又そこを發車して、高い草土手のうへを、明るい朝の光に照らされながら東へ東へと駛つていつた。

それから二十分ばかりの後に列車は淺蟲の驛へついた。車窓からはさッと海の風が吹き入つて、朝霧にこめられた青森灣の風光は眼がさめるやうであつた。

お歌はもう今戸さんのことなんかどうでもい〻といふやうな氣持ちになつてゐた。あの男のことだから、また朝から酒を初めて、今頃は宿の女中か何かに揶揄つてゐる時分かも知れない。京枝と電話で何を話さうが、もうかうして汽車に乘つてしまつた以上は、何うにも出來ないのである。お歌はさう多寡をくゝつて、車窓から海沿に建ちつゞいた旅館の方を眺めてゐた。海はきら

きら美しく光つて、濃い紫色の波は島蔭を洗ふやうに崩れてゐた。

列車は三分間の停車時間が過ぎても、なか〳〵動かうとしない。お歌はどうしたのかと思つて、そッと向側のプラットホームの方を覗いてみたが、どこも別に變つた樣子もなかつた。

海岸に建ちつゞいた旅館では、朝の掃除に忙しいとみえて、彼方でも此方でも客用の夜具を乾したり、姐さん被りをした女中達がばた〳〵拂きをかけたりしてゐるのが手にとるやうにみえる。今戸さんの泊つてゐるのは確か東京庵とか云つたと思ふと、其宿屋の看板がすぐ驛の眞向ふに出てゐるのがふッとお歌の眼にとまつた。今戸さんは今あすこで馬鹿な顏をして、浴衣懸けか何かでこの海をみながら酒をやつてゐるのかと思ふと、お歌は何だか胸がすッとするほどい〻氣味で耐らなかつた。それに昨夜のことを思ひ合せると、もしあの時自動車がパンクをしなかつたら、自分も今朝はあの二階で眼を覺して、何んな心持で海を眺めなければならなかつたらう。それを思ふと、お歌は身内がぞッとするほど不愉快な心持ちになつて來た。

そんなことを考へてゐる間に、驛の外では轟々と鐵輪のどよみが聞えて、反對の方のプラットフォームには下り列車が入つて來た。それが停車すると間もなく、お歌の乘つた列車は出代りに發車したが、その時、ふッとみると、下り列車の二等室には今一人の男が扉を開けて乘らうとし

てゐる。

『あッ今戸さん！』お歌はさう思つてはッとしたが、その男は何も氣づかないやうに、旅館の番頭らしい男に見送られながらその車室の座席へどかりと坐つたが、もうその時には、お歌の乘つた列車はその車室の前を離れて、漸次と速力を増しながら驛の外へ出ていつてしまつた。

脊廣を着たでつぷり肥つたその男は、何う考へても今戸さんに相違なかつた。

十四の四

それから少時の間、お歌は今戸さんのことばかり考へてゐた。彼が下り列車に乘つた以上は、きつとこれから又京枝達のゐる青森へ歸つていくのに相違ない。それにしても今戸さんは、京枝と電話で何を打合はせたであらうか。今朝起きるとすぐに、あの鞄をあけて、昨日もやつてゐたやうに、彼は紙幣束を一つ一つ勘定してみて、自分の盜つたゞけの金がなくなつてゐるのを知つたら、彼の頭腦には先づどういふ考へが浮ぶであらうか。無論彼とて、昨夜はあんなに醉つてゐたのであるから、自分のしたことも、それからお歌のしたことも一々覺えてゐる譯がない。さうとすると、その金はどうしたと思ふであらう。ちやんと束にして紙の片で締めがかけてあつたの

であるから、まさか落としたとは思ふまい。さうとしたら、醉つたまぎれに自分に吳れたと思ふであらうか。さう思つて吳れゝばしめたものである。

もしさうでないとしたら、やつぱり盜られたものと思ふであらうか。盜られたと知つたら、あいふ人間のことであるから、寢轉かしを食はせられた憎怒に結び付けて、自分に對して何ういふ仕返しをしようとするであらう。先づ京枝に昨夜の始末をすつかり打明ける。と、京枝は今朝の云爭ひの一幕があるのであるから、きつと一緒になつて腹を立てゝ、彼女自身の面目を立てるためにもきつと事を荒立て、自分のことを盜人呼ばはりもするであらう。さうなると師匠のところへ尻がいくに極つてゐる。師匠はそれを何う裁くであらうか。

お歌はそこまで考へてくると、ひや〳〵したが、併しもう不貞腐れになつてゐるので、

『どうなるもんか。肝腎の私がかうやつて逃げて來てしまつたんだもの。』と、心の中で叫んだ。

それにしてもあの今戸さんはきつと自分が青森にゐると思つて、勢ひ込んで彼地へ歸つていつたに相違ない。師匠も京枝も、まさか自分が今頃汽車に乘つて、東京の方へ向つてゐるようなぞとは思ひもしまいから、宿屋ではさぞ皆が面喰つてゐるだらう。當の相手の自分がゐなければ、それこそ暖簾に腕押しで、今戸さんも京枝も喧嘩の持つて行きどころがなくて、却つて力ぬけがし

てゐることであらう。そんなことを考へると、お歌は、また、

『態アみろ。』と、いふやうな心持ちになつてくるのであつた。

列車が尻内へ着く頃には、もうお歌も思ひ疲れてうと〳〵と眠氣を催して來た。車窓から射してくる日の色をみてゐると、もう今頃青森では、師匠達が北海道へ渡る連絡船へ乘る時間だなと思つたが、さうなるとお歌はさすがに何とも云へない心持ちがして來た。師匠に對してはほんとに申譯もないことをしてしまつたと思ふと、彼女は神經が鈍くなつてゐるので、すぐに涙に喩に溢れて來た。彼女は泣きながらいつかしら昨夜の疲れが出て、車窓に頭を押當てたまゝぐつすりと深い眠りに落ちてしまつた。

十四の五

その日の夕暮には、列車はもう仙臺の近くまで來てゐた。お歌はうと〳〵と寢たり起きたりしながら、やつとそこまではやつて來たが、さすがに疲れが出て、張り切つてゐた心持ちもいつしか賴りない心細さのなかに沈んでゆくのであつた。

その日の黃昏は何んとも云ひやうがないほど寂しかつた。車窓から眺めゐると、紫色にくつきりと西空を劃つた山脈のうへには、眞紅に燒け爛れた横雲がひと筋長くたなびいて、大きな盆のやうな夕陽は徐かにその底へ落ちてゆく。野山にはうすい夕靄がほうと漂つて、もうそろ〳〵その中には村里の灯がちらり〳〵と瞬いてくる。とある街道には村から村へ通ふ乘合ひ馬車が、疲れた馬の影をながく曳きながらとぼ〳〵と歸つていつたりした。

お歌はその佗しい光景を眺めてゐるうちに、いつぞや旅で逢つた御難のことを思ひ出した。町から町へ乘込んでゆく時に、俥のうへから眺めた景色は丁度これによく似てゐた。送られてゆく先々で不入りがつゞいてもう一座は精も根もつきはてゝゐた。乘つてゆく俥代も、都合よく先の興行師が拂つてくれゝば、それで助かるが、もしさもない時には、一座のものは又何かを典に置いてゞも僅かな金を借りなければならない。その金は次から次と自分達の身を縛る金になつていくのであつた。

茨城縣下へ來懸つた頃にはもう師匠をはじめ一座のものは、疲れ切つてゐた。その時、お歌は島田のことで夢中になつてゐたので、辛さの餘り、今迄の師匠の恩義を忘れて到頭脫走する腹を極めた。手紙を出した男が迎ひに來て呉れたのを幸ひに、お歌はそのまゝこツそり男と一緒に遁げてしまつたのであつた。丁度その時には小さな松田といふ町の芝居小屋で興行してゐたので、

閉場てから裏木戸の材木の影に待つてゐて呉れた島田と一緒に田甫道へかゝつた時には、我れながら胸が一杯になつて、何うしやうかと思つた。樂屋の窓に點つた薄暗い灯影を眺めると、長年子飼ひから親も及ばぬほど世話になつた師匠を捨てゝ、自分ばかりが明るい東京の方へ歸つていくのが濟まなくて、幾度か足が出澁つたのであつた。それをやつと男に勵まされたり、叱られたりして、死ぬ思ひですべてを思ひ切り、二里の夜道をして漸う停車場まで辿りついたのであつた。その時、暗い畑道でお歌は幾度か男の胸に抱かれて、泣きながら甘へたことは今でもまだ昨日のやうに思ひ起されたのであつた。しかしながらも、今頃はもう師匠もあの物置のやうな小屋の二階で、空腹を抱へながら腐つたやうな夜着にくるまつて寢てゐるのかと思ふと、お歌は自分のしたことが人非人のやうに思はれて、どう考へ直しても濟まなくて耐らなかつた。

その辛い思ひを、お歌は今日又再び味はなければならなかつた。お歌は此の前の時であれほど懲りてゐながらも、つまらないことから自分でも考へなしに又師匠を捨てなければならなかつたのであつた。

十四の六

あゝ、師匠に對しては、全く濟まないことをしたと思ひ出すと、お歌はもう氣が狂ひさうに、自分のしたことが後悔されて來た。今戸さんのことは兎も角として、自分があの一座からぬけては、北海道へ渡つてからの興行もきつと思はしく行かないであらう。それを思ふと、腹を立てゝゐる師匠の顏が眼に見えるやうで、もう今度で二度目の失策ではあるし、この後は到底師匠に合はす顏もないのかと思ふと、お歌は身を切られるやうな切なさを覺えて來た。

先から先と考へつめていくと、お歌はもう手も足も出ないやうな苦悶の中へ追ひこくられて行かずにはゐられなかつた。じいッと車窓から外の景色を眺めてゐると、いつそ死んでしまひ度いと思ふほど胸が込み上げてきて、とても我慢がしてゐられなかつた。で、彼女はとある驛で、正宗の壜詰めを二本買つて、人の見る眼もかまはずに、ごくりごくり喇叭飲みをやりながら、どうかして總てを忘れてしまふやうに、また醉ひを買はふとした。

日はもう全く沈んで、暗い夜が野も山も、村里、唯ひと色の寂しさで掩ひかくしてしまつた。空には雲が出て來たせいか、星の影もみえなくなつて、時々田の蟲をとる大焚火が飛ぶやうに車窓を掠めていつたりした。

お歌はその時にはすつかり自棄な氣になつて、もう何うなつてもいゝといふやうな心持ちにな

つてゐた。どうせ自分がかうなるのも皆運命である。何か自分には恐ろしい憑物がしてゐて、途端場になると、いつもかういふ風に自分を惡い方へ、惡い方へと追ひ落としてゆくのである。なまじそれに楯ついてみたところで、どうせ自分は勝つことは出來ないのである。もうかうなつたら、何も彼も思ひ捨てゝ、唯男に身を任せて生きていくより他はない。それにはあの相川さんが誰よりも頼もしい人で自分の將來を救つて呉れるのは、あの人より他にはないのである。あゝ早く逢ひ度い。逢つて自分の心の丈けを打明け、師匠も忘れ、世の中も忘れて、甘えられるだけ甘え度い。さう思ふと一緒に、お歌は體中の血が胸一杯に逆流して來て、ちく〳〵と針で刺されるやうな焦悶かしさを覺えずにはゐられなかつた。

二本の酒があく頃には、もうお歌もぐつたりと醉疲れて、又車窓に倚りかゝつたまゝ、いつかしら前後不覺に寢入つてしまつてゐた。

列車はお歌の夢を載せて、闇から闇を衝いてひた駛りに駛つていつたが、短い夏の夜が白々と明け初める頃には、もう宇都宮まで來てゐた。

その朝八時十五分に、列車は漸う上野の驛へ着いたのであつた。お歌は懐しい東京の町々をみるともう嬉しくて、昨夜からの厭な思ひを一度に忘れてしまつたやうな氣になつてゐた。列車を

下りて、そのまゝ驛の出口を出ると、お歌はすぐさまタクシーの溜りへいつて、一臺雇つた。そして朝明けの町を相川の家へ向けて一散に駛らせたのであつた。

十四の七

お歌は人形町までくると、何だか知つた人に顔をみられさうな氣がして、態と、車窓の蔭へ隠れるやうにしてゐた。朝日は斜に町並を照らして、もうそこいらは電車のどよみや人の往來が賑はしい動搖をつくつてゐた。

南茅場町まで來ると、もう場が初まるので、何處の横丁にも小僧や番頭が忙はしげに出たり入つたりしてゐた。お歌は相川の家の横丁のところでタクシーを止めさせて、賃金を拂つてそれを歸すと、躍る胸を抑へながらおづ〳〵横丁の中へ入つていつた。

相川の家の前では丁度その時、若い方の女中が格子を拭いてゐた。お歌はその姿をみると、妙に氣臆れがしてならなかつたが、併しやつと元氣を奮ひ起して、つか〳〵そつちへ寄つていきながら、『お早う御座います。』と聲をかけてみた。

と、女中は吃驚したやうに此方を振顧つて慌てゝ姐さん冠りをとりながら、

『あら、まあ、姐さん、被來やいまし。』と、云つて、挨拶をする。

お歌はにこやかに笑ひながら、

『どうも、大變に早くお邪魔をいたしまして相濟みません。あの、旦那はまだお宅におるでせうか？』と、訊く。

女中は頭を下げて、

『え、まだおるでゞ御座んすの。一寸どうかお待ちなすつて。』と、云つて、そのまゝ雜巾をバケツの中へ放り込んで、彼女は上り框の方へ上つていつた。

お歌はさうやつて待つてゐる間も、そは〳〵して自分でも可笑しい程胸が騷いでならなかつた。こゝへひよつこり相川が顏を出したら、何んと云つて、挨拶をしようと思ふと、彼女は譯もなく頰へ血が上つて來るのを覺えた。

やがて少時すると、又女中は出て來て、笑ひながら、

『さあ、姐さん、どうかお上んなすつて下さいましな。旦那は昨夜少し御酒が過ぎたもんですから、今朝はまだお寢つて被居るんですの。ほゝゝゝ。』と、云つて、お歌を上へあげながら、『でも今お起になりましたから、どうかまあ、お二階で一服やつて被居つて下さいましな。』と云つて、

お歌を二階座敷へ案内してゆく。

二階の八疊はもうすつかり掃除が出來てゐた。東京へ歸つてみると、まだ暑氣が強くて、朝から蒸し暑い風がそよ〳〵といきれのやうに動いてゐた。お歌はすゝめられるまゝに、緣側へ座布團を出して、それへ坐りながら、相川の上つてくるのを待つてゐた。

女中が香の高い番茶をもつて上つて來ると、間もなく階下では、相川が口を嗽いでゐる音が聞えて來た。その聲を聞いたゞけでも、お歌はもう懷しくて耐らなかつた。

河岸の方からは荷役をしてゐる人足達の唄がかすかに聞えてきた。

十四の八

やがて少時すると、階段のところで、

『おい、たつ。二階へ熱い茶を持つて來て呉れ。』と、云ふ相川の聲が聞えて、彼は粹な浴衣の胸をつくろひながら、階段口へ上つて來た。彼はお歌の顏をみると、もう押へ切れないやうに笑つて、

『やあ、お歌さん。一體どうしたといふんです。何だか、私や狐に憑まれてゐるやうな氣がする

よ。』と、云ひながら座敷へ入つて來て障子の側へ坐る。

お歌は唯もう胸ばかりが騷いで、

『相川さん。ほんとに突然にお伺ひして申譯も御座いません。』と云つて、强て笑ひながら、『貴方、お驚きになりましたらう。北海道へ行つた筈の私が、今朝此方へ寢込みに踏んごんで來るなんて、實に不思議ですものねえ。ほゝゝゝ。』

『いや、私や今女中から貴女が來たと聞いて、初めのうちはどうしてもほんとうとは思へなかつたんですよ。ほんとに何うしたんですか。軀でも惡くつて、貴女一人で歸つて來たんですか？』と、彼も何處かに包み切れない嬉しさをみせながらいふ。

お歌はさう云はれると、言葉に塞つてしまつたが、やがて、

『いゝえ、そんなことぢやないんですの。相川さん、私、實は青森で飛んだ目に逢つちまひましてねえ。それで癪に觸つて耐らないもんですから、昨日思ひ切つて、あの一座を脫走して來ましたんですの。』

相川は眼を丸くして、

『えッ、脫走して來た？』と、云つて、じいッとお歌の顏をみながら、『そりや隨分思ひ切つた眞

似をしたもんぢやないか。一體何うしてそんなことになつたんです？』と、熱心になつて訊く。

お歌はもう默つてゐられなくなつて、途々考へて來たやうに、青森での出來事を包まず隱さず、相川に打明けたのであつた。自分のしたことに有利な背景をこしらへる爲めに、彼女は今戸さんのことは、出來るだけ誇張して、いかにも惡樣に話した。そしてあの男があゝやつて何處までも附き纏つて來る以上は、到底一座と一緒に北海道へ渡るだけの度胸はないので、濟まないとは思つたが、師匠を賣つて、東京へ遁げ歸つて來たのだといふ風に筋を逐つて話を進めていつたのであつた。

相川は默つて聞いてゐたが、すつかり聞いてしまふと、一寸眼の色を動かして、

『それぢやあの今戸さんとかいふ人は、次第に依つちや北海道までも貴女のあとを追驅けていくつもりなんですね。』と、いふ。

お歌は嘲るやうに、

『え、あゝなるともう意地になつて、何處までも私を苦しめやうツて腹に相違ありませんからねえ。それにもう眼を据ゑちやつてゐるんですもの。うか〳〵してゐりや、どんな目に遭はされるか知れませんわ。』

『ふむ、それにしても、大した執念だねえ。お歌さんもい〻奴に見込まれたもんだねえ。は〻〻は。』と、相川は無理に笑つてみせた。

十四の九

相川さんはそのま〻煙草箱から敷島を一本とつて、それへ火を點けながら、

『ねえ、お歌さん、どうも私の考へぢやその、あんたが今戸さんの鞄からぬき取つた金といふのは、因縁がつきさうだねえ。假りに私が今戸さんの役をつとめてゐたとしても、寢轉かしは食はせられるわ。金を盗られるわ、揚句の果てが、後脚で砂と來ちや、どうしたつてかツかにならずにやゐられないからね。さうなりや勢ひ盗られた金に因縁をつけて、それで紛擾を起して、せめてもの腹癒せにあんたを苦しめようと、かうなるのがまあ落ちだねえ。それであんたその金は何うしちやつたんだね。まだ持つてるのかね。』

お歌はもう捨て身になつて、相川さんさへ味方でゐて呉れりや千人力だといふやうな氣になつてゐるので、不貞腐つた笑ひ方をして、

『え、お金は旅費だけ差引いて、あとはちやんと持つてゐますの。』と、云つて、帶のうへを押へてみせながら、『ねえ、貴方、でもいくら因縁をつけようつたつて、私の方で貰つたことにしてしまやあ、文句はないんですよ。今戸さんだつて私にお金を呉れるツていつたなあまさか忘れもしないでせうから。』

相川も笑つて、

『そりや忘れもしないが、併しあんたが今戸さんの自由になつてゐりや兎も角も、金だけ頂戴して逃げて來ちやつてゐるんだから、彼方ぢや彼方で、又何んとでも文句はつけられると思ふよ。』と、云つて、煙草の煙をふうツと朝日の射す中へ吐き出しながら、『まあ、それにしても、さう心配することはないさ。問題が煩くなつて來たら構はないからそれだけの金を返しちまやあい〻んだもの。此方ぢや飽く迄貰つたと云ひ張つて、いよ〳〵となりや散々彼方をけなしつけて、紙幣を叩きつけてやりやい〻んだもの。何方にしたつて、大したことになりつこはないさ。』

お歌は帶の間から財布を出してその中から餘つただけの紙幣を取出し、それを相川の前へ置きながら、

『ねえ、貴方、私これを持つてると、つひむら氣が起つていけませんから、失禮ですけれど、これだけ貴方にお預けして置きますわ。さうすりや何か面倒が起つても、又何うにだつてなるんで

すから。』と、いふ。

相川も笑ひながら合點いて、

『いや、お歌さん。全く私に預けて置きや大丈夫だよ。これだけのものを今遣つちやつては、あんたもあとで困るからねえ。』と、いつて、いかにも手馴れた銀行員のやうな手つきでその紙幣をばら〳〵と勘定してみながら、『ほう、まだ三百六十五圓あるぢやないか。假りに四百圓だけ盗つたものとしても、三十五圓しきや遣つちやゐないんだ。盗人にしちやまだ素人だね。はゝゝゝゝは。』

お歌は噪いだ笑聲を立てゝ、

『ほゝゝゝゝ。盗人はないでせう。それぢや餘り酷う御座んすわ。』と、云つて、滾れるやうな愛嬌を見せながら、相川の方へ流し眸を呉れた。

十四の十

相川は少時すると、自分で熱い茶を注いでふう〳〵吹いては飲みながら、

『ねえ、お歌さん。時に貴女はこれから何うする心算ですね。兎に角かうやつて、上野へつくとすぐその足で私の處へ訪ねて來て呉れたなあ、私や何よりも嬉しいんだ。何うだね、ひとつ欝さ晴らしに、今日は一日思ひッ切り遊ばうぢやないか。私や昨夜少しいさくさがあつてね、もう今日は朝ッから氣が變で仕様がないんだ。そこへあんたが思ひがけもなく顏を出して呉れたんで、全くお誂へ向きさ。はゝゝゝゝ。』と、いふ。

お歌も色ッぽい嬌態をして、

『貴方、私もどうせかうやつてお宅へ草鞋をぬぎに來たからにや、その覺悟があつてのことなんですわ。ねえ、貴方、それよりも私に熱いお酒を一杯頂けないでせうか。我儘を申して濟みませんけれど、でも遠慮をしないところを買つて下さいましな。ほゝゝゝゝ。』

相川は手を打つて、

『面白い。朝入りにお酒は緣喜がいゝねえ。旅ぢやどうも地酒のつんと來る奴で惱まされて來たんだらうから、新川の生一本といふ奴を御馳走しようぢやないか。私も昨夜はちッとやりすぎて今朝はどうしたつて迎酒の御厄介にならなけりや正氣がつかないよ。はゝゝゝゝ。』と、云つて、ふつと思ひ出したやうに、『お歌さん。それよりも貴女、もうお風呂が沸いてゐるから、ざつと浴びて、汽車の中の汚れを洗ひ落として來たら何うだね。その間に支度をさせて置くから。』といふ。

お歌は喜んで、

『まあ、もうお風呂が沸いてゐるんですの。さすがですわねえ。ぢや一杯頂戴いたしませうか。ほんとに有難いわねえ。』

やがてお歌は女中に案内されて階下の風呂場へいつて、ざつとひと風呂浴びた。汽車の煤烟を被つた襟脚や顔を柔かい手拭でごし〳〵洗ふ心持ちのよさは何ものにも譬へられなかつた。お歌はい〳〵加減の湯に漬りながら、旅先での出來事を思ひ出すと、もう何から何までが遠い昔のことのやうに思はれ、たゞ小娘のやうな嬉しさが先から先と胸を唆つてくるのであつた。

湯から上ると、男世帶のこととて、身じまひをする道具なぞは一つもないので、お歌は女中の白粉をかりてうつすりと化粧をした。そして改まつた氣持ちになつて二階座敷へ上つてくると、もうそこには酒の支度がちやんと出來てゐた。

相川も入替りにざつと行水をつかつて來て、二人は對向ひに坐りながら、酒をはじめた。お歌にはその朝の酒が生涯に初めて味はふほどうまかつた。辛い煮物を肴に一つ一つ盃を重ねていくうちに、醉ひは驚くほど早く廻つて、お歌は一時間も經たないうちに、すつかり〳〵氣持ちになつてしまつてゐた。

『ねえ、貴方。私、ほんとに今日のやうに嬉しいことは御座んせんわ。私、ほんとに貴方に逢ひ度かつたんですもの。』さういふお歌の身にも心にももうすつかり節制がなくなつてしまつてゐた。

十五の一

それからお午迄は、相川もお歌もゆつくり寛いで飲んだ。お歌はすつかり感傷的な、打融けた様子になつて、旅先での出來事をあれこれと事細かに相川に語つて聞かせたが、相川もさうした藝人の一座の旅興行にはひどく興味をもつてゐるので、面白さうに眼を据ゑて聞いてゐた。

相川はその話も盡きて來ると、やがてごろりと横に寢て、

『ねえ、お歌さん。今日は何處へ行かうなあ。芳町へは一寸鬼門の件があつて、顔が出せないから、どうだい、ひとつ中洲へでも泳ぎ出すか。あすこなら河つきで涼しいからね。』といひだす。

お歌も嬉しさうに、

『さうねえ。久振りで御馳走になつてもよう御坐んすわね。ほゝゝゝゝ。』と、笑つて、『でも、貴方、こんな日にはどうも町中ぢや氣がつまつていけませんわ。何處か、私、人氣離れたやうな處へいき度う御坐んすわ。』

『人氣離れたところ？』と、云つて、相川は心ありげにお歌の顔をみながら、『さあ、さういふ誂へなら、どうだい、ひとつ水神へでもお運びを願はふか。蚊は多いが、併しちよつと乙な寸法になれるぜ。はゝゝゝ。』

お歌も噪いで、

『乙な寸法結構ですわ。水神ならどんなことでも出來ますわねえ。私、お伴し度う御坐んすわ。』

相川さんは一寸考へて、

『さうだなあ。水神ならいゝかも知れない。實は正直なことを白狀すると、お園の一件があるんで、私や芳町界隈をうろ〳〵してゐる譯にやいかないのさ。ひよつとして知つた妓達にでも打衝かるといゝ面の皮だからね。』と、いふ。

さう云ひかけてゐるところへ階下から誰かゞ上つて來て、

『旦那。お邪魔をいたして相濟みませんが、一寸お顔を拜借する譯にはいきませんで御坐んせうか。』と、葭戸の陰から男の聲がする。

相川はふつと話を止めて、起上りながら、

『誰れだい？　政どんかい？』と、云つて、そつちへ顔を出しながら、『何んだな。何か用かね？』と、いふ。

政どんと呼ばれたのは店の方の番頭とみえ、上布のこざつぱりした風姿に献上の帶をきりゝと

しめた、中年の痩せた男であつた。政どんは頭を掻きながら、
『あの、旦那。新東の例の口が今場からの電話でドタと來ましてなあ。是非旦那にみて頂きませんと私共ぢや取計り兼ねますので……』と、少し慌て氣味にいふ。
相川も一寸眉根をひそめて、
『何に？　ドタだ。そいつあ面白くねえ氣味だな。何うしたといふんだらう。』と、云ひながら、
そのまゝ立つて絲端へ出ていつた。
二人はそこで何やら符牒まじりでごと〳〵話し合つてゐた。その樣子でみると、場では朝場から何か大きな變動でも起つたらしい氣配であつた。

十五の二

相川は少時するとまたもとの座へ歸つて來て、無理に浮々した調子で笑ひながら、
『ねえ、お歌さん。お聞きの通り今場で一寸一戰初まつたから、私、これから一時間ばかり顏を出して來るからね。あんたお氣の毒だが、一人で飲つてゐて呉れないか。昨夜夜どほしぢや體も草臥れてゐるだらうから、もし何んだつたら、そこへ臥床をとらして置くから、ちよいと横にでもなつてゐて下さい。なに、ほんの一時間かそこいら顏を出して來りや濟むんだからね。』と、いつて、有合ふ湯呑に銚子の酒をがツとあけて、それを息も吐かずにひと息に飲み干しながら、『かうなると力酒といふ形があるね。だが、酒をやつてゐても商賣のことだけは忘れないから不思議なもんだ。やつぱり下司は下司だけのことはあらあね。今日はひとつ賣つて、賣つて、賣りまくつて、中落ちのうめえとこをたんまり頂戴するかな。はゝゝゝゝゝ。それぢや一寸御免。』さう云つて、相川は又そゝくさ立つて、そのまゝ笑ひ聲だけを殘して階下へ下りていつてしまつた。
お歌はたつた一人になると、さすがに心寂しかつた。何うにかなるものなら、相川を引留て置き度かつたが、併し商賣用ではさうもなり兼ねた。で、彼女は仕方がなしに、ほつりほつり自分で手酌で飲みながら戸外の景色をみたり、間内の額をみたり、掛地をみたりしてゐたが、そのうちに、湯上りに酒をやつた報いで、もう五體にはすつかり甘い疲れが出て、節々もぬけていつてしまふかと思はれるほどいゝ氣持ちになつて來た。それにそよ〳〵と絶えず輕い微風が頰を撫でてゆくので、もう耐らなく眠氣を催して來た。
お歌はもう遠慮も會釋もなくなつて、少時の間横にならせて貰はなければ、とても辛抱が出來なかつた。で、彼女はそつと立つていつて隣を開けて見ると、先刻何やらそこで誰れかゞごとご

とやつてゐたと思つたが、もういつの間にか、そこには麻の小布團と小夜着が出してあつて、しかも艶めかしい女枕さへ添へてある。お歌は隅の隅まで氣のつく相川の親切が涙含ましいほど嬉しかつた。

階下では何うしたのか、まるで人のゐさうな物音もしない、で、お歌は初めのうちはそれへ倚りかゝつてうと〳〵してゐたが、やがてもう我慢が出來なくなつて、そつと小布團を敷いて、着のみ着のまゝで横になつてしまつた。さうしてゐるうちに、地の底へ引込まれるやうな淡い眩暈のやうなものが頭をくるめかせて來たかと思ふと、彼女はいつしかしら我を忘れてぐつすりと寢込んでしまつた。

歌の夢は方々へ飛んでいつた。青森の宿屋らしいものが現はれたかと思ふと、今度は汽車中の場面が現はれたりして、多愛のない空華は泡沫のやうに心頭を去來した。お歌はもう二三日前からの疲れがそれと一緒に誘ひ出されて來たとみえて、もう搖り起されても、引摺られても、一寸は眼が覺めさうもないほど深く熟睡してしまつたのであつた。

十五の三

誰れかゞ柔かい手でそつと肩先を撫でるのを感じて、お歌は漸う深い眠りから呼び覺まされた。ふつと眼を開けてみると、彼女の臥床の側には、いつの間にか相川がやつて來て、にやり〳〵笑ひながら坐つてゐる。彼は大分醉つてゐるとみえて、頰には紅い血の色が上つてゐた。

お歌はそれをみると、前後も知らず寢轉けてゐたのが、我れながら恥かしくなつて、そのまゝ起き上りながら、

『まあ、私、つひ草臥れてゐたもんですから、いゝ氣持ちに寢ちやつて。ほんとに相濟みません。他人樣のお宅へ上つて、ほんとに圖々しいッちやありませんわねえ。』と、笑み零れながらいふ。

相川も笑つて、

『いや、いゝさ。それだけ寢たんで、すつかり疲れが除れたでせう。さあ、それぢやひとつ顏でも洗つて、ほつぽつ出懸ける支度をしようぢやありませんか。』と、いふ。

お歌はほつれた鬢を撫でつけながら、四邊を見廻して、

『ねえ、貴方。今何時頃ですの？』と、訊く。

相川は隣の座敷へ入つていきながら、

『今ですか。もう四時一寸廻つてゐますよ。』

お歌は吃驚して、

『まあ、もうそんなになりますの。そいぢや私、四時間の餘も寢ちまひましたのねえ。呆れたもんだ。』

『はゝゝゝゝ。實はね、私、先から先と用が出來て、つひ今しがた場から歸つて來たのさ。さうすると、あんまり貴女がよく寢てゐるんで起すのも何んだと思つて、今そこで又一杯飲り出したのさ。』

『まあ、そんなら起して下さりやいゝのに、とんだ失禮をしてしまひましたわねえ。お、さう云へばもうお天道樣が大分向ふへ入つてしまひましたのねえ。うか〳〵してゐると日が暮れてしまひますわ。』と、云ひながら、起ち上つて、隣の餉臺のところへやつてくる。

相川はその顏をみて、

『これで燈火がつきやもう私達の世界さ。お歌さん。今日は又馬鹿な景氣でねえ。一寸大摑みにしても、一萬八千兩から上の商賣が出來て、ほた〳〵してゐるのさ。ねえ、お歌さん、今夜の軍用金と思つて、これ、一寸見て御覽。』と、云つて、袂から百圓紙幣のばら〳〵になつた奴を少くとも十七八枚摑み出して、お歌の方へ無雜作に突き出しながら、『お錢つてものは下品な厭なもんだが、併しかうしてもつてみると、惡くないもんだねえ。はゝゝゝ。』と小供のやうな顏をして無邪氣に笑ふ。

お歌も眼を丸くして、

『まあ、そんなにあると、お紙幣も紙屑みたいなものねえ。ほゝゝゝゝ。』と、云つて、『あの、私一寸失禮して顏を洗つて來ますわ。この顏ぢや戸外へ出られませんからね。』と、云ひながら、彼女はもうまるで我家のやうに氣輕に階下へ下りていく。

顏を洗つてしまふと、又お歌は相川と對向ひに坐つて、ちび〳〵飲み出したが、やがて少時すると階下からは小婢が上つて來て、

『旦那、お電話で御座いますよ。』と、いふ。

十五の四

相川はそれと聞くと、さも煩ささうに、

『おい、電話は何處からだ。用なら店の奴に出て貰へ。』と、いふ。

と、小婢は當惑したやうな顏になつて、

『あの、旦那。實は芳町の姐さんからで御坐いますの。あの先程も一度かゝつて參りましたんですけれど……』と、いふ。

相川はそれを聞くと、眉を顰めて、

『何に、お園からだ。そいつア猶ほ可けねえ。そんならまだ場からお歸りになりませんといつて切つちまつて呉れ。』と、云ふ。

小婢はそれなり氣の濟まないやうな顏をして階下へ降りていつてしまつたが、相川はそれと一緒に妙にそわ〳〵浮腰になつて、

『ねえ、お歌さん。兎に角支度が出來たら、急いで家を出ようぢやないか。私やかうやつてゐると、實は小面倒なことが起りさうなんで、早くどろんぢまひ度いんだ。』と、いふ。

お歌はどうもその樣子が變なので、ひよつとしたら、又お園との間に何か紛糾でも起つてゐるに相違ないと思つたが、併しそれを云ひ出すのがなんとなく憚られたので、態と知らん顏をしながら、

『ねえ、貴方、あの、私、何方へでもお伴しますけれど、でもこの風姿ぢやねえ、これぢやまるで酌婦みたいで、貴方のお顏にかゝりますわ。』と、いふ。

相川は笑つて、

『それもさうだねえ。だが着物は皆な青森へ置いて來ちまつたんだらう。それとも馬道の家へ少しや置いてあるんですか？』と、いふ。

お歌は自棄な顏で笑つて、

『馬道にや何にもないんですの。私の持つてるいゝものは、皆田原町のお藏ん中で今頃はさぞ暑がつてゐるだらうと思ひますわ。私や人情で、こんな時にや風に當てやり度いんですけれど……』

相川は口をあけて、笑ひ出しながら、

『はゝゝゝ。大きにねこいつあ、私の方が察しがなかつた。武士は相見互さ。私だつてその方の兇狀がない譯ぢやないんだから。はゝゝゝ。』と、云つて、『ぢや、お歌さん、何もかうなりや遠慮はないんだから、これからひとつ自動車でその質屋へ横着けといふことにして、店先でお召換といふやうな乙なことをやつてみたら何うだらう。ずばぬけてゐて面白いぢやないか。はゝゝゝ。』

『ほゝゝゝ。洒落てるわねえ。夏のものだから二十圓も入れたら、出して呉れるだらうと思ひますわ。それぢやさういふことにしませうか。この浴衣を置換へてね。ほゝゝゝゝ。』

『はゝゝゝ、冗談ぢやない。尤もそれだつて汗染ちやゐるが、物は悪かあないんだから、八十錢か一圓は貸すだらう。あんまりいゝお客ぢやないね。はゝゝゝゝ。』

相川はそれから手早く着換へをして、やがて自動車を一臺呼ばせて、出る支度をした。

お歌ももう一度女中の手鏡と、化粧道具を借りて顏をなをしたが、彼女はもう喋ぎきつてゐて、何も手につかないやうな有樣だつた。

自動車が來ると、二人はそれへ乘つて、先づ田原町の質屋へ廻つた。

十五の五

お歌は田原町の横丁にある水口といふ質屋へ來ると、さすがにその店へ自動車を横着けにするのも外聞が悪いので、横丁の角のところで相川に待つてゐて貰つて、自分は彼から貰つた三十圓の金を手に持つたまゝ、その店の暖簾を大急ぎで潜つていつた。

ものゝ二十分も經つと、お歌はすつかり見違へるやうな風姿に變つて、にやり〳〵氣恥かしさうに笑ひながら店口から出て來た。

相川は扉を開けながら、

『いよう。こりや驚いた。まるで田圃の紀の國屋の早變りだねえ。いゝ女だなあ。はゝゝゝゝ。』

と、冷評すやうに笑ふ。

お歌は少し極りが悪さうに、

『あら、こんな處で冷評しちや厭ですわ。運轉手さんが笑つてゐぢやありませんか。』と、云つて、車のなかへ入つて、もとの座席へ腰を下ろしながら、『さあ、もう此れでよう御坐んすわ。何處へでもお伴しませう。』と、いふ。お歌は派手な小紋の單衣に、絽縮緬の紋付を着て、献上の一重帶を緊めてゐるので、どうみても藝者といふ風であつた。

相川はすつかり喜んで、

『いや、どうも驚いたよ。これぢや貴女大したもんだ。いくら安くつもつても柳橋か芳町どこの若手の賣奴といふ形だね。』と、云つて、羽織に觸つてみながら、『これで貴女も中々いゝものを持つてゐるんだねえ。こんなのを打込んどくのは惜しいもんだ。』

『あの、こりや私が眞打の披露目をした時に、最眞の方に貰つたんですの。どうしても五十圓入れなけりや出せないつていふのを、やつと拜み倒して來たんですわ。』

『はゝゝゝゝゝ。それで浴衣はどうした？』

『浴衣ですか、ありやあなた帶と一絡げにして、利息がはりだ、取つといて下さいなッて放り出して來ましたの。ほゝゝゝゝ。皆が呆れてみてゐましたわ。』

『はゝゝゝゝ。馬鹿に威勢がいゝんだね。』と、相川も腹を抱へて、『さ、これで支度もいゝんだから、扨て行先だ。まあ、いゝ。私に任せて置くさ。なあ、おい、運轉手さん、これから大急ぎで東京驛へやつて呉れないか。』と、いふ。

運轉手はすぐさま把手を取つて車を駒形の方へ向けて馳らせていつた。

お歌は頻りに髪を氣にしてゐたが、やがて、

『ねえ、貴方。東京驛へいつてどうするんですの。そんなに遠走りするんですか？』と訊く。

相川はにこ〳〵して、

『無論でせう。貴女のその女振りをみたら、急に御意が變つて來たのさ。何處か東京離れのしたところへいつて、二三日懸りで、ゆつくり貴女を口説いてみたくなつたのさ。さうすりや萬が一ものになるかも知れないからね。はゝゝゝゝ。』

お歌はさう云はれると、凄艶な流眸で睨むやうに相川をみながら、

『あら、憎らしいわねえ。』と、云つて、彼の膝をぴしりと打つた。

駒形の通りへ出ると、もう賑かな町並は薄暗く暮れそめてゐた。

十五の六

相川は自動車が東京驛へ着くと、お歌を改札口の方へ廻らせて置いて、自分は切符を買ひに行つたが、やがて青切符を二枚指の先で弄びながらお歌の方に遣つて來て、

『ねえ、お歌さん。さ、急いで行かう。いゝ鹽梅に、十分と待たずに汽車が出るさうだから。』といふ。

お歌も驛の中の混雜に唆られて譯もなく嬉しくなりながら、

『あら、まあ、さう。ぢやすぐに向ふへ出ませう。』さう云つて、相川とつながつて改札口を出た。

プラットホームへ上ると、もう右側には長い列車が横着けになつてゐて、ぽつ〳〵旅客が乘り込んでゐるところであつた。相川は成る可く空いてゐさうな二等車を搜して、それへ乘ると、お歌と並んで座席へ腰を下しながら、

『だが、併し割に混んでゐないね。不景況が汽車にまで祟つたのかね。』と、笑ふ。

お歌はもうすつかり打解けて、